
実録「東方Project」

鶏の照焼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実録「東方Project」

【Nコード】

N9739V

【作者名】

鶏の照焼

【あらすじ】

突如幻想郷を襲った全く新しい形の大不況。

この状況を打破すべく、大妖怪にして幻想郷の賢者である八雲紫は一つの計画を練り上げた。

それは外の世界の人間をも巻き込んだ、ある意味傍迷惑なビッグプランであった……。

壮大なクロスオーバー。いまここに開幕。

キーワードはこれからガンガン増えていく方向です。

第〇話「同情するなら金をくれ」

西暦200X年。夏。

幻想郷は不況の炎に包まれた。

「やばいですね」

「やばいわね」

幻想郷を取り囲む結界の管理人八雲紫が、自分の式である八雲藍と共に頭を抱えた。

ある日を境に幻想郷内に流通する通貨の総量が減少、それによって人里に住む人間たちは満足に物も買えず、困窮の極みにあった。

「そもそもどうしてこういう事態になったのかしら。経済システムは幻想郷内だけで完結していたのに、通貨の量そのものがごっそり減るなんて」

「何者かが外の世界に通貨を流していたとしか……しかし紫様、今は原因の解明よりもやるべきことが」

「わかつているわ、藍。そっちの方は私に任せてほしいの」

紫がうつすらと、策士の笑みを浮かべた。

「何か秘策が？」

「ええ、私にいい考えがあるの」

数日後。

世界各地で、数十人もの人間が忽然と姿を消した。

「あー、テストス」

再び幻想郷。博麗神社前。うら寂びた本殿をバックにしてお立ち台を据え、射命丸文がその上に立ってマイクのテストをしていた。お立ち台を中心に集められた人たちの反応は十人十色だった。まったくの異世界に戸惑う者。これから始まることを今か今かと待つ者。それほど興味が無い者。しかし彼らに共通して言えることは、全員がこの異界に自らの意思でやってきたということだった。

ここに集まっていたのは誠にバラエティ豊かな面々であった。一目見てボクサーや格闘家とわかる者や、一見しただけでは学生や老人にしか見えない者、そもそも人間には見えない者など、ありとあらゆる種類の存在がこの場に集まっていた。

「えー、皆さま、ご静粛に、ご静粛に願います」

頃合いを見計らって、文がマイク越しに話しかける。そして暫く間をおいて、完全にざわめきが消えた頃を見計らって話し続けた。

「えー、この度は我々の主催する『東方project撮影会』にご参加いただき、誠にありがとうございます。ではまず責任者の八雲紫氏にごあいさつをいただきたいと思います」

文の真横の空間が横に裂け、その中から紫が現れゆっくりと前に出る。あるものはその妖気を敏感に感じ取り、またあるものはその容姿に見とれていた。

「八雲紫と申します。この度はこの胡散臭い企画に参加していただいたことを改めてお礼申し上げます。なお我々の存在や幻想郷の成

り立ちについてですが、これらのことはお手元に配布したパンフレットを各自参考にしてください。これ読んでも人はググれ。――さて、まずは冒頭に申した撮影会の概要について説明させていただきます」

形式ばった挨拶を済ませた後、紫が説明した内容はこうだった。

- ・まずは集められた参加者の中で二人ないし三人一組のチームを作り、それぞれ用意されたルートに従って移動してもらう。
- ・道中には同じ目的で集められたボス役の人員が配置されており、先に進むには彼らを倒していかなければならない。
- ・ボスは全部で六回登場する。六回のボス全てを攻略すればクリアであり、記念品が授与される。
- ・コンティニューは三回まで。四回先戦闘不能になったらそこで終了とする。

「以上で説明を終了します。それでは各自チームを組み、指定されたルートを通って行って下さい。皆さまの健闘を祈ります」

紫の宣誓と共に、樹上に待機していた何人もの天狗が方々に散らばる。

実録・東方Projectの撮影開始である。

第2話「EX妖魔夜行」

「まだかよあの野郎は」

参加者全員のスタート地点である博麗神社。その境内前にて、「東方紅魔郷」博麗霊夢役のコーディーがあくび交じりに呟いた。白と水色のスプライトの入った囚人服を身にまとい、手にはゴツイ手錠を付けていた。

怠惰で厭世な彼がこの企画に参加した理由は、正に「暴れられる」からであった。平和で退屈な日常に耐えきれなくなり、暴力沙汰を起こして刑務所にぶち込まれた彼にとって、この企画は日頃の鬱憤晴らしに最適だったのだ。

ちなみに他の参加者は既に神社を離れてそれぞれのステージに向かっており、結果としてここに残っているのはコーディーのみであった。だがペアで行かない限り先には進めない。そしてコーディーのペアは未だに姿を現してはいなかったのだ。

「いつになったら来るんだよあいつは……」

そう漏らして何度目かのあくびをこぼしていると、今まで彼を待たせていた原因が鷹揚に階段を上がってきた。

「ようコーディー、待たせたな！」

「遅いんだよお前は」

コーディーの愚痴を聞きながら、「東方紅魔郷」の霧雨魔理沙役のダンが両手に紙袋を抱え、笑いながら言った。

「いやあ悪いな、待たせちゃったか？」

「まったくだよ。そんなに紙袋持って、何買ってきたんだ？」

「林檎だよ林檎。腹が減ったら戦は出来ぬっていうだろ？」

ダンがそう言いながらコーディーに近づき、紙袋に手をつ突っ込んで林檎を齧り始める。

「お前も食うか？」

「……一個貰う」

ダンがコーディーに林檎を一つ投げ渡す。その林檎を齧りながら、パンフレットを広げてコーディーが言った。

「それで？ だいぶ時間もオーバーしてるんだが、これからどうするんだ？」

「簡単だ。遅れた分だけ取り戻せばいいんだよ。このダン様がいるんだ、それくらい朝飯前だぜ」

「そんなに簡単にいくかね」

「おいおい、まさか俺の実力を信じてないのか？ こう言っちゃなんだが、実は俺、サイキョー流の師範なんだぜ！」

サイキョー流。ダンが開いた格闘技の流派である。だが門下生は皆無に近い。彼がここに来たのも、これを通じてサイキョー流の素晴らしさを世間に広めるためであるらしい。

「門下生いるのかよ……」

「言うんじゃない！ まだ誰も、このサイキョー流の凄まじさに気づいてねえだけだ！」

「気付きたくねえな」

そう言ったコーディーが突如表情を陰しくして、階段の方を睨み

つける。

「どうした？」

カッソ。乾いた靴の音。

「誰が来る」

カッソ。カッソ。

急ぐでもなく、ゆっくりとした足取りで何かが近づいてくる。気配が近づくのに比例して増大していく目が覚めるほどの殺気に、先程までにやけていたダンさえも表情を硬くした。

「……お前たちか？」

やがて警戒するコーディー達の前に、階段を登りきってコート姿の男が現れた。そして静かに、だが威圧するように、男が言った。

「東方紅魔郷の自機組を担当するのはお前たちか？ 確か、ダンにコーディーだったか」

「そうだが、そういうあんたは誰だ？」

コーディーの問いに男が答える。

「ネロ・カオス。もとい、東方紅魔郷一面ボス、ルーミアだ」

「一面ボス？ 一面はここじゃねえだろ」

ダンの問いかけにネロ「カオスが目を伏せながら言った。

「いつまでたってもお前たちが来なかったからな。こちらからステ

「ジを逆走してきた」

「いいのかよ」

「いいんじゃないの？しかし済まねえな。わざわざ来てもらって。俺たちも今から行こうとしてたんだよ」

「……そーなのか」

悪びれもせずに言い放つダンに、ネロ・カオスが半分うんざりしながら言った。コーディーが続きを拾った。

「悪いな。こいつには俺からちゃんと言っておくから」

「気にするな。俺はそれほど狭量ではない」

「そうかい。で、どうする？あんたは一回戻って、それから仕切りなおすか？」

「いや、構わん——俺としては、お前たちと戦えればそれでいいのだからな」

ネロ・カオスがそう言うて目を開き、全身からどす黒いオーラを放出させる。

「……ここでやる気か？」突然のことにコーディーが顔をしかめる。

「おいおい、ちゃんとルールに従わねえと、賞品貰えねえぞ！」ダンが口を尖らせる。

「賞品？そんなものに興味は無い」ネロ・カオスが一蹴する。

「じゃあなんでそんなに決着を急ぐ？俺たちが何かしたっていうのか？」

「お前たちに恨みは無い。というより、そもそも興味も無い。お前たちにも、賞品にもな」

「興味が無いだあ？この野郎、調子に乗りやがって。じゃあてめえは何で幻想郷に来たんだよ？」

「妖精の為だ」

そう言つて、ネロ・カオスが一足飛びで二人に突っ込んでいく。腹部のむき出しの闇の中から闇色の

獣の頭部をいくつも表出させ、その鋭利な牙と魔力でもって、猛然と二人に襲いかかった。

「消えてもらっぞ」

「野郎……！」

「上等だ！」

コーデイーが手錠を外し、ダンが両手を腰ために構える。

三人の闘気が境内でぶつかり、弾け、博麗神社が爆発した。

「あちこちで始まったようね」

幻想郷の一角に居を構える道具屋「香霖堂」。そこで報告係の天狗から渡されてきた写真や資料を見ながら、紫が面白げに言った。隣に座っていた博麗霊夢がその写真の一枚を手に取りながら、ため息交じりに返した。

「あんたもかなり大胆なこと考えたわね。一体今回は何企んでるのかしら」

「少なくとも、今の幻想郷のことを憂いてのことではあるわ」

「憂いって、お金が無いこと？」

「金が無いだけだろ？そんなにヤバいのか？」

霊夢の隣で茶を啜っていた霧雨魔理沙が二人に尋ねる。それを聞いた霊夢が反射的に魔理沙に吠えた。

「死活問題よ！資本主義の中で生きる全ての生命は、お金が無ければ生きていけないの！下手をすれば、いつそ死んだ方がましな状況にすら追い詰められてしまうのよ！わからんのかこのサノバ。ツチが！」

「お、おおっ……」

「霊夢が言つと重みが違うわね」

「それより、何で君たちは僕の店にいるのかな？」

今までタイミングをうかがっていた香霖堂店主、森近霖之助がうんざりした口調で言った。

「本題に戻るわよ。紫、あんたは何を憂いて何をしようとしてるのかしら？」

「いや、無視かい？」

「いいじゃないの霖之助さん。減る物じゃないし」

霊夢の問いかけに紫がそう言いながら資料から手を離し、お茶を啜ってから答えた。

「ビデオを作るの」

「ビデオ？」

「そう、ビデオ。今までに幻想郷で起きた異変をダイジェスト形式で纏めて、ビデオ作品として外の世界で販売する。撮影協力は山の天狗、機材提供は河童たちに頼んでね。勿論、異変の当事者たちには許可をもらってあるわ。そしてそれによって得たお金で、幻想郷

の経済システムを復活させるの」

「需要あるのかよ？」

「あら、外の世界じゃ、私達って結構人気あるのよ？STG的な意味でも薄（そこまでよ！）でもね」

「（そこまでよ！）本って何だ？」

「魔理沙は知らなくてもいいわ」

魔理沙を一蹴した後、霊夢が紫に尋ねた。

「じゃあなに？外の世界から呼んできたあいつらは、全部私達の代役ってこと？」

「そういうことになるわね」

「それこそ需要あるのかよ」

「大丈夫よ。私に任せなさいな」

そう紫が自信たっぷりに言っていると、香霖堂の戸口に一人の天狗がやってきて言った。

「八雲紫様、新しい情報です」

「あら、早速来たみたいね」

開いたスキマに手を突っ込み、そしてまたスキマから手をひっこめる。そこには何枚かの資料と写真が握られていた。

「東方紅魔郷の担当からみたいね。どうやら一面が終わったそうよ」「速すぎないか？他の連中はまだ一面道中だろ？」

「確かに速いわね。まあ何が起きたかは、読めばわかるでしょ」

そう言って霊夢が資料の一つを受け取ってそれに目を通す。その視線が下へ下がる度に、顔が段々と険しくなっていた。

「な、ななななななな」

霊夢の手が震え、その目が大きく見開かれる。その光景を、残りの三人は腫れものに触るような目つきで見つめていた。

地面にいくつものクレーターが空き、そこから煙がもつもと立ち込める。

境内も本殿も粉々になり、瓦礫の散乱する博麗神社の跡地。そこでネロⅡカオスが一人、無傷で立ちつくしていた。

「意気込みは買うが、実力が伴わなければな」

そう言って肩の埃を払いながら、ゆっくりとクレーターの一つに向かう。その中心部にはコーディーとダンがヤムチャの姿勢で倒れていた。その姿を見下ろしながら、ネロⅡカオスが言った。

「どうする？コンティニューするか？」

反応が無い。

「死んだふりか？だとしたら無駄だ。俺には――」

そう言いかけて、ネロⅡカオスが息をのむ。死んだふりではない。生気が感じられない。

「これは……」

コーディーは しんでしまった！

ダン は しんでしまった！

「……むう」

想定外の事態にネロ〃カオスがうなる。別に自分の邪魔をしない限り、誰がどこで死のうがどうでもよかったが、これが原因で面倒事に巻き込まれるのは御免だった。

「まいった。どうする……？」

第三話「ご覧の有様だよ」

春である。

外の世界での暦は四月。すでに春一色である。

心地よい風が肌を撫で、新たな季節の始まりに胸躍らせる。全ての始まりの月。

だというのに、その視界に広がる光景は満天の雪景色だった。

「はつくしよん！」

肩を抱きながら、東方妖々夢、博麗霊夢役のナコルルが大きくくしゃみをする。恥ずかしげに鼻をこすりながら背を丸め、周囲を見やる。

「どうということなの？開会式を行った所は確かに春だったのに、一面の場所がこんなに冬真つただ中だなんて……」

そう言いながら自分の服と同じ柄の衣を体にまとい、寒さを和らげながらナコルルが歩き出した。

「とにかく、ボスの所まで行かなきゃ。みんなを待たせたら悪いわ」

そう言いながら、ナコルルは開始前に他の自機役の二人との会話を思い出していた。出発する数分前のことだ。

「バラバラに動くことになったけど、二人とも、大丈夫かな？」

数分前、博麗神社を出てから暫くの後。

「あのさ、あたしに一つ考えがあるんだけど」

そう言っただけで残りの二人の足を止めたのは、東方妖々夢、霧雨魔理沙役のユリ・サカザキだった。

「なんですか、ユリさん？」

「……何かしら？」

ユリの言葉に、先を歩いていたナコルと、十六夜咲夜役のリーゼロッテ・アツヒエンバッハが立ち止まる。

「あのさ、あたしたちってこれから一面ずつ攻略していくんだよね？」

「ええ、そうですけど」

「それがどうかしたの？」

二人の問いかけに、いたずらっ子のような表情を見せながらユリが言った。

「三人で一つずつ攻めていくのって、効率悪くない？」

「え？」

「いやさ、せつかく三人いるんだし、一人一面ずつ、同時にバーッと攻略していけば、一気に四面まで行けるかなーって思ったんだけど、どう？」

「一人一面担当……三人なら三面まで一息にクリア……悪くは無いわね」

「ユリさん、私は反対です」

ユリの提案にリーゼロッテが納得したように頷く横で、ナコルルがそれに反対した。

「確かに時間の短縮にはなるだろうけど、どんな相手がかかるかわからない状況で分散するのは危険だと思います。ここはまとまって――」

「何言ってるの。あたしたちくらいの実力があれば怖いものなしだつて!」

「いや、それでもやっぱり」

「私もユリに賛成」

食い下がるナコルルを遮るように、リーゼロッテがユリの意見に賛同した。

「リーゼさん、あなたまで!？」

「私も時間が惜しいの。できるなら、少しでも早く終わらせたい」

「決まりね。じゃあ別々に攻略していく方向で。ナコルルもそれでいいかしら？」

「……しょうがないですね」

こうして、ユリの提案通りに一人一面ずつ、一気に攻略することとなった。ちなみにその後の話し合いによって、ナコルルは一面、ユリは二面、リーゼロッテは三面を担当することになった。

「それにしても、道はこつちであってるのかしら？」

あの時のことを思い出しながら、ナコルルが疑問に思い始める。

どっちを向いても銀世界。目印となるものも見当たらず、ナコルルはかなり不安になった。

「相変わらず寒いし、目的地はわからないし。こんな環境を作った黒幕ってどういう人なのかしら」

寒さを紛らわせるためにナコルルが呟くと、向こうの方からざしざしと雪を踏みしめる音が響き渡ってきた。その音が大きくなるにつれて、肩幅の大きい人影が左右に揺れながらこちらに近づいてくるのが見える。そしてその人影の主は、警戒し身構えるナコルルの前に距離を置きおもむろに立ち止まった。

「な……」

二メートルはあろうかというその巨体に、ナコルルが素で驚く。

「……くろまー」

「な……！？」

その男が低い声で突如言い放った言葉に、ナコルルが本気で驚く。

「だ、誰ですかあなたは！」

「誰って、レティだよ」

「レティ？で、ではあなたが？」

「落ち着けて」

動転し抜刀するナコルルを制しながら大男が言った。

「俺はヒューゴー。そして今は東方妖々夢一面ボス、レティ・ホワイトロックだ」

「あなたが一面の……でも、ヒューゴーさん？」
「なんだ？」

落ち着きを取り戻したナコルルがヒューゴーに尋ねる。

「あなた、男の人ですよね？」

「ああ」

「レティって女性だと聞いたんですけど、どうして選ばれたんですか？」

改めてヒューゴーの全身を見る。大き過ぎる。ガタイもよすぎる。女性の身長ではない。そんなナコルルの疑問を察したのか、ヒューゴーが言った。

「ああ、ふとましいかららしい」

「ふとましい？」

「知らないんなら知らなくていいよ。……別にいいじゃねえか、レスラーがでかくてもよ。大体レスラーはでかくてナンボなんだよ」

そう愚痴るヒューゴーを前に、ナコルルが言った。

「あの、ヒューゴーさん」

「ん？」

「そろそろ、始めませんか？寒いんで」

「あ？ああ、そうだな。確かに寒いぜ」

「あなたの場合はその格好なのがいけないと思います」

タンクトップ姿のヒューゴーを見やりながらナコルルが言う。

「うるせえ！こいつは俺の戦闘服なんだ。これでなけりややる気が

起きねえんだよ！」

「そ、そうですか」

「いいから始めるぞ。とつとと速く終わらせて、俺は風呂に入る！」

「そう簡単にはやらせません。私にだって意地がある……！」

「おもしれえじゃねえか。いくぜ！」

ヒューゴーとナコルルが正面からぶつかり合う。互いの鬨気がぶつかりあい、周囲の雪を巻き上げながら上空へと吹き飛ばしていた。

「にゃーん！」

そのころ、ユリは二面ボス担当の猫のような女性と相對していた。

「えーと、あなたがボスでいいのかな？」

「そうだよ？ 私フェリシア！ でもいまは二面ボスの橙って呼んでねにゃーん！」

「フェリシア……ウソ、本物なの！？」

「モチ、本物のフェリシアだよ！ にゃーん！」

歌って踊れるダークストーカー、フェリシア。ブロードウェイで大活躍し、また孤児院を開いてシスターもこなす彼女のことは、ユリも良く知っていた。それだけに、ユリは彼女を一目見た時から気になっていたことを聞くことにした。

「あ、あの、フェリシアさん」

「呼び捨てでいいよ。それで、何かな？」

「あ、そうなの？……じゃあフェリシア」

「うん」

「それってコスプレなの？」

ユリの言葉に、フェリシアが頬を膨らませ怒りながら言った。

「むー、失敬な！これはあたしの生まれたままの姿なの！ワーキャットっていう、ダークストーカーの中の一つ族なの」

「そうなんだ……でもそれにたって、随分露出多いよ」

「そう？むしろこれが普通だと思っただけど」

「いや、派手すぎるって、それ」

「私達の中じゃフツーなんだけどな……」

自分の手足をまじまじと見つめるフェリシアにユリが苦笑いを浮かべていると、突如フェリシアの体から何かの電子音が聞こえてきた。

「え？何？携帯の着信音？」

「あ、ごめん。ちょっと待っててね——バトルミュージカルの支配人さんからだ。どうしたんだろうっ？」

そう言っただけ携帯を取り出し、フェリシアが明後日の方を向いて話し始めた。

「うん……うん……ええええええええ！？」

数分後、フェリシアが絶叫を上げた。

「ちょ、どうしたの？」

「明後日にやるバトルミュージカルの予定が繰り上がっちゃって、

今日の夜に急きょ変更になっちゃった……」

「そんな！今から行かなきゃ間に合わないじゃない！」

「ああどうしようどうしよう、こっちの仕事もしなきゃいけないし、一秒でも早く向こうに行かなきゃいけないし……」

フェリシアが慌てながら、大急ぎで携帯を畳んだ。

青ざめた顔で、リーゼロッテが携帯電話を畳んだ。

彼女と相對するように立った少年が、同じように青ざめた顔で携帯電話を畳んだ。ポケットに手をつ込み、音楽プレーヤーを首からかけ、片方の目を前髪で隠した少年だったが、彼の存在は今のリーゼの脳内からは消滅していた。

「どうしよう……」

唇をわずかに震わせながら、リーゼロッテが呟く。彼女は、今日が自分の一番の友人である愛乃はあとの誕生日であることをすっかり忘れていたのであった。

そもそも彼女がこの企画に乗ったのは、これをクリアした際に得られる賞品をはあとにプレゼントするためであった。

（待っててね、はあと。とっておきを持っていくから……）

しかしいざ三面をクリアしようと意気込んだ矢先、彼女にかかってきた一本の電話がそんな彼女の気持ちを打ち砕いた。

「あ、りぜっち？今日空いてる？」

「いや、今日わたしの誕生日だから、りぜっちも誘おうと思って」
「え……仕事……？外国……？」
「そうなんだ……じゃあ、しかたないよね……」
「ううん、わたしの方こそごめんね！仕事中に変な電話しちゃって」
「じゃあ、バイバイ！あ、りぜっちのケーキ残しておくから、後でわたしの家に来てね。絶対だよ！」
はあとの優しい声が深々と胸に突き刺さる。

独りよがりな思いにばかり目が行って、目先にあるそれよりも大事な事に気付かなかつたなんて。りぜは己に対する死にたいほどの怒りと後悔を抱えていた。

「……やばい」

どうしようもない気持ちを抱えたままりぜが生気の抜けた顔で佇んでいると、目の前の少年が俯きながら、弱弱しい声で呟いた。

「え……？」

「……彼女の誕生日のこと考えてなかった。死にたい」

「……あなたも、そうなの？」

驚いたようにりぜが声を上げる。それにつられる様に、少年が顔を上げる。

「あなたもって、君も？」

「……ええ、まあ……」

「賞品をプレゼントしようって、考えてた？」

「そのつもり、だったんだけど」

りぜが深くため息をつく。少年も同調するように首を横に振っ

た。

「恋人の誕生日忘れるのって、無いよね」

「……そうよね」

「どうしたら機嫌、元に戻してくれるかな……」

「私に聞かれても、困る……」

むしろ知りたいのはこちらの方だ、と言わんばかりに、リーゼが少年の言葉を突き放す。それを聞いた少年がため息と共に一際大きく肩を落とした時、

「何やってるのよあんた達。まだここ道中でしょ？早く済ませなさいよ」

肩に人形を乗せ分厚い本を抱えた少女が、森の中から現れると同時に呆れ気味に声をかけてきた。

第三話「ご覧の有様だよ」（後書き）

キャラクター紹介（前回分含め）

ダン（登場作品：ストリートファイターシリーズ）

カプコンが生み出した屈指のネタキャラ。重い背景を持つが基本コメディリリーフ。決める時に決めようとするけどイマイチ決まり切らない人。

コーデュー（登場作品：ファイナルファイトシリーズ）

元は恋人を助けるために悪の犯罪組織「マッドギア」に戦いを挑んだ好青年であるが、いざ街が平和になると退屈な日常をもてあまし、暴力事件をおこして刑務所に入れられてしまう。その時の彼は、かつての姿とはかけ離れた怠惰で皮肉家となっていた。

ネロ・カオス（登場作品：月姫）

元は動物学者であり、己の探究のために吸血鬼へと成り上がった存在でもある。基本的に自らの研究テーマの追及にしか興味はないが、経歴ゆえか珍しい動物に出会うと態度を一変させる。

ナコルル（登場作品：サムライスピリッツシリーズ）

アイヌの生まれであり、村の人間たちの中でもひととき優れた力を持った巫女。邪悪な存在の復活を告げる自然の声を聞き、村を代表して旅に出ることになる。格ゲーにおける元祖清純派ヒロイン。

ユリ・サカザキ（登場作品：龍虎の拳シリーズ）

主人公リョウ・サカザキの妹。とにかく活発で元気な娘。昔の経験からかハゲが苦手。極限流を習って日は浅いが、才能はリョウをも凌ぐとされている。

リーゼロッテ・アツヒエンバッハ（登場作品：アルカナハートシリーズ）

無口、無表情な暗殺者。元は仕事として愛乃はあとを拉致するため彼女に近づいたが、あることがきっかけで彼女に（いろんな意味で）べた惚れすることになる。

第四話「ごらんのありさまだよ……！」

横一閃の斬撃を腹に食らった巨体が、ゆっくりと雪の上にくず折れる。

「が……っ」

ヒューゴーの意志はまだ死んでいない。魂は戦いを求めている。しかし体の方はそうはいかなかった。

「畜生……ッ！」

やがて大きな音をたて、ヒューゴーの体が白いマットに沈んだ。彼の頭の中で、戦いの終わりを告げるゴングが鳴り響いたような気がした。

「やった……！」

肩で息をつきながら、ナコルルが嬉しそうに顔をほころばせながら刀を納める。肩に停まった相棒の鷹「ママハハ」も、嬉しそうに鳴き声を上げた。

「蝶のように舞い、蜂のように刺す、か。やられたぜ」

仰向けに倒れたまま、ヒューゴーが呟く。その声の調子はどこか楽しげだった。そして軽い口調のまま、ナコルルに話しかけた。

「やるじゃねえか小娘。あんなスピードで動かれちゃどうしようもねえ」

「いえ、あなたのパワーも中々でした。次に投げられていたら私の勝ちは無かったかもしれない」

「謙遜すんな。お前の姿を追えなかった俺の練習不足だ」

そこでヒューゴーが表情を硬くしながら、ナコルルに若干強い語調で言った。

「負けた俺が言うのもなんだが、お前、もう少し自重した方がいいぜ」

「自重？何をですか？」

「やたらめったら突進する癖だよ。何も突っ込むだけが攻めじゃねえんだ。時には一度そこに踏み止まって、自分ができる最善の策を考えることも大事だってことだ」

「……そんな、いいんですか？敵に塩を送るような真似をして」

このガキ、わかってるじゃねえか。

ナコルルの言葉を聞いたヒューゴーが笑みをこぼす。

「俺は自分より強い奴と戦いたいんだ。次に会った時、お前が俺より強くなつてなきゃ意味ないだろ？」

「言いましたね？」

「俺だつて、このまま負けっぱなしで終わらせるつもりは無えぜ」

「そうですね。では、これが終わった後で再び」

「ああ、待つてるぜ。だからさっさと終わらせて来い」

「はい。行ってきます！」

そう言つてナコルルが次のステージに向けて走り出す。そして暫く経った時、背後から猛獣の雄叫びのような大声が轟いてきた。

「次はブツ潰してやるからな！」

所変わって外の世界。とある大ステージ。

ここでは連日様々なショーやイリュージョンが催され、駆けつけた観客たちを余すところなく興奮と感動の渦に巻き込んでいった。そして今日も会場席には親子連れやカップル、その筋のマニアたちによって埋め尽くされていた。

「さあ、お立ちあい！間もなく本日最後のショータイム！稀代のミュージカルスター、フェリシアのご登場だア！」

派手な服を身にまとった司会者が、マイク越しに大声で叫ぶ。すると半円形のステージの各所から真上に煙が上がり、上部にある七色のスポットライトがステージを様々に彩っていく。そして爆音と共に花吹雪が舞い上がり、ステージ背後の星空を描いたベニヤ板を突き破るようにしてフェリシアが姿を現した。

「イエーイ！」

イエエエエエエエエーイ！

その瞬間、場内のボルテージは最高潮に達した。

「みんなー！今日は来てくれて、本当にありがとう！」

フェリシアが地声でそう言い、周囲から歓声が上がる。その声が収まるのを見計らい、フェリシアが続けた。

「ところで、今日はなんと、特別ゲストを迎えているの！みんなは極限流って知ってるかな？」

知らない！

関係者が氣いたら卒倒しそうな台詞を、見に来た子供たちが声を張り上げて口に出す。

「今日は私ね、その極限流の人と一緒にバトルミュージカルをやろうと思います！じゃあ紹介するね！私が旅行先で出会った格闘家にしてお友達！ユリ・サカザキちゃんです！」

「うんしょっと……イエーイ！ブイッ！」

フェリシアが開けた背景の穴からユリが現れ、姿を見せると同時に満面の笑みと共にダブルピースを見せる。

その屈託のない笑顔を見た瞬間、観客の三分の二は彼女の味方になった。

「……しかし、流石は大スターやな」

観客席の一つに腰を下ろし周囲を冷静に見回しながら、ロバート・ガルシアが感心したように呟いた。

「出てきただけで客をこうも惹きつけるとは、並の奴じゃできへんことや。あの子もあの子なりに努力したんやなあ」

我が子の成長を見守る親のような心境でしみじみと呟く。

だが彼は、本来一人でミュージカルに足を運ぶような性分ではなかった。そんな彼がここに居るのは、数時間前、突如としてロバートの私邸前にユリとフェリシアが現れたことがきっかけだった。

驚くロバートを尻目に、「会場まで連れて行って！」とユリが両

手を合わせて頼み込んできたのだ。同じ極限流を会得せんとする仲間であると同時に、自身のガールフレンドの頼みである。男ロバートは断らなかつた。なんの前触れも無く現れた理由については、「偶々現れた隙間の人に頼んだらオツケーしてくれた」とユリが軽い口調で話したので、ロバートはたいして気にしなかつた。

そして会場前。別れを告げようとしたユリの手を掴んで、フェリシアが「恩返しをさせてほしい」と言ってきたのだった。外の世界に戻って、そこからロバートに送ってもらおうと持ちかけたのはユリであり、幻想郷での企画も賞品も投げ捨てて自分のことを気にかけてくれた彼女に対して、フェリシアは礼がしたかつたのだ。

その時、ユリが一言。「じゃあ私もステージ出てみたい！」

そして、今に至る。

ちなみに背景を突き破って現れる演出はユリが考えたことである。

折しもステージ上では、ユリとフェリシアによるバトルミュージカルが始まっていた。ミュージカルと言っても台本通りに進むものではない。本気と本気をぶつけあう、正真正銘のストリートファイトだった。

「うわあ、二人ともガチやで」

それを見たロバートが素で引くほどのものだったが、ステージの二人と観客はそんなことお構いなしに盛り上がりまくっていた。

ユリが霸王翔吼拳をぶっ放し、フェリシアがそれを大ジャンプで飛び越える。

その隙についてフェリシアが頭上から爪で切りかかる。しかしギリギリ硬直の解けたユリが前転をして、紙一重でそれをよける。

着地したフェリシアは休むことなく体を反転させ、ユリの方を向くと同時に体を丸め猛スピードで突撃する。

そして眼前で飛びかかるフェリシアの両腕を、ユリが同じく両手

でがつしと掴む。フェリシアの勢いを殺せなかったユリが、掴んだままの体勢で数十センチ後方まで足を滑らせる。そしてすんでのところで足を踏ん張らせ、ユリとフェリシアが必死の形相で額をぶつけ合う。

「いい加減さあ、ギブアップしちやいなよお……！」

「悪いけど、自分から負ける気は無いんだよねえ……！」

女と女の意地がぶつかり合う。どちらも退く気は無い。この勝負は長引きそうだ。

やれやれとため息をつくロバートを尻目に、観客たちは大歓声を上げていた。

魔法の森の一角にある、洋風の一軒家。

その家主であるアリス・マーガトロイドは、後悔に打ちひしがれている外の世界からの住人の言葉に耳を傾けていた。

「どうしよう。はあとに嫌われる……」

「失敗なんて誰にでもあるわよ。ちゃんと謝って、次回からその反省を活かせばいいじゃない」

「大丈夫なのかな？」

「大丈夫よ。もしそのはあとしてのがそれくらいのことを許せないような奴だっていうんなら、むしろこっちから縁を切った方がいいわね」

バツサリと切り捨てるアリス。その言葉を聞いたリーゼが、静かに語気を荒げて言った。

「はあとはそんな人じゃない……！」

「そう？ だったら悩む必要無いじゃない。はい、あんたの心配はこれで解決」

「うぐ……っ」

ぐつの音も出ずに沈黙するリーゼ。次にアリスはキタローに目を向けた。キタローとは外の世界における少年のアダ名であり、アリスはこの家に向かう途中でそのことを彼から聞いていたのだった。

生気の抜けた顔でテーブルの一点を見つめるキタローを見て、アリスがため息交じりに言った。

「あんたも辛気臭い顔しないの。男でしょ？ そんな繊細でどうするの？」

「どうでもいい」

「うるさい。ネガるな。背筋を伸ばせ」

「……」

「あんたもリーゼロッテと一緒に。ぐだぐだ悩む前に、やることがあるでしょ？ 何だと思う？」

「謝って反省して次回に活かします」

「はい、結構」

若干棒読みなのが気になるが、キタローの言葉にアリスが満足気に頷く。本音としては他人の惚気話にあまり付き合いたくなかったのだが、世話焼きな性分が災いして、結局彼らの話を最後まで聞く羽目になってしまっていた。

そうこうしている内に、人形たちの手によって三人の手元に紅茶の入ったカップが置かれる。それを一口啜ってから、アリスが二人に向けて言った。

「まあ確かに、自分の気持ちを落ち着ける時間も必要よね。どうせだから暫く家に居る？」

「いいんですか？」

「構わないわよ。そんな真っ青な顔した人間を魔法の森に放りだすのも気が引けるしね。寝ざめ悪いし」

「あの……ありがとうございます……」

「いいえ、どういたしまして」

この日、結局アリスは二人に夕飯まで振る舞うことになるのだが、それはまた別の話である。

ナコルル↓四面へ（二面、三面ボス戦闘放棄のため）

ユリ・サカザキ↓失格

リーゼロッテ・アツヒエンバッハ↓失格

第四話「ごらんのありさまだよ!!!」(後書き)

ヒューゴー(登場作品:ストリートファイターシリーズ)

ドイツ出身のプロレスラーであり、最初は新たなパートナーを見つけるため、次は新軍団設立のためにストリートファイトの世界に足を踏み入れる。ファイナルファイトにも敵役として登場しており、かなり手ごわい。

キタロー(登場作品:ペルソナ3)

月光館学園高等部二年に転校してきた、本作の主人公。プレイヤーの分身であり、プレイヤーの腕次第では絵に描いたような天才イケメンにもなれる。彼には明確な本名は設定されておらず、キタローとは彼の髪型に基づくあだ名である。

フェリシア(登場作品:ヴァンパイアシリーズ)

キャットウーマンと呼ばれるダークストーカー(魔界の住人)の一人であり、天真爛漫。夢を決して諦めず、自らの力で人間界で大スターになった努力の人。また自ら孤児院を開きシスターも務めているヴァンパイア最大の良心。

第五話「バースト」

東方永夜抄五面。竹林。

月光の下、鈴仙・優曇華院・因幡役の八神庵は待ち続けていた。永夜抄自機役を引き当てたあの男が来るのを、只管に待っていた。己の最も殺したい男。草薙京。奴を八つ裂きにするためだけに、庵はこのくだらない企画に参加したのだった。

だが、自分がこの感情にこうも掻き立てられるのは、古より続く血の宿命からではない。ただ個人的に気に食わないからだ。気に食わないから殺す。それだけだった。

「早く来い、京……」

その場から一步も動くこと無く、庵は竹林の向こう側をじっと見据えていた。

「おいすー^^」

スキマを操り、主催者の一人である八雲紫が庵の元に現れたのは、それから数十分たってからのことだった。相変わらず唐突な出現だったが、庵の眼中にはなかった。

「失せろ」

「つれないわね。もう少し面白いリアクションしてくれてもいいんじゃないかしら？」

「失せろと言っている。殺されたいか？」

「あら、私との勝負は、彼と戦う前の準備運動代わりってことかしら？言ってくれるじゃない。でも残念」

紫が口の端を吊り上げながら、愉快そうに言った。

「彼とはもう戦えないわよ」

それを聞いた庵が、目を見開き、僅かに顔を強張らせた。

「どういう意味だ」

「言葉通りの意味よ。彼はもうここには来ない」

「なんだと？」

「だって全滅したんですもの。四組全部」

永夜抄の自機枠は二人一組であり、さらにそれが全部で四組存在する。そして今回、この自機組に選ばれたのは

・ K O F チーム

草薙京

大門五郎

・ 龍虎チーム

リョウ・サカザキ

キング

・ 餓狼チーム

テリー・ボガード

ロック・ハワード

・ストリートファイターチーム
リュウ

ケン

そうそうたるメンバーである（誰が何の役をやっているのか想像してみよう）。彼らは全員が超一流の格闘家であり、己の力に絶対の自信と覚悟を持っていた。もちろん慢心など欠片も無い。だから今回全滅したと言っても、彼らに落ち度は何も存在しなかった。

WARNING!

THE HUGE BATTLE SHIP

GREAT THING

APPROACHING FAST!!

一面ボスが酷かったただけである。

話を聞き終えたとき、俺は内心で冷や汗をかいていた。

「なぜそれを一面ボスにした？」

「永夜抄のボス決め担当がかなりの面倒臭がりだね。誰をどこに入れるかをくじ引きで決めたのよ」

各作品のボス役を誰にやらせるかは、その作品の元のボスが決めることになっていた。

「ふざけた話だ」

「ええ、本当にね。とにかく一面で自機組は全滅。コンティニューも使い果たしてしまったわ。残念だけれど、永夜抄の撮影はこれで終了ね。まあ迫力ある絵が取れたからこちらとしては万々歳なんだけど」

じゃあ、お疲れ様。そう言って去ろうとする紫の肩を庵が掴む。

「ふざけるな。わざわざここまで来た俺の立場は一体どうなるんだ」
「悪いけど、骨折り損ね。まあ途中でガメオベラになって後半のボスの出番が無くなるのはSTGじゃよくあることだから」

「それで俺の気が済むと思っているのか……！」

眉間にしわを寄せ、庵があからさまに殺気をぶつける。それを見た紫が観念したようにため息をつきながら、諭すように言った。

「そんなに戦いたいのかしら？」

「なに？」

「そんなに彼と戦いたいのかしら？あの草薙京と」

「……当然だ」

それを聞いた紫が笑みを浮かべる。信用できない不敵な笑みだった。

「なら、私に良い考えがあるわ」

紫に連れられ庵が向かったのは、六面の舞台である永遠亭だった。

長い廊下を渡り、一つの戸をあける。

「ん？……おお、おやおやこれは八雲紫さん！こんな夜分にどうかされたのですか？」

そこで庵は異形に出くわした。

「先生、その節はお世話になりました。おかげで家の式の猫又もすっかり良くなつて」

「いえいえ、患者の病を取り除くことが医者勤めですから。当然のことをしたまです。ところでそちらの赤髪の青年は一体……紫さん、彼も患者ですか？」

紙袋を頭に被り、自分の背丈ほどもあるメスを担いだ足長の男。膝を曲げていたために身長は自分と同じくらいであったが、真つ直ぐ伸びたら四、五メートルはあるだろう。

「いえ、彼は五面役の八神庵です。それと今日ここに来たのは少し私的にやりたいことがございまして。——それはそうと先生、彼にも自己紹介して頂けないかしら？」

「おおそうでしたか！あ、申し遅れました。ワタクシ永夜抄六面ボスをやっております、八意永琳役のファウストと申します。あ、こう見えても一応医者をやっておりますんですよ私。モグリですけど」

とりあえず、庵的には化け物だった。

そこに居座りなれなれしく話しかける物体を見て、庵は威嚇するように殺気を発した。それを制しながら、紫がファウストに朗らかに話しかける。

「ところでファウスト先生。先程申したように、ひとつお願いがあ

るのですが」

「おや、何でしょうか？私に出来ることならば、喜んでお手伝いいたしますが」

「なんてことはありません。彼と――俺と勝負してほしいのです」

「どういふつもりだ？」

俺が不愉快そうに紫に言う。それをなだめるように、紫が俺に向けて言った。

「まあまあ、別に彼を草薙京の代わりにしようって訳ではないのよ」

「だったらなんだというんだ。何の理由も無く戦うのは、はっきり言って時間の無駄だぞ」

「理由はあるわ。今からそれを説明するから」

紫が澄まし顔でそう言ったかと思うと、すぐにいたずらっ子のように顔を緩めて俺に言った。

「あなた、逆走してみない？」

「逆走だと？」

「ええ。普通STGは一面から初めて最終ステージまで向かう物なんだけど、あなたは逆に、この最終ステージの六面から初めて一面まで突っ走るの。当然ラスボスは――」

「クジラか」

「草薙京よ。クジラは最終面中ボスでしかないわ」

「もしやっただとして、貴様に何の得がある？」

「まあある意味で永夜抄撮り直してところもあるけど、それ以前に面白いからよ。STG逆走する自機とか聞いたこと無いしね」

「……」

俺は仏頂面のまま紫の話を聞いていた。紫がダメだしとばかりに

庵に話しかける。

「何事もチャレンジ。やってみる価値はあるはずよ」

目を閉じ、庵が押し黙る。やがてゆっくりと目を見開き、庵が口を開いた。

「……いいだろう」

閑話休題。

東方紅魔郷二面。霧の湖。

いつもは静かなこの湖だったが、今日はなぜか甲高い笑い声が一面に轟いていた。

「おーっほっほっほっ！おーほっほっほっほっ！」

湖の中央に鎮座する蛸型VA「スーパー8」。頭頂部のハッチを開き、その縁に片足をかけてそこに陣取るのは自称・悪のプリンセス、デビロット・ド・デスサタン？世。一応紅魔郷二面ボスのチルノ役である。

お姫様が着るような典型的な白いドレスを身にまとった彼女は、辺りを憚ることなく笑い声を上げ続けていた。

「あの、姫様、どうしてそんなに笑っておられるのですか？」

「ふふん、悪物は意味も無く笑いながら登場するものと決まっておるのじゃ！」

爺やである地獄大使の意見にそう答えてから、一際大声で笑い出すデビロット。するとスーパー8のなかに籠っていた天才科学者のDr・シュタインが真上からデビロットに言った。

「姫様、二時方向より接近する物体がございます!」

「なんじゃと!?VAか!?!」

「いえ、熱反応からして、生身の人間の様でございます」

「姫様、恐らく自機組の面々かと思われます。姫様を倒さんと、やってきたのでしょうか」

「ほほう、わらわを倒すとな?面白い!」

そう言うなり、デビロットは腕を組み、胸を張りながら大声で言い放った。

「来るがいい、貧弱な自機共よ!この最強のVA、スーパー8と、われら最強のデビロット一味がそちらを粉々にしてくれようぞ!」

「姫様、そろそろ目標と接敵致します!中にお戻りください!」

「うむ!」

勢いよくデビロットが中に入り、地獄大使もそれに続く。そして三人が中に入った時、外部スピーカーが謎のノイズを拾い上げた。

「なんじゃ?なんの音じゃ?」

「何やら、例の目標が発しているみたいです。感度上げてみます」

スピーカーの感度を上げる。風の吹きつける音や水が機体を叩く音に混じって、ぼそぼそと人間の声が聞こえて来た。

「……か」

「はい？」

「……らか？」

「何を言っとる？ちんぷんかんぷんじゃ」

デビロットが自分で更にスピーカーの感度を上げる。

「ジンジャツブシタノハオマエラカ？」

数日後、湖から機体の残骸が発見された。搭乗者の姿は見つからなかった。

第五話「バースト」(後書き)

八神庵(登場作品: KOFシリーズ)

KOF95より登場した草薙京のライバルキャラ。そのキレた言動や台詞回し、三段笑いなどによって、それまでの美形ライバルキャラの常識を打ち破った、ある意味偉大な存在。性格は短気で暴力的であり、執拗なまでに京の命を狙っている。

草薙京(登場作品: KOFシリーズ)

KOFシリーズ(正確にはオロチ編)の主人公である。かつて地球意思を封じた三家の一つ草薙家の末裔であり、炎を操ることができる。皮肉屋で努力嫌いだが、頑張る時はなんだかんだで頑張っている。

大門五郎(登場作品: KOFシリーズ)

かつては柔道を極めた男であったが、異種格闘技選手権で京に敗れたことが縁で彼と、同じく京に敗れた二階堂紅丸と共にチームを結成、KOFに出場することになる。性格は温厚で紅丸と京の仲を取りなすチームの大黒柱的存在。地雷震のバグに定評がある。

テリー・ボガード(登場作品: 餓狼伝説シリーズ)

SNK初の格闘ゲーム「餓狼伝説」の主人公であり、リュウと共に格闘ゲームを代表する存在。陽気で明るく、誰からも好かれる人気者。ちなみに今作の彼はMOW準拠です。うっお——っ!!——くっあ——っ!!——ざけんな——っ!

ロック・ハワード(登場作品: 餓狼伝説シリーズ)

最新作「餓狼MARK OF WOLVES」の主人公であり、かつてサウスタウンを牛耳っていた「暗黒街の帝王」ギース・ハワー

ドの息子。サバサバしているが、内に熱い魂を秘めた少年。しかし体を流れる暗黒の血に苦しむ姿もみせる。厨二言うな。

リヨウ・サカザキ（登場作品：龍虎の拳シリーズ）

本作の主人公であり、金髪とオレンジ色の道着が特徴。真面目な好青年であるが、真面目すぎて融通が聞かない一面も持つ。父であり師範であるタクマ・サカザキと妹のユリ・サカザキを家族に持つ。霸王翔吼拳を使わざるを得ない。

ロバート・ガルシア（登場作品：龍虎の拳シリーズ）

同じ極限流を習うリヨウの親友であり、ライバル。元は大財閥の御曹司であったが、自らの力で人生を切り開こうと思い極限流に入門した。彼が関西弁を話すのは、イタリア語訛りの英語を表現しようとしたためである。

キング（登場作品：龍虎の拳シリーズ）

女性のムエタイ使い。勝負の世界には男も女もないという信念を持ち、一見厳しそうに見えるがその実は弟思いのいい人でもある（アニメ？聞こえんなあ）。KOFではリヨウとはラブコメのような関係が続いている。おい、結婚しろよ。

リユウ（登場作品：ストリートファイターシリーズ）

もはや説明不要。「俺より強い奴に会いに行く」を地で行くミスター格闘ゲーム。非常にストイックで常に鍛錬を欠かさないが、一方で格下の相手や押しかけ弟子にも普通に助言を与えたりするなど、面倒見は良い。「波動拳」「昇龍拳」が格ゲー界に与えた影響は計り知れない。

ケン（登場作品：ストリートファイターシリーズ）

全米チャンプにして、赤い道着を身にまとったリユウのライバル。

リュウとは対照的に陽気で明るく、思いこみすぎるリュウのガス抜きを務めることもある。既婚者で、美人な妻を持つ。リア充爆発しろ。

第六話「対戦で一撃使うなよ」

再び永遠亭。正面入口前にはファウストと俺、そして審判役の永琳とギャラリー大量の兎たちでこった返していた。だが、言い出しつぺの紫は既にどこかに消えていた。

「無責任な奴よね。煽るだけ煽つといて、いざ始まったら自分とはんずらするなんて」

「少なくとも、今の状況を作り出したのはあなたのせいだと思うのだけど？」

「あーあー、聞こえないーい」

いつの間にかギャラリーに混じっていた蓬莱山輝夜が発した愚痴に対して、永琳が釘をさす。だが輝夜は懲りなかった。

「ていうかさ、あの程度で音を上げるなんて、外の世界の格闘家って貧弱すぎない？私としてはもうちょっと粘って欲しかったんだけどねー」

「あなたがやったことは、ズブの初心者シューターにチュートリアルと称してヒバチをぶつけるようなものなのよ？少しは反省して」
「無駄話は後にしろ。さっさと始めるぞ」

蓬莱人二人の論争を俺が一蹴する。その俺の若干キレ気味な態度に、永琳は彼に従った方が利口と判断した。あんな奴にこんな所で暴れられたらたまったものではない。

「じゃあ始めてもらうけど、ルールは前に話した通りよ。時間無制限、勝負は私が戦闘不能と判断した時点で終了、そしてその時立っていた人が勝者という訳。これでいいわね？」

「私としても異論はありませんな」

「不正はするなよ」

「ご心配なく。マズイと思ったら即座にドクターストップをかけるわ。誰であってもね」

「大丈夫よ。永琳は不正なんか絶対しないから」

「じゃあ始めるわよ。二人とも向かい合って」

兎に紛れて、輝夜が他人事のように言っただけのける。そしてそれを無視するように永琳が二人に向けて言い放った。

「ちよつと永琳、無視しないでよー」

「黙れ小娘」

「輝夜さん、少し静かにしていただだけませんか？」

「お前ら一枚天井でボコるは……」

庵とファウストも輝夜を無視して向かい合い、お互いに構えを取る。周囲の空気が瞬く間に張り詰め、ざわついていたギャラリーも一気に押し黙る。

「情ケ無用——」

極限の静寂の中、永琳がゆっくりと右手を真上に伸ばし、

「戦闘開始！」

その静けさを断つように、勢いよく振り下ろした。

その場にいた全員の予想に反し、ゴングが鳴ると同時に動いたのはファウストの方だった。勢いよく庵の眼前に踊りだし、奇声のような叫びを発しながら両手で構えたメスを庵の頭頂部めがけて振り下ろす。

「ふん！」

だが庵はそれに対して即座に反応した。左拳に炎を纏わせ、何の躊躇も無くメスを鷲掴みする。紫色の炎がメスに移り、握られた部分の刃が見る見るうちに溶かされていく。

「ほほう、炎の使い手ですか」

「嫌な奴思い出したわ」

輝夜が苦い顔をする中、ファウストがメスを離しメスの上に乗り上げ、それを足場にして真上に飛び上がる。

月をバックに、ファウストの影が映る。頂点に達した影が一瞬大の字を取り、長すぎる脚を曲げ身を丸める。胸の前で交差した両腕の先には、箱の様なものが握られていた。

「プレゼントDEATH！」

ファウストが叫びながら、カラフルにラッピングされた箱の一つを勢いよく庵に向けて投げ飛ばす。庵はポケットに腕を突っ込んでその場に立ちつくしたまま、それを待ち受けていた。

庵の眼前にプレゼントが迫る。箱の中から閃光が走る。スイッチが入ったように庵が飛びのく。

飛びのくと同時に、その箱が大きな音を立てながら爆発した。地面を抉り、周囲にもうもうと土煙を巻き上げる。両腕で前面をガードしながら煙の中から後ろ向きに飛び出した庵に、ファウストがもう一つの箱を握ったまま上空から襲いかかった。

「こざかしい」

落下しながらファウストが投げ飛ばした箱を、片膝をついた姿勢の庵が片手で横に弾く。そして軌道を変えられた爆弾箱が、あろうことがギャラリーの方へと突っ込んでいく。

「う、うわぁ！」

「下がってなさい」

慌てふためく兎を押しつけ、自分の背丈以上ある金色の巨大な板を引きずりながら輝夜が前に飛び出す。彼我の距離が約四メートルの地点で輝夜が立ち止まる。

「新難題『金閣寺の一枚天井』！」

そして力強く叫ぶと同時にそれを片手で持ち上げ、箱めがけてそれを投げつけた。天井と箱が接触し、爆音と土煙を上げる。

兎達が啞然とし、永琳が胸をなでおろして構えていた弓を下げる。そして残像が映るほどの超スピードで拳の打ち合いを続けていた二人に、輝夜が澄まし顔で言った。

「あんたたちにもぶつけてやろうかしら？」

「そこに居る貴様らが悪い」

「下がってただけませんか？私も手加減できそうにないので」

庵が悪びれもせずに、ファウストが平然と言ったのける。それを聞いた輝夜が永琳に顔を向けると、それだけで察した永琳が兎達を

永遠亭の中に避難させる。そしてその間も、二人の攻防は続いていた。

ファウストが俺のパンチをいなすと同時にしゃがみこみ、左ひざと両手を地面につけ長い右脚を鎌のように振り回し、俺の足を払おうとする。俺は瞬時に飛び上がったそれをかわし、落下と同時に炎を纏わせた両手でファウストの頭に掴みかかる。腕と紙袋が触れる寸前、ファウストは両手で地面を叩き、その反動を利用して勢いよく後ろに飛び退く。攻撃を外し、前のめりになった俺が顔を上げた先に居たのは、両足を斜め前にピンと伸ばしながら両手を地面につけ、体を支えているファウストの姿だった。

「化け物め」

「失敬な！それでも私は真人間ですよ！」

どの口がそう言うんだ。外に残って観戦していた輝夜はそう突っ込もうとしたが、あえて言わないことにした。

と、ファウストが軽く飛び上がり、地に足をつけてやっとまともな姿勢に戻る。深々と膝を曲げ、腕をだらんと前に垂らした姿は相変わらず奇っ怪だったが。

「しかし埒があきませんね。小技の出し合いでは決着がつかない」

「同感だな。それに俺にはまだ後が控えている。ここでこれ以上油を売るのも時間の無駄だ」

刃先の溶けかかったメスを足で蹴り上げ、落ちてくるそれをキャッチして両腕で挟むようにして肩に担ぎながら、紙袋に空いた穴越しにファウストが俺を睨みつける。

「私は前座扱いですか？」

「貴様は一面ボスだろうが」

「大した自信だ」

その言葉を言い終えた瞬間、ファウストと俺が同時に駆け出す。身を屈め、風を切って走る。互いの距離がみるうちに縮まっていく。

これで決めるつもりだ。

互いの影が重なるうとする。

「失敬！」

ファウストが叫び、担いでいたメスを俺の脇腹めがけて薙ぎ払う。俺はそれを防御しなかった。無防備な脇腹に、鈍器と化したメスが深々と食い込む。

「な、なぜ避けない……！？」

「……射程距離だ」

「……！」

脇腹にメスを擦りつけたまま、俺が突進する。虚を突かれたファウストは、それに対する反応が一瞬遅れた。

それが命取りになった。

「遊びは終わりだ！」

初撃が刺さる。

「泣け！叫べ！」

殴り、引き裂き、ファウストの全身をボロボロにしていく。最後の一撃を加えた直後、炎を纏った両手でファウストの首根っこを鷲掴みにする。

手に力を込め、熱量を上げる。

「そして死ね！」

爆発。

ファウストの巨体が宙を舞った。

ファウストが目を覚ました時、彼は病室のベッドの上に居た。

明かりのついた、真っ白な部屋に一人。状況が分からず暫く放心状態にあったが、やがて気付いたように両手を使い、頭をまさぐり始めた。

「大丈夫よ。紙袋は取ってないわ」

永琳がやんわりと言いながら、横にある台の上に薬と水の入ったコップ

プを置く。

「というか、勝負が終わってからまだ五分しか経ってないわ。私にしたって、まず倒れてるあなたを大急ぎでベッドに縛り付けて、軽く全裸にして傷を確認して、それから自分の部屋に薬を取りに行つて戻ってきた所なんだから。顔を見る暇も無かつたわ」

「色々聞き捨てならない所があるのですが……」

「それにしても凄いわねあなた。あれだけ痛めつけられてるのに外傷は殆ど無かつたし、首だつて軽い火傷程度で済んでるし……本当に人間なの？」

「失敬な。私は普通の人間ですよ」

チートじみた身体能力とタフネスを見せ付けておきながら尚人間であることを主張するファウストに対して、永琳は『実は彼は人類の次の進化種なんじゃないか』と本気で思い始めていた。しかし永琳のそんな考えをよそに、ファウストが窓越しに月を眺めながら小さく呟いた。

「私は、負けたのですね」

「……悔しい？」

永琳の言葉に、ファウストが軽く笑いながら答える。

「全力で挑んで負けたのですから、悔いはありませんよ。でもまあ、少しはそういう気持ちも、あると言えばあると言つか……せめてリベンジはしたいですねえ」

「確かにその気持ちは分からなくもないけど、今はゆっくり体を休めることの方が先よ。傷は無くても、体には確実に疲れがたまっているでしょうから」

「まさか医者が医者のお世話になるとは、思ってもいませんでしたよ」

「今のあなたは私の患者よ。さ、横になりなさい」

そう言つて永琳が部屋の灯りを消した。月以外に照らす物の無い薄暗闇の中、ファウストは紙袋をつけたままゆっくりと目を閉じた。

永琳が病室から暗い廊下に出た直後、彼女の視界内に片膝立ちで跪く、一つの何かが入り込んだ。それはその場に蹲りながら、小さく、だが良く通る声で永琳に言った。

「夜分遅くに失礼します。私、名もなきモブの白狼天狗の一人でございます。八意永琳様でございますね？」

白狼天狗。妖怪の山を仕切る天狗の中でも下っ端の存在。主に伝令や偵察などの任務を主としている「使い走り」である。

「ええ、確かに私が永琳よ。それで、どうしたの？」

自分からモブって言うのはどうなんだよ。本音を抑えながら永琳が尋ね返す。かしこまった態度を崩すことなく、白狼天狗が答えた。「永遠亭の管理者である八意様にお尋ねしたいことがあるのですが……こちらの方に、博麗の巫女は来なかったでしょうか？」

「博麗の？それって、博麗霊夢のこと？」

「左様。こちらにはこなかったでしょうか？」

「……まだ見てないわね。ごめんなさい。でも彼女が一体どうしたって言うの？」

永琳が質問しようとした時、白狼天狗は風だけを残して何処かへと消えていた。

「用件だけ尋ねてオサラバ……あまりいい感じじゃないわね」

「ねえ永琳、さっき私の所に天狗が来たんだけど、あれなんかあったの？」

永琳が何か引つかかるような体で顔をしかめていると、廊下の角から輝夜が眠そうに眼を擦りながら現れた。

「排他的な天狗が博麗霊夢を探していた……山で異変でも起きたのかしら？」

「おい、無視かよ」

庵は機嫌が悪かった。

ファウストを下して逆走を始め、今彼は四面ボスの所で立ち止まっていた。彼は機嫌が悪かった。ボスや道中が鬱陶しかったからで

はない。

誰もいないのだ。ボスはおろか雑魚敵でさえも。一体たりとも出てこなかった。おかげで逆走は順調に進んでいたが、その上手く行きすぎな感覚に逆に苛ついていた。

「……まあいい。一面の所まで行ければ、俺はそれで十分だ」

そう言って心を入れ替え（顔は凶悪なままで）歩き出した時、彼の視界にある物が入ってきた。

「札……？」

地面に落ちている一枚の札をつまみあげ、まじまじと見つめる。白地に赤い文字で何か書かれている。その直線と曲線で構成された赤のラインは、記号のようにも図形のようにも見えた。

「……下らん」

そう言いながら指先から炎を出し、札を一瞬で灰に変える。それを振り払いながら、俺は一人夜闇の中を歩き始めた。

第六話「対戦で一撃使うなよ」（後書き）

ファウスト（登場作品：ギルティギアシリーズ）

各地を放浪する闇医者。かつて犯した罪の贖罪と、自分の過去にまつわる真実を知るためにあてのない旅を続ける……と書けば聞こえはいいが、その奇怪な外見や言動から殆どの人間から異常者、人外とみられている。中身はギルティギア中最大の常識人なのに（自業自得な部分もあるが）……。

グレートシング（登場作品：ダライアスシリーズ）

敵宇宙人「ベルサー星人」の駆る、ダライアスを代表する鯨型の巨大戦艦。デカイ。それまでに登場してきたボスとは一線を画す耐久力と攻撃能力で、数多くのプレイヤーを葬ってきた。デカイ。殆どの作品に登場しており、大抵の場合は最難関ルートを通った場合にのみ出会うことができる。デカイ。

ヒバチ（怒首領蜂シリーズ）

・ふぐさし

・キチガイ

・死ぬがよい

第七話「香霖堂? : プランB」

森近霖之助の営む香霖堂は、表向きには道具屋ということになっている。しかし立地条件や気にいった物は非売品にしてしまう主人の性格などによって、まともな営業を行っているとは言い難かった。

「僕としては、もう少しまともに営業をしたかったんだが……」

カウンターの前に居座りながらそう愚痴る霖之助に、店の一角に寝そべりながら本を読んでいた魔理沙が言い返した。

「だったら人里に行けばいいじゃないか。こんな辺鄙な所に店を構えるから、マトモな客が来ないんだぜ」

「僕は人ごみが苦手なんだよ。それに店を引っ越すお金も無いし」

「じゃあ、露店なんてどうだ？」

「直射日光を浴びるのは嫌だよ」

「偏屈な奴だぜ。商売したいけど商売つきの無い商売人なんて聞いたことが無い。そんなだからここは変人の巣窟になるんだ」

「それ、自分も変人だと認めてることになるぞ」

不意に入口の方向から、厳しい口調で言葉が飛んできた。魔理沙がそこに目を向けると、一人の少女の姿がそこにあった。

壁に背中を預け腕を組み、入口の横に立っていた津村斗貴子がじつと魔理沙を見つめていた。

津村斗貴子もまた、企画の為にここに呼ばれた人物の一人だった。

身につけているのは白メインに青が少し混ざった感じの制服。切りそろえたショートヘアと私の強い目つきが特徴だったが、何より目を引くのが、顔の中段に大きく刻まれた横一文字の傷だった。

そして紫によって呼びつけられた彼女は今、東方香霖堂の『名も無い朱鷺の妖怪』役としてこの店に常駐していた。

「トキだけに」

香霖堂で自分がこの役に決まった理由を斗貴子が聞いた時、紫はそう声を殺して笑いながら言った。それに軽くキレた斗貴子が太股に装着した六本の刃（『バルキリースカート』とか言っらしい）で本気で八分刻みにしようとしたのを見て、魔理沙と霖之助の中での彼女の評価が決定した。

「あ、面白い奴だ」

サッカー。麻雀。弾幕勝負。幻想郷の住人は面白いことに目が無いのだ。

そうして自分の知らない所で魔理沙と霖之助に気にいられた斗貴子は、それ以来こうして香霖堂の登場人物の代役兼この店の用心棒となっていた。

「おいおい、私は誰よりも普通の魔法使いだぜ？ そんじょそこらの変人どもと一緒にしないでくれないか」

そう斗貴子に言い返す魔理沙に霖之助が口を挟んだ。

「君だつて十分変人だよ。一日中部屋に引き籠つてキノコとにらめっこするなんて、少なくとも普通の少女がやることじゃない」

「あれは新しい魔法の研究の為にやってるんだ。おい香霖、キノコは凄いいんだぞ。ちよつと触媒を変えるだけで全く違う反応を見せるんだ。キノコ一つとっても、派生先の可能性は何千と広がってるんだ。それに外の環境がかわるだけで、同じ種類のキノコの間にも差異が生じるんだ。キノコは正に生命の神秘、宇宙の神秘なんだよ。わかるか？なあ、わかるか？」

目をキラキラさせながら語り始める魔理沙。それに対して霖之助は姿勢を崩すことなくさりと云つてのけた。

「僕はあまり興味はわかないな。斗貴子、君はどうだ？」

「なぜ私に振る……まあ、どちらかといえば無い方だな」

「ちえつ、夢の無い連中だぜ」

二人の淡泊な反応に魔理沙が口を尖らせた時、入口のドアがゆっくりと開いた。

「邪魔するぜ」

そう言つて香霖堂に入ってきたのは、頭に赤いバンダナを巻きゴツゴツとしたアーマーに身を包んだ大柄な男だった。背中にはそれぞれ形の違う銃の様なものを二丁担いでいた。

「『落し物係』つてのは、ここか？」

「落し物？」

バンダナの男がドスのきいた低い声で言った。斗貴子は意味がわからず首をひねっていたが、意味を察した霖之助はいつものようにやや億劫そうな口調で言った。

「ああ、見方を変えれば、ここは確かに『落し物係』だろうね。外の世界限定の」

「どういう意味だよ？」

「僕がこの店の品物をどこから持ってきているか、魔理沙も知っているだろう？」

「ああ」

幻想郷には無縁塚と呼ばれる所がある。

そこは幻想郷と外の世界との境界が曖昧であり、それ故に、時々外の世界の物がこの無縁塚に流れ着くことがある。

そして霖之助は、そうして無縁塚に流れ着いた物を適当に物色し、気にいった物を拾っては香霖堂の中でそれを売り物としているのだった。

「それにしても落し物係とは……まあ、半分くらい当たってるけど」

そう言って苦笑する霖之助を尻目に、バンダナの男は珍しげに店内を見回しながらカウンターに近づいていく。斗貴子はその男から漂う只者でない雰囲気警戒を強め、魔理沙は見たことも無い人間に興味深げに横目で眺めた。

「ここに来りゃあ、こっちに来た落し物の殆どは見つかるって聞いて来たんだが」

「それは買い被りだよ。僕が持てない物は持って来てないし、あか

らさまに危険な物とか何だか危険そうな物は、僕は店には持ち込まないことにしてるんだ」

「そんな危険なブツじゃない。俺はタグってやつを探してるんだ。こつちに来た時に、うっかり落つことしちまったらしい。わかるか？ 歯車とチェーンをくつつけた感じの、ネックレスみたいなモンだ」

「歯車、ネックレス…… ちょっと待ってくれ、探してくるよ、えー…… っと」

「マーカス・フェニックスだ。マーカスでいい」

「森近霖之助だ。じゃあマーカス、ゆっくりしていつてくれ」

「ああ、そうさせてもらうぜ」

それからおもむろに霖之助が席を立ち、反対側の棚を物色し始める。マーカスが立ったままそれを待っていると、魔理沙が興味深げな視線のまま彼に話しかけた。

「あんた、面白い格好してるな。何の仕事してるんだ？」

「お前の方がよっぽど面白い格好してると思うがな。ハロウィンでもやろうってのか？」

マーカスが小馬鹿にしたように返す。それに対して、魔理沙が胸を張って答える。

「私のこれは正装さ。魔法使いやってるからな」

「魔法使いだと？…… ああ、そういやここはそう言う場所だったか」

「あんたの居た所にはそう言うのいなかったのか？ 妖精とか、悪魔とか」

「悪魔ならいるぜ。地底に巣を張って、地面に大穴をあけてそこか

ら這いだしてくるのさ。ウジャウジャとな」

「地底の悪魔か、面白そうだな。今度私にも紹介してくれよ」

「そいつは無理だな。お前に合わす前に俺が残さずミンチにしてる」

そう言つて面倒臭そうに頭をかくマーカスを見て、目に力を込めながら斗貴子が尋ねた。

「お前、軍人か？」

「良くわかったな。それがどうかしたか？」

「いや、お前を最初に見た時、酷く場違いな感じがしたからな。しかし道理で、お前はファンタジーとは最も縁遠い奴という訳だ」

「それを言うならお前も同じだろうが。お前の目、ガキの目つきじやねえぜ。何をやらかしたらそんな風になる？」

「お前と一緒にだ」

「そうか」

そしてそれつきり、二人は石のように押し黙った。腫れ物に触るかのように、それ以上その話題についての話をするのを拒絶するかのよう。

魔理沙は二人の仕事が何なのか非常に気になっていたが、暫く考えて何も聞かないことにした。個人のプライバシーは守らねばならないと、以前プライバシーを侵しまくる天狗に教わったことを思い返したからだ。

しかしそれでもなお、魔理沙には気になることがあった。

「なあ、マーカスだっけ？あんたはこっちに何しに来たんだ？」

「いきなり出て来た胡散臭い女に頼まれたんだよ。『幻想郷に来て、ある奴を探し出して正気に戻してほしい』ってな」

「引き受けたのか？」

「断つたに決まってるんだろ。戯言に付き合う程暇じゃねえんだ。け

どの野郎、『貴方の本番は九月で、まだ時間あるから大丈夫。宜しくね』とか言って、強引に俺をあんに引つ張り込んでいきやがつたんだ。タグもその途中で落としちまったんだが——なんて言うんだ？あの空間が裂けたような妙な奴は」

「スキマだ」

そう言いながら、同情するような目つきで魔理沙がマークスを見つめる。

「あんた、その仕事やり遂げた方がいいぜ。その胡散臭い女は『境界を操る程度の能力』の持ち主なんだよ」

「なんだよそれ。無駄に洒落てるな」

「その名の通り、ありとあらゆる境界を操ることが出来るんだ。光と闇の境目。人間と妖怪の境目。空間と空間の境目。そして世界と世界の境目。何でもありだ」

「世界の境目だと？」

斗貴子が話しに食いつく。魔理沙がさらに調子を良くする。

「ああ。あんたたちを呼んだのも、その能力を使って世界の境界をいじくつたのさ」

「そんな事が出来るのか？」

「出来るから俺たちがここにいるんだろうが」

「とにかく、そいつの力添えが無きゃ、多分あんたたちは元の世界に戻れないぜ。言うこと聞かなきゃ一生ここで過ごすハメになる」

「大した脅迫だぜ」

そうマークスが毒づく、霖之助が銀色に光る物の束を掴みながらカウンターに戻ってきた。

「マーカス、これでいいかな？」

「ああ、こいつだ。悪いな」

「代金は要らないよ。それは君にとってとても大切な物らしいからね」

「……わかるか？」

タグを握りしめながら、マーカスが呟く。霖之助が小さく頷く。

「これが僕の能力さ」

「なるほど。あの胡散臭い奴と一緒に訳か」

「一緒にされるのは、少し複雑な物があるんだが……」

渋る霖之助を尻目に、マーカスが踵を返して出入り口に向かう。それを見た斗貴子が目を合わせることなく言った。

「もう行くのか？」

「俺は場違いな人間だからな」

「随分と繊細なんだな」

「手前ほどじゃねえ」

「……ふん」

「ああ、ちよつと待てよ」

再び歩き出したマーカスを今度は魔理沙が引きとめる。

「なんだよ、ハロウィン」

「魔理沙だ。ハロウィン言うな。あんたが探してる奴って何者なんだ？教えてくれよ」

「また首を突っ込む気かい？」

「私も暇をもてあまし気味だな。一つ暇つぶしをして、私の中にある暇の悪魔をぶっ潰したいんだ」

魔理沙が霖之助にそう言うってから、改めてマーカスの方を向く。

「で、誰なんだ？ 幻想郷の人間なんだろう？」

「ああ、どうやらそうらしいな。確か」

「君も君だ。火に油を注ぐ必要は」

「博麗霊夢とか言う奴だ」

霖之助と魔理沙の目つきが変わった。

第七話「香霖堂? : プランB」(後書き)

津村斗貴子(登場作品: 武装錬金)

本作のヒロイン。主人公「武藤カズキ」の嫁。錬金の戦士の1人。口が悪く他人との交流を避ける傾向があるが、それは他人を戦いに巻き込むことを避けようとせんがための優しさの表れでもある。ただし敵には平気で眼つぶしたりバラバラにしたりと容赦ない。

マーカス・フェニックス(登場作品: GEARS OF WARシリーズ)

本作の主人公。かつては軍に所属していたが、家族の一人が起こしたことが切欠で刑務所にぶち込まれる。誰かに命令する際や報告する際等、要所要所で飛ばす小気味良いジョークや台詞回しが特徴的。それを活かしたチームメイトとのやり取りはギアーズ名物の1つとなっている(主観)。うるさいんです。

第八話「ついでぎのグランドヴァイパでダメージはさらに加速した」

天界。そこは幻想郷のはるか上空に位置する天人たちの住处。

その片隅にある、広大だが無人の花畑。

そこで天人の一人、比那名居天子は目の前にある巨大な装置を眺めながら一人ほくそ笑んでいた。

「くくくく、これさえあれば……」

それは台座の上に乗った、人一人収まる巨大な半透明のシリンドーだった。台座部分には青白く光るディスプレイと、大小様々なボタンが配置されていた。

「まったく八雲紫め。私に黙ってあんな面白いことをしているなんて、どういう神経をしているのかしら。置いてけぼりを食わされた身にもなってもらいたいものだわ」

「八雲紫が貴女を誘わなかったのは、貴女が絡むと話がややこしくなるからではないですか？」

したり顔で愚痴を述べる天子の後ろで、永江衣玖がふわふわと綿雲のように降下しながらさりと云つてのける。しかし天子は何事も無かったように依玖に話しかけた。

「ふふん、だとしたら、あいつはかなり詰めが甘いわね。奴は私が、自分の力で代役を呼び出そうとは思えなかったのかしら？」

「そのための装置が、目の前のこれですか」

衣玖がその円柱型の機械を見上げながら言った。

「メガテン？」

「誰が邪教の館の主だって証拠だよ」

「す、すいまえんでした……」

「まあ良いわ。河童たちにある物をやる代わりに作らせたのよ。詳しい原理は聞いてないんだけど、なんでもディメンジョン某とか言うパワーを使って幻想郷と別次元とをつなげる働きをもっているらしいわ」

「かなり怪しいブツにしか見えないのですが……ところで総領娘様、河童達には何を渡したのですか？」

「デス・。ターの設計図」

「八雲紫に目をつけられても知りませんよ」

衣玖の忠言を無視して、天子が台座のコンソールをおもむろにいじり始める。それを後ろで眺めながら、衣玖が天子に尋ねる。

「誰を呼ぶおつもりですか？」

「決まってるじゃない。謙虚な彼よ」

「……！」

天子。謙虚。彼。これらが導く人間は一つ。

衣玖の体に電流が走った。

「総領娘様、本気ですか！」

「ええ、本気と書いてマジよ。それがどうかしたの？」

「勘弁してください！貴女だけでも面倒だと言うのに、その上彼まで来られたらフォローで私の寿命がストレスでマッハになる！h a i！私まだ死にたくない！」

「黙れと言っているサル！それにもうスイッチは押した。誰にも止められないわ！」

天子が叫ぶ中、シリンダーが小刻みに振動を始めた。振動が大きくなると共にシリンダーの中で紫色の電流が迸り、やがてそれらの電流がシリンダーの中心部で絡み合い、球体を形成していく。その球は外で遊んでいるより多くの電流を取り込みながら、肥大するのではなくゆつくりと小刻みに収縮していった。

「フハハハハ！見ろ！私はやったぞ！」

その光景を見て目を輝かせる天子の横で、それを見た衣玖は戦慄を覚えていた。目の前では吸収し溜めこまれた膨大なエネルギーが、外に発散されること無く収縮されていく。その後も駄々っ子を押さえつけるような力任せの収縮は続けられ、その球体は見る見るうちにサイズを小さくしていった。そしてついに、それは野球ボール大のサイズにまで縮小を遂げたのだった。

変化は唐突に訪れた。

球の運動が一瞬止まる。

衣玖が反射的に天子を抑えつけ、彼女と共に地面に伏せる。

直後、眼前で大爆発が起きた。

鼓膜を破らんばかりの轟音と黒煙が容赦なく二人を襲う。シリンドーが粉々に外へと吹き飛ばされ、破片が二人の体に降りかかる。そして電流のような形をしていたエネルギーが波となって一気に解放され、シリンドーだったものをを中心にドーナツ状に広がっていた。

「げほっ、げほっ、げえほげほっ」

大きくせき込みながら、天子が頭にかかった衣玖の手を払いのけて立ちあがる。そして多少ふらつきながらも、衣玖もゆっくりと立ち上がる。

「せ、成功したのかしら？」

「げほっ……け、煙で前が見えませんね……」

やがて煙が晴れていくにつれ、二人の目の前にうつすらと人影のようなものが現れ始めた。

「ふふふ、やっと来たわね……！」

「もう、私は知りませんよ……うん？」

そう言いつつ視線の先で鮮明になっていくシルエットを見て、衣玖が首をかしげる。心の中で有頂天に舞い上がっていた天子も、その姿を見て不審に思い始めた。

「あれ、だれ、あいつ？」

「げ、げほっげほっ、な、何が起きたんだ？」

「……声が聞こえますね」

「発破かけてやろうかしら。——ちょっと！その貴方！」

天子が大声で叫ぶと、それに気付いたのか、影がこちらに顔を向けてくるのがわかった。そうするうちに煙が完全に晴れ——

「誰か、誰かそこに居るのか？」

「え？」

ついにその人影が露わになった。

「けほっ、一体どういうことなんだ？いつも通りソロでレベリングしてたら足元が崩れて、気付いたらこんな所に……ん？君たちは一体誰だ？新手のCPUか？」

「……なんで貴様が来るんだアアアアアアア！」

天子の攻撃『全人類の非想天』。

「ウボアー」

その男が目を覚ましたのは、それから数分後のことだった。紫色の尖った鎧を全身に着込み、兜の意匠はまるで竜の頭を模しているかのようなだった。そんな男が慌てて上体を起こそうとすると、横に正座していた女性がこれまた慌てて彼の体を押さえ付ける。

「落ち着いてください。あの攻撃をまともに食らったのです。色々あるでしょうが、今はもう少し安静にしてください」

「え？あがつ……ああ……どうやら、そうらしいな」

全身を襲う痛みに顔を歪め、男がゆっくりと仰向けの姿勢に戻る。すると女性が男の顔を覗きこみ、優雅な微笑みを浮かべながら男に言った。

「貴方はどうやら、幻想郷の住人ではないようですね。まさか本当に成功するなんて……」

「あの、すまない。いまいち話が分からないんだが」

「ああ、申し訳ありません。わたしとしたことが。それでは貴方の

置かれた状況とそれに至るまでの経緯を説明したいのですが、よろしいでしょうか？」

「ああ、頼む。とりあえず、今は俺の置かれた状況が知りたい」

少女説明中。

「幻想郷、異世界、ワープ装置？にわかには信じられんが……」

「疑われるのも無理はありません。しかしこれらはすべて真実。私も、この大地も空も、まごうことなき現実なのです」

女性の声に合わせて、男が首を動かして周囲の光景をまじまじと見つめる。青い空、白い雲、花畑。そして肌をかすめる涼やかな風。耳に聞こえる風の音と自らの息遣い。

それらは決して幻想ではなかった。

「ああ、信じよう」

「……随分あっさりと受け入れるのですね」

素直に驚く女性を見ながら、男が笑いながら答えた。

「ヴァナ・デイルの人間は、みんな順応性が高いのさ。タイムスリップとかも経験してるし、パラレルワールドとか言う奴にも平気で乗り込めー^^しているしな」

「貴方の世界——ヴァナですか？そちらも随分とエキサイトした所なのですね」

「毎日が緊張の連続だよ」

そう言つて再び男が笑うのに合わせて、女性も笑みを返す。すると思い出したように女性が男に話しかけた。

「名乗るのをすっかり忘れていました。私の名前は永江衣玖。知らない竜宮の遣いです。貴方は？」

「俺か？……いや、私はそう、その名もヴァナを駆ける一陣の風、ブルーゲイルと呼んでくれ」

「貴方の名前は何ですか？」

「いやだから、私はブルーゲイル」

「名前は何ですか？」

「私はブルー」

「何ですか？」

「……リューサンでいい」

「わかりました。ではリューサン」

澄まし顔で衣玖がリューサンに言った。

「とりあえず、腹ごしらえしませんか？」

リューサンをのしたあと、天子は一人、下界をふらついていた。

眉を吊り上げ、のしのし大腿で歩くその姿からは、彼女がこれ以上ないほどに怒っているのがよくわかった。

「くそ、なんであんな紫プラモが出てくるのよ。あんな奴お呼びじゃないってのに」

そう言いながら道端の小石を蹴り飛ばす。天子の愚痴は止まらない。

「河童も河童よ。まったくんだ不良品を送りつけてきたものだわ。あとでガツンと言っておかないと」

「やれやれ。わがままなお嬢さんだ」

「——ッ！」

どこかから木霊する男の声に、天子が歩みを止める。その表情が驚愕から警戒へと瞬時に切り替わり、非想の剣を構えながら周囲を見回す。

「……誰？どこに居るのよ？」

「そんなに警戒するな。私は怪しい者じゃない」

その声は天子ではなく、天子を中心としてその空間全体に話しかけているような、周囲に拡散していくものだった。

「とりあえず、そのバールのような物をしまってくださいませんか？物

騒でかなわない」

「じゃあ姿を現しなさいよ。こう言う時はあんたも礼儀を尽くすのが基本でしょ？わかってないわね」

「すまないが、今私が姿を現すことは出来ないんだ。この作品のプロットを見るに、私が出てくるのは終盤くらいということになっているんでね」

どこか人を小馬鹿にした軽い口調に、天子が眉間に皺を寄せる。

「メタな発言ばっかやってると嫌われるわよ？いろんな人から」

「嫌われるのは作者だ。私じゃない」

「誰のお陰でここに来てると思ってるのかしら？」

声がぱたりと途絶える。天子がどこでもない闇夜に向けしてやっ
たりの表情を見せていると、今度はどこからともなく笑い声が聞こえてきた。

「——いやはや、大したものだ。負けたよ」

「負けた奴の口調には聞こえないわね。まったく小馬鹿にして」

「いや、私は本気だ。それとこの喋り方は癖のような物でね。気に障ったら謝るよ」

「別にいいわよ。それで？私に何の用なの？」

声が若干凄みを増して、天子に降りかかった。

「君をサポートしたい」

「サポート？」

「今君たちのやっている祭り、この祭りが終わりを迎える頃、君はある重大な役割を果たすことになる。とても重大な、自機に選ばれるほどのサプライズ出演さ。まあ実際のサポートはその時するつもりだから、前にも言ったように私が出てくるのは当分先なんだけどね。要するに今回のこれは、それに先駆けた軽い挨拶のようなものだ」

「それもプロットの内なのかしら？」

「無視して出しゃばったのさ。天使だってこのくらいのやんちゃはする」

「天使？あんた一体、何者なの？名前くらい答えなさいよ」

「――」

一瞬の静寂。やがて声が轟く。

「――ルシフェル」

人里のすし屋にて――。

タイガトロン「寿司おごるよ」

アクセル・アルマー「まじでえ？w」

ダンテ「んじゃ、イクラ」

ピクシー「あたしタマゴ」

タイガトロン「リューサンは？」

リューサン「ガリで」

店主「おいイ……」

衣玖「お前それでいいのか？」

第八話「ついでにのグランドヴァイパでダメージはさらに加速した」(後書き)

リユーサン(登場作品:ファイナルファンタジー11)

正確にはFF11に登場するジョブの一つである「竜騎士」を元ネタに某板で誕生した二次創作キャラ。数々の苦い経験を積んできたからか非常に忍耐強く紳士的で、今日も相棒の飛竜mikanと共にソロでの冒険に励む。誰かPT組んであげて下さい。

タイガترون(登場作品:戦え!超ロボット生命体トランスフォーマー
マービーストウォーズ)

ホワイタイガーに変身するサイバترون戦士。常に武士道を心に秘める侍であり、語尾に「ござる」をつけるのが特徴。続編のメタルスで衝撃のラストを迎える。

アクセル・アルマー(登場作品:スーパーロボット大戦シリーズ)
出る作品によって性格がコロコロ変わる男。ロボットの操縦技能だけでなく格闘スキルも一流である。だがスパロボゆえに、イベント以外で格闘術を披露したことはあまりなかった。テーマ曲は「DA
RK KNIGHT」

ダンテ(登場作品:デビルメイクライシリーズ)

人間と悪魔のハーフ。三食ピザまたはストロベリーサンデー、週休六日制、借金持ちなど、一見すると絵にかいたようなダメ人間であるが、ひとたび悪魔と対峙すると大剣と二丁拳銃でそれらをスタイリッシュになぎ払っていく悪魔狩人。皮肉屋だが、その中には誇りと優しさがしっかりと備わっている。

ピクシー(登場作品:女神転生シリーズ)

メガテンを代表する悪魔の一匹。序盤からお目にかかることが多く、

比較的素直な性格なので会話で仲魔にすることも容易。その場合は回復魔法である「ディア」系を駆使した回復役に徹することもままある。イベントをこなして大化けするピクシーも存在するとか。しないとか。

ルシフェル（登場作品：E1 Shaddai）

フリースペースはここかな？ああ、ここで合っているのか。初めに何を書いたらいいのか……うん、まずはこれから始めるとしよう……。

さて、まずはシナリオを無視して勝手に出てきてしまったことを謝りたいと思う。私だって天使のはしくれた、悪いことがなんのかはわかるし、悪いことをすれば謝るさ。だけど、少くらい出番を増やしたって罰は当たらないと思うんだが……おっと、これは思いあがりというものが。

それと私についてのおおまかなキャラクター設定についてなんですが、それについては、少し待ってほしい。なに、そんなに遠い未来の話じゃない。この作品の作者のやる気次第で、私の再登場するまでの期間が短くなるかもしれないし、長くなるかもしれない。全ては君たち次第さ。

……だいぶ長く書きすぎたようだ。今日はこのくらいにして切り上げるとしよう。それでは諸君、また会おう

第九話「祭囃し編」

妖怪の山の一角にある一軒家。その玄関前で、一人の男がぼつんと立っていた。帽子を被って眼鏡をかけ、肩にはボックスを、首からはがつしりとしたカメラを提げていた。

「おーい、準備できたかい？」

ぴつたり閉められた扉に向けて、男が大きな声で言い放つ。すると扉の向こうから床を叩くようなテンポの速い足音がこちらに近づいてきた。そして音が間近にまで迫った直後、男の目の前で乱暴にドアが開け放たれた。

「ごめん、待った？」

掴んだドアノブに体重を預けるように前のめりになりながら、一人の少女が男に話しかける。紫のリボンでまとめられた、ウェーブのかかったツインテール。短袖のブラウスに黒いネクタイ。黒と紫が市松模様に混ざったミニスカートに黒いハイソックス。

鴉天狗にして新聞記者、姫海棠はたてである。

「うわ、すごい荷物。富竹、あんた大丈夫なの？」

「いや、こんなもの軽い方さ。君こそ平気かい？」

「え？ええ、忘れ物はしてないと思うわ。多分」

「OK、じゃあ行こうか」

「ええ」

富竹と呼ばれた男とはたてが横に並び、同時に歩き出す。

富竹ジロウと姫海棠はたて。二人はこれから、八雲紫に呼び出さ

れた「東方風神録」を担当する外の世界の人たちに取材をすることになっていた。リラックスした富竹とは対照的にはたての顔は若干緊張していたが、それは外の世界から来た人間に慣れていなかったからではなかった。

取材に慣れていなかったのだ。

新聞記者である姫海棠はたてが力を使わないで直接取材をするようになって、それなりに時間が経つ。

以前の彼女は、自らの能力を存分に使って新聞を作っていた。その能力は念写。それも自分の携帯電話型のカメラにキーワードを打ち込むことで、それに関連した写真を入手するというものであった。そしてその能力故に自ら出張って写真撮影をする必要がなく、その検索能力で目当ての写真を「見つけ」、後はそれを使って新聞を作ればいいのだ。言ってしまうえば、家に居るだけでも新聞が作れるのだ。結果的に彼女は滅多に家の外に出ることがなくなったのだ。

しかしその能力によって見つかる写真は、あくまでもはたてが「見つけた」ものである。はたてが「撮った」ものではない。要するにそれは、どれも誰かが撮ったことのある、既存の物でしか無かったのだ。それ故に彼女の発行する「花果子念報」は二番煎じの記事で埋め尽くされ、本来情報の鮮度が命である新聞において、それはあまりにも新鮮さが欠けていた。

一方、彼女とライバル関係にある射命丸文の発行する「文々。新聞」は、大量に主観が混ざっているとはいえ人を引き付ける不思議な魅力があった。自分の新聞には無いものである。それが何なのか、はたてはとても気になっていた。

気になって気になって仕方なくなって、ついにはたては文の後をつけることにした。文々。新聞の秘密を知りたくなったのだ。そ

して――

「やっぱり、足で稼ぐのっていいことなのよね。うん」

道中、はたてが不意にしみじみと呟いた。ちなみに彼らは徒歩で現地に向かっている。富竹が空を飛べないからだ。おかげで彼らはおよそ道とも思えない草むらの中を歩きとおしていた。上を見上げれば、鬱蒼と生い茂る木々によって日光が遮られ、二人の行く先を薄暗く不気味な物に変容させていた。

「どうしたんだい、いきなり？」だがそんなことは気にもせず、富竹が不思議そうに尋ねた。

「ううん、ちょっと昔を思い出してね……富竹もさ、自分から現地に行って取材したりとかするの？」

「僕はフリーのカメラマンだから、写真を撮るだけなんだけどね。それでもまあ、自分が撮りたい写真があったら、直接現場には向かってるよ」

「やっぱりみんなそうなんだ」

素直に不思議がるはたてに、今度は富竹が尋ねた。

「そう言う君はどうやってたんだい？」

「念写よ」

「念写かあ。面白そうだね、それ」

「取材に使えたもんじゃないわよ」

「わかってるよ。やっぱり写真は生モノでないと」

そう話し合っていると、不意にはたてが足を止めて、片手で富竹を制止させる。目の前にある茂みの向こうからは、微かにではあるが水のせせらぎが聞こえて来ていた。

「どうしたんだい？」

「ここから先に河が流れてる。場所的には多分、三面のボス辺りつてところかしらね」

「ボス？ってことは、戦闘してるかもしれないってことかい？」

「かもね。流れ弾には気をつけてよね。ごっこ遊びって言ったって、人間が弾幕に当たったら痛いじゃ済まないんだから」

「下手したら弾幕より怖い物が飛んでくるかもしれないけど……でも大丈夫。こういう修羅場は慣れてるからさ」

富竹がそう言って、目を輝かせながらカメラを構える。その神経の図太さに呆れつつも、自分も強張る体に鞭打ってカメラを持つ。ビビるな。そう言い聞かせながら、はたてが一息に茂みを抜けた。

「さ、さあ、やるわよ！」

視界が開ける。一気に強くなる日差しから顔を背けて目を瞑る。その間はたての耳に聞こえてくるのは、川の水の流れる音と何かの焼ける音、そして人妖混じった笑い声。

……笑い声？

やがて光にも慣れ、はたての視界が開けていく。そしてその先にある物を。

「……は？」

その先にある物を見て、はたては絶句した。

「ははあ、なるほど。それでその様な体に？」

「ああ。おかげで随分人間とは勝手が違う体になったが、まあ、これはこれで便利なもんさ」

富竹がアロハシャツを着た大柄の男と親しげに話し、時々思い出したようにカメラのシャッターを切る。

「おいおい、また撮るのか？」

「いいじゃないですか。僕のいた所にはそんな物騒な組織はないんですから。それに僕の友人たちに見せたとしても、ビックリ人間程度には見ないでしょうし」

「昭和時代だっけか？お前さんのいた所。よくまあそんな昔から来たもんだ」

「不可抗力ですよ。気付いたら天狗の家の前に倒れてたんです」

「どうだか。大方お前さんも、賞品に釣られてやってきたクチじゃないのか？」

そう言い合って富竹と男が愉快そうに笑っていると、横からギザギザした縁を備えた赤いロングスカートと、縁と襟が同じようにギザギザした長袖の赤い服を着た少女が富竹に近づき、串に刺さった焼き魚を差し出しながら言った。

「ねえその人間。貴方もひとつどうかしら？」

「え、僕が貰ってもいいのかい？」

「ええ。ご飯はみんなで食べたほうがずっと美味しいもの。私、秋静葉っていうの。よろしくね」

「そつえば俺もまだ言ってなかったな。マキシマだ。宜しく頼む」

「僕は富竹。フリーのカメラマンさ。それはそうと、お言葉に甘えて一本も」

「おい待てよ」

絶句のあまり、それまで阿呆みたいに目と口を開いていたはたてが、思い出したように憤怒の形相になって静葉の腕を掴む。

「ちょ、ちょっと、痛いわよ天狗。私が秋を象徴する神だと知ってこんなことしてるのかしら？」

「どうでもいいんだよ今はそんなこと。この状況は何だよ。説明しろよ」

ドスのきいた声と共に静葉を睨みつける。半分泣き顔になりながら静葉が周囲を見回し、そしてまたはたての方を向いて言った。

「バ、バーベキュー？魚限定の」

「風神録はどうしたアアアアア！」

第九話「祭囃し編」（後書き）

富竹ジロウ（登場作品：ひぐらしのなく頃に）

ノリのいい自称フリーのカメラマン。カメラマンの割にはかなりガタイがいいが、気にはいけない。本編では歩く死亡フラグとまて言われ、その上実は作中屈指のキーマンであったりするのだが、本編以外のシナリオでは頭のネジが外れたかのような大暴走を行う。どうしてこうなった。

マキシマ（登場作品：KOFシリーズ）

KOF第二部であるネスツ編より登場。秘密組織「ネスツ」に殺された友人の敵を討つため、自らネスツに取り入りサイボーグ手術を受けた（仮面ライダー言うな）。ネスツ崩壊後は改造人間であるKやクーラ・ダイヤモンドと共に行動するが、世話焼きな性悪が災いし今では二人にとっての保護者（お母さん）と化しつつある。

第十話「あなたの町の怪事件」

数分後、マキシマから事情を聞いた二人は思わず自分の耳を疑った。

「風神録中止!？」

「どうということなんだい？」

「そんな大したことじゃない。自機役の二人がいつまでたっても来てないから、当面の間撮影を見合わせるってだけだ。四六時中ピリピリしてたら神経が持たないだろ」

その場に座ったマキシマが魚を食いながら答える。自分も貰った魚を齧りながら、はたてが言った。

「で、息抜きてことでバーベキューしてる訳ね」

「ああ。機材とかは全部河童が用意してくれたしな」

「河童? どうということだい？」

骨だけになった魚を持て余しながら首をひねる富竹に、はたてが答える。

「こっちの河童は、機械とか機材にめっぽう強い。下界から来たものを分解したり、自分たちでいろんな物を作ったりするのが好きな連中なのよ」

「じゃあ、あのコンロとかも河童が用意したのか。凄いんだなあ」

「ちなみに、俺が三面ボス河童にとり担当な」

「なんであんたが?」

「機械繫がりさ。俺はサイボーグなんでね」

マキシマが自分を指して言った後、おもむろに首をひねりながら言った。

「せっかくだ。他の連中も紹介しとくよ。まず一面ボスの秋姉妹。その代役があいつだ」

マキシマが指さした先に、一人の女がいた。その女は川べりで猫背になり、釣り糸を垂らしたまま石のように動かなかった。

やや赤みがあった、端が跳ね返ったショートヘア。側頭部から鍵をぶっ刺し、全身を申し訳程度に包帯で覆った、奇怪な女だった。その横には巨大な鍵が直立不動で立ちつくしていた。

「A・B・Aっていうらしい。癖は強いが、話せばわかる奴だ」

するとマキシマの声やら気配やらに気づいたのか、アバがこちらの方を向いてじっとみつめてくる。そして上半身だけで軽くお辞儀すると、そのまま釣りに戻って行った。

「な、悪い奴じゃないだろ？」

「ああ、まあ」

はたてとしては、あまり近づきたくなかった。マキシマが続けた。

「次に二面ボスの鍵山雛、その代役が、向こうで回ってるあいつだ」

アバと反対側の河べりで、一人の男がコマのように高速回転していた。その回転によって生み出される渦によって、彼の頭を中心にした見事なまでに逆円錐状を形作っていた。

「ジン・サオトメ。ロボットのパイロットらしいが、生身でも戦え

るらしい。因みに隣で回ってるのが鍵山雛だ」

よく見ると、ジンの隣で一人の少女が同じくらいのスピードで回転していた。なぜジンが選ばれたのか、二人は何となく理解した。

「それで、君のモデルはどこなんだい？」

「ああ、そいつはな」

マキシマに尋ねた富竹に対して、代わりにはたてが答えた。

「無理無理。この三ボスは河童の河城にとりつて言う奴なんだから、かなりの人見知りで、初対面の人間を見ると光学迷彩スーツで隠れちゃうのよ」

「今何か凄まじい単語が飛び出した気がするんだけど」

「気のせいだな。ていうか、お前さんよく知ってるな。有名なのか？」

「ええ、有名ね。同じ妖怪の山の出身だから、他人の噂とかはよく耳に入るのよ」

はたてが言い終えるまで、マキシマは地面のある一点を凝視していた。そしてはたてが喋り終わるのを確認すると、視線を元に戻して話を続けた。

「さて、次は四面ボスだな。射命丸文だったか？その代役があれだ」

マキシマ達の左側で、片足立ちになり一心不乱に一つの蹴りのフォームを繰り返しているスポーツパンツ一丁の一人の男がいた。そのスタイルは素人の物ではなく、鞭のように鋭いしなりを持った高速の蹴りだった。

「アドンだ。外じゃムエタイ使いとして腕を鳴らしてたらしい」

「あいつが射命丸のねえ……でもなんであいつが？」

「鼻だね」

富竹が不意に呟く。それにつられてアドンの鼻を見つめるはたてだったが、やがて彼の言わんとしたことを理解し小さく笑いながら言った。

「ああ、あれは正に天狗ね」

「あんな長い人っているんだね。驚いたよ」

「あんまり大声で言うなよ。あいつプライド高いんだから」

マキシマが嗜めるように二人に言う。すると今度ははたてがマキシマに言った。

「ね、ねえ、射命丸見なかった？」

「いや、見てないな。何者なんだ？」

「あたしと同じ新聞記者よ。ライバルみたいな感じ」

「ブン屋か。だったらそこらへん飛び回ってるんじゃないか？今ほどスクープ記事を書きまくれる時間は無いんだからな」

「やっぱりそうなのかな……」

何か考える所があるのか、そのままはたてが押し黙る。するとその後を継ぐように、富竹がマキシマに話しかけた。

「ところで、確かこれは全六面構成だったはずなんだけど、五面と六面はどうしたんだい？」

「ああ、そのことなんだけどな。風神録中止ってことになってからのここの五面ボスと六面ボスなんだが、宣言してからそそくさと山の上にある自分たちの神社に引っ込みしまったんだよ」

「神社？」

「ああ。その二人はその神社に仕える巫女と、その神社を根城にしている神様でな。そもそも風神録中止を言い渡したのも、その神様で六面ボスの八坂神奈子って奴なんだ。その二人は神社に引ッ込んでから一度もこっちに降りてこないし、おまけに天狗連中が神社への道を封鎖してる。だから理由を聞こうにも近づきようがない」

「なんか、きな臭いね……」

そこまで聞いて、富竹の目に一筋の光が走る。それに気付いたマキシマが険しい顔をして富竹に言った。

「あんまり無茶な事は考えるなよ」

「わかってるよ。命あつての物種だからね」

守矢神社。

賽銭箱を背にした状態のまま、巫女である東風谷早苗は近づいてくる二人の人影を見ると深々とお辞儀した。

「八雲紫さんよりお話は伺っております。ようこそ守矢神社へ。私がこの巫女を務めている、東風谷早苗と申します」

「内閣情報調査室所属、鼎です。よろしく」

「やほーい。伊吹萃香だよー」

ピシッと敬礼をする鼎の横で千鳥足でふらつきまくる一人の小鬼。それを見た早苗がわずかに眉をしかめた。

「萃香さん、もう少ししゃきつとしてください。外からのお客様に

失礼ではないですか」

「えー？いいのいいの。私は紫に頼まれた只の案内人だから。私は無視して先進めてちょうだい」

「……東風谷さん、私は構いませんが」

「え？あ、はい、わかりました。それではこちらへ」

萃香を残し、早苗の先導のもとに鼎が神社の本殿内部に入る。そこに広がる光景を見て、鼎は言葉を無くした。

「これは……！」

穴。

本殿の床を殆ど占有するかのごとく、ぽっかりと空いた巨大な穴縁は滑らかな円を描いており、それは正に芸術の域であった。

それを見た鼎が啞然としていると、背後からやや威圧的な女の声が聞こえて来た。

「あんたが外から来たっていう人かい？」

「はい。内閣情報調査室の鼎と申します」

「あたしは八坂神奈子。ここの一応の主神となっている。早速だが本題に入ろうか」

神奈子の言葉に、鼎が重々しく頷く。二人の横に並び、やがて神奈子が口を開いた。

「こいつが出来たのは八日前……紫が例の企画を実行するよりも前のことさ。見なよ、この断面。いくら力自慢の妖怪にだって、大地をこんな滑らかに削り取るなんて芸当は出来やしない」

「しかし我々の世界では可能です。こちらの技術を集めれば、出来ないことでは無いでしょう」

「なるほどね……」

腰に手を当てて神奈子が唸る。わずかに螺旋状の溝がついた断面を見つめながら、鼎が言った。

「それで、そのあとはどうなりましたか？」

「ああ。あとは前もって話した通り、穴が出来てから数日後くらいに幻想郷全土で不況が発生したのさ」

「数日後、というのは、どれくらいでしょうか？」

「二、三日経ってからだと思っね」

「ならば辻褄が合います。こちらの世界で闇マーケットに大量の金流れ、兵器や武器が多く取引されたのもそのくらいの頃です」

「幻想郷のお金を使ったということでしょうか？」

早苗がそう言い、すぐに疑問を口に出す。

「でも、もしそうだとして、それだけのお金がここにあるかどうか……」

「こつちには金銀ザクザク掘りあてられる能力の持ち主がいるのを忘れたのかい？ いや、今の問題はそれじゃない」

そう言いながら神奈子が腕を組み、ぼっかり開いた穴の底をまじまじと見つめた。とてつもなく暗い。下手をすると吸い込まれてしまいそうだ。

「前にも言ったように、これが出来たのは八日前。紫が企画を始める前のことだ。そもそもこの企画自体、この穴とそれに関連するこの為に行われたと言ってもいい」

「あ、あの、どういうことでしょうか？」

「私達外の世界の住人は、その八雲紫の能力を使ってここまでやってきた。しかし八雲紫がそれを行使したのはつい最近。少なくとも

八日前のことではない」

「第一、紫が隠れてそんな真似をする筈もない。あいつは胡散臭いが、誰よりも幻想郷を愛しているからな」

鼎の言葉に神奈子が続く。

「だから、どういふことなんですか？ 私にもわかるように説明してください」

「……自力で来たんだよ」

神奈子が吐き出すように告げる。

「八日前、もしくはずっと前に、外の世界から自力で幻想郷に来た連中がいたんだ」

「……」

ジャングルのように鬱蒼と木々が生い茂る森の中、東方風神録「博麗霊夢」役の真田幸村は声を張り上げて雄たけびを上げた。

「……はどこでござるかあああああ！」

「うるせえよ」

幸村の横で腰をおろしながら、霧雨魔理沙役のK、が苦々しく呟いた。

スタートしてから十時間経過。道を外れた二人は未だ一面にも辿りつけていなかった。

第十話「あなたの町の怪事件」(後書き)

A・B・A(登場作品:ギルティギアシリーズ)

「フラスコ」と呼ばれる実験施設で生まれたホムンクルス。外に出るまでの10年を施設内で鍵収集をして過ごす。その中で出会った鍵型の闘斧「フラメントナーゲル」に一目惚れし、「パラケルス」と名付け夫として所有することにした。礼儀正しいがどこか抜けており、自分達に近づく奴はみんな夫を奪うんじゃないかという強迫観念に駆られている。要するにヤンデレ。夫に肉体を与えるのが当面の目標。

ジン・サオトメ(登場作品:サイバーボッツ)

本作の主人公。赤いVA「プロディア」のパイロットを務める。武者修行中に優秀なVAパイロットであった父の死の報せを聞き、その真相を知るために戦いに赴く。いわゆる熱血系キャラであるが、サイバーボッツでは静かに燃えるという印象が強かった。しかし「MARVEL vs CAPCOM」に参戦した際にはやたら暑苦しいタイプの熱血キャラとなっていた。一体何があった。

アドン(登場作品:ストリートファイターシリーズ)

自称最強のムエタイ使い。実力は確かにあるのだが、自ら最強の格闘家となることで神に等しい存在になるという若干痛^{かなり}い思想を持っている。「帝王」と呼ばれていたサガットの弟子であり彼に心酔していたが、彼がリュウに負けてからは「ムエタイの名を汚した」として師弟の縁を切っている。実力?お察し下さい。

鼎(登場作品:アカツキ電光戦記)

陸上幕僚監部二部所属の諜報員。イロモノ共が跳梁跋扈する当ゲームにおいて一番の常識人。しかしモデル体型のように引き締まった

体に緑のベレー帽＋ミニスカ軍服＋黒ストッキングという外見に反し、中身はザンギ。フ並みに重いガチガチの投げキャラと、やはり普通の人が見ればどこかズレまくったキャラ造形であった。でもこれでもまだマトモな方なんです。ちなみに内閣情報調査室所属という設定は、続編の「エヌアイン完全世界」のものである。

K'（登場作品：KOFシリーズ）

ネスツ編における主人公のような存在。元は普通の人間であったがネスツに拉致され、炎の力を移植された改造人間。改造は成功したが、炎は右手からしか出すことができず、さらに力を制御するグローブを装着しないと炎をコントロールできないという欠点を持つ。性格は無口、無表情、無愛想、他人とコミュニケーションを取るのが苦手というネガティブの塊。しかし仲間思いでもあり、単に素直になれないだけかもしれない。なかつたりする。

真田幸村（登場作品：戦国BASARAシリーズ）

武田軍に仕える武將の1人。両手に槍を携え、額には六文銭をあしらった赤いハチマキを巻いている。性格面においてもはや彼を熱血漢と表現するのは不可能であり、彼の熱血は常人で言うところの「暑苦しい」の域に達している。またびっくりするほど女性に免疫がなく、夫婦で戦場に立つ武將を見て「破廉恥！」と言い切るほど。総大将である武田信玄に心酔しているが、若干依存している節もみられる。

第十一話「未踏査地区調査」

当企画中に博麗神社が吹き飛ばされたのとほぼ同じ時刻。

どこともしれない空間。天井や壁、床の境界が存在せず、赤や青や黒が混じり歪み合う空間の中で、鼎は一人立ちつくしていた。

腕を組み、辺りを見回す。絶えず流動的に変化する景色を眺めているだけでも暇つぶしにはなるが、ここにずっといるだけでは埒が明かないのも事実だった。

「どうしたものかしらね」

鼎がひとり呟く。誰も答える者はいなかった。

五日前のこと。

鼎の元に、最近になって闇市場での商品や金の流れが世界規模で急激に活発化して来ていることについての実態を調査するよう上層部から直接命令が飛んできた。これを聞いた時、鼎はこれはかなり大がかりな捜査になるだろうと気を引き締めた。渡された要調査人物のリストの中身や、外部の協力者数名と共に動くということも、彼女の警戒意識を高めるのに一役買った。

しかし協力者との集合場所に向かった鼎が見た物は、空間をぱつくりと縦に開いた裂け目のような物と、裂け目の真下に置かれていた一枚の紙だった。そこにはこう書かれていた。

「鼎様へ 中でお待ちしております」

馬鹿にしているのか？狐に化かされたような感じになって、鼎は思わず眉をしかめた。しかし今回の任務は上層部直々の命令によるもの。悪戯とは思えなかった。

それに目の前の裂け目は作りものには見えなかった。中から覗く

空間が、まるで生き物であるかのようにグネグネと蠢いていた。遺書を書いてくるべきだったかしら。冗談半分にそう考えながら、鼎はその裂け目の中に足を踏み入れた。

そして、彼女はこうして待ちぼうけを食らっていた。

しかし待てども待てども誰も来ない。まるで生きているかのように動く周囲の風景を見ると、その内気が狂ってしまいそうだった。

「おっ、いたいた」

その時、どこからか不意に声が聞こえてきた。鼎が声のした方に顔を向けると、鼎の気付かないうちにそこに一人の少女が立っていた。瓢箪を片手に持ち、酔っ払いのように顔を真っ赤にしていた。何より、側頭部から生えた一对の角が鼎の目を引いた。

「こんな場所に一人でいて平気だなんて、あんた度胸あるね」

他人事のようにそう言いながら、鬼のような少女がずんずん大股で鼎に近づく。そして鼎の目の前まで来た時、さっと右手を差し出しながら言った。

「あんたがカナエだね？」

「え、ええ。貴女は？」

「私？私は伊吹萃香。あんたの協力者だよ」

「貴女が、え？」

「そ。よろしくー」

「集合場所」という名の空間の裂け目。鬼のような角を生やした幼女の協力者。自分の想像の斜め上ばかり行く事態の連続だ。かつての経験から超常的な事象に耐性が付いていたとはいえ、鼎は頭痛を感じずにはいられなかった。

これはハードになりそうだ。

「あの時、あなたは私を試していたという訳ね」

守矢神社本殿に空いた大穴の縁に立つて幻想郷に来た成り行きを思い出しながら、鼎がいつのまにか自分の横にいた萃香に話しかけた。酔っ払い特有の浮ついた笑みの上から、不思議そうな顔をして萃香が言った。

「んー、どういう意味？」

「あんな場所に長時間一人にしておいて、私の度胸を測っていたんじゃないかって言ってるの」

「あー、あれ。あれは違うよ。紫の誘導から外れて、スキマの中であたしが道に迷っただけだよ」

「それは本当なのかしら？」

スキマとはあの裂け目のことだろう。そう思いながら鼎が萃香に尋ねる。すると一瞬の間を置き、鼎の方をじっと見つめながら萃香が言った。相変わらず口元は緩んでいたが、目は笑っていなかった。

「鬼は嘘つかないんだよ」

全身を一瞬寒気が襲う。腹をすかせた猛獣の前に立たされた気分だ。

「そうなの？」

「うん、そうそう」

だがそんなことはおくびにも出さずに問い返す鼎に、いつも通りの酔っ払いの顔に戻って萃香が答える。するとそれまで二人のやり取りを見ていた神奈子が頃合いとばかりに鼎に話しかけた。

「それで、こいつの中には入るのかい？」

「ええっ？」

神奈子の提案に早苗が素で驚く。

「ええ、そのつもりよ」

「ええっ!？」

さらりと言う鼎に早苗が大きく驚く。

「あんたも行くの?じゃああたしも付き合おうかな」

「いや、ちよつと、ちよつと」

萃香がケラケラ笑いながらそう言う傍で、早苗が声を張り上げてその流れを断ち切った。神奈子が

「どうしたんだい、そんなに驚いて」

「いや、こんな訳のわからない穴の中にいきなり入り込むのって、危険じゃないですか?」

「入らなきゃ中がどうなってるかわからないじゃん」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず。リスクの無い仕事なんてこの世には存在しないのよ——八坂さん、ロープの様な物は無いかしら?」

呆然とする早苗をよそにそう言う鼎の脇腹を萃香がつついた。

「どうしたの?」

「いや、こん中に入るんでしょ?あたしも行きたいから、一緒に連れてってあげるよ。空飛べるし力もあるから、あんたを乗せて降下することくらい朝飯前よ」

「気持ちだけ受け取っておくわ。ここからは私の仕事なの」

「足手まといになるつもりは無いよ。それとも、私が嘘ついてると思ってるの?」

「その小鬼の言ってることは全部本当だよ。あんた一人担いで降下するくらい、かつて世界を震わせた鬼の四天王にとっちゃ造作も無いことさ。鼎って言ったっけ?あんた、騙されたと思って、パラシユート降下する気分でやってみたらどうだい?」

「……」

萃香に続いて、神奈子が真剣な口調で鼎に言った。それを聞いた鼎はしばらく押し黙っていたが、これ以上の議論は無意味と考え、結局腹を括ることにした。

「……わかったわ。それじゃあ萃香、エスコート頼めるかしら?」

「おうさ。大船に乗った気分で行ってくれな」

鼎を肩車した萃香が勢いよく穴の中に飛び降りるのを見て、早苗は不安げな表情を露わにしながら神奈子に言った。

「神奈子様、本当に大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ。萃香はともかく、あの人間の方も中々出来ると見たよほどのことが無い限り、無事に帰ってくるさ」

そこまで言った所で、神奈子が思い出したように早苗に言った。

「そついや、諏訪子の奴遅いね」

「そうですね。確か数十分位前に散歩に行ってくると言ったきり、帰ってきませんね」

早苗の言葉を聞いた神奈子が自分の顎をさすりながら、やがてのんびりした口調で言った。

「まあ、あいつなら大丈夫だろう。一応EXボスだし」

「そついう発言は控えていただけますか？」

鼎を担いだ萃香が穴の中を落ちていく。肩車の体勢を取りながらも、萃香は落下スピードを下げることはしなかった。

空気が獣の唸り声のような音を立てて耳に迫る。鼎は絶叫マシンに乗っているような感覚を味わっていたが眉一つ動かすことはなく、片手で帽子を抑えつけながら周囲の景色を観察していた。穴の周りの光景は降りた当初は幾層にも色別に重ねられた地層だったが、次第に無機質な、青白い金属的な物に代わっていった。

そして数十秒間の降下の末、萃香が大砲の着弾音のような派手な音を立てながら穴の底と思しき場所に着地する。そして周囲の光景を視界の中に収めた時、二人はその姿勢のまま揃って言葉を失った。

「うひゃあ」

「なんてことなの……」

そこは円形に作られた広大な空間だった。中は薄暗く四方は金属ともコンクリートともつかない硬質の物質で作られ、壁面には縁の厚く上下端を切り落とした格好の菱形のようなフレームが壁一面に設置されていた。床には両端を繋ぐほどの長さを持った二つのパイプの束が、十字を切って交差するように地面に埋め込まれていた。そして直径が五メートルほどある円が中心部に一つ、一回り小型の円が中心の円を囲むように八つ存在し、その全てが内側から青白く淡い光を放っていた。

「これは人工物で間違いないわね」

「問題は誰がこんな物作ったのかって話なんだけどね。守矢の連中も本気で驚いてたから、今回その線は無さそうなんだけど」

萃香の背中から降りながら鼎が言い、萃赤も肩を伸ばしてつつそれに答える。すると萃香がある一点を指さして言った。

「あ、あれじゃん？穴掘った奴」

「あれ？」

鼎がそこに目を向けると、そこには巨大なドリルが無造作に転がっていた。直径は今と追ってきた穴と同じくらい。人間に持てる物ではない。鼎が萃香に尋ねた。

「あなた、あれ使える？」

「うーん、どうだろ。使えなくはないと思うけど、あんなもの使うくらいなら、あたしは素手で穴を掘るね」

「じゃあやつぱり、外からの侵入者の線を疑うべきかしら」

「とりあえず色々調べてみようよ。考えをまとめるのはそれからでも……」

そこで萃香が言葉を切る。そして二人が同時に、目を光らせながら向こう側の壁の一部を見つめた。フレームの向こう、二人にとって死角になっている部分に何かが隠れている。鋭い目つきのまま萃香が尋ねた。

「あそこ。仕掛ける？」

「待って。まず話しかけてみましょう」

「おっけ」

鼎が一步前に出て、その辺りに向けて声を張り上げて言った。

「そこにいるのはわかってるわ。手荒な真似はしないから、とりあえず出てきてくれないかしら？」

「……」

無音。今度は萃香が言った。

「おい。誰だか知らないけど、そこにいるのはわかってるんだよ。早いうちに姿現した方がいいと思うんだけどなー」

「……」

「やれやれ、無視かい。それとも本気でやり過ぎせるとでも思ってるのかね。悪いけどそんな狡い真似が通用するほど、鬼は甘くないんだよ」

「お、おに！？」

壁の向こうから戸惑うような声が響いた。その声に萃香と鼎が軽く驚く間もなく、そこから一つの人影が勢いよく落下してきた。それは真下の地面に頭から落下して土煙を上げ、直後に身を起して涙交じりに声を上げた。

「うっ……鬼がここに居るなんてきてない……いたたた……」

「何をそんなに驚いているのよ」

すると今度は、壁にあるフレームの向こうからもう一人の人影が姿を現した。そして呆れ半分にそう言っただけで自分から飛び降り、墜落した人影の下にゆっくりと降下していった。

「ほら、立てる？」

「え？ああ、申し訳ありません。いきなりのこととで気が動転してしまいでしょ」

「あれ？誰かと思ったら文じゃん」

降りた方が落ちた方の手を取ろうとした時、いつの間にか二人目の前まで接近していた萃香が声を上げた。落ちた方——文と呼ばれた方は近づいてきた鬼に露骨に驚きながら、降りてきた方の後ろに隠れて言った。

「あ、あややや。これはこれは伊吹様。こんなところで合うなんて奇遇ですねえあははは」

「ちよつと文、なに人の後ろに隠れてるのよ。らしくないわね」

「お願いしますストームさん匿って下さい。今回ばかりは、私はどうしても鬼は苦手なんですよ」

「いつまで昔のこと気にしてるのさ？もう親分面する気は無いって」「な、ななないをおっしゃいますか伊吹様。私がいいいつ気にしたとおおっしゃいますか！」

文のビビリぶりとへりくだりぶりに、萃香とストームと呼ばれた女が揃って呆れ顔になる。後から来た鼎もその光景を見て、不思議そうに首をかしげた。

「ええと、これはどうなってるのかしら？」

「鬼に立ち竦んでる天狗の図つてところかな。私だって本当はフレンドリーになりたいのにさあ……」

「とりあえず、ひとまず落ち着かない？お互い敵って訳でもなさそうだし」

天狗は震え、鬼はバツの悪い顔を浮かべている。ストームの提案を鼎は快く飲んだ。

「ええ、そうした方がよさそうね」

第十二話「神の小足」

互いに自己紹介を終えた後、四人は手分けして周囲の探索をすることになった。ストームは比較的露出の少ないスーツとマントを纏った、肌は黒く、白い髪をした女性だった。天狗が道を閉鎖しているながら、文と「文化帖版」射命丸役のストームがここに紛れ込んでいた件については、

「別にいいんじゃない？」

という萃香の一言で片付いた。鼎にしても、特に二人を処分する気は無かった。

「まさか、X-MENのメンバーとこんな所で会えるなんてね」

そして二手に分かれ、鼎と萃香が巨大なドリル状の巨大な物体を調べていた時、感慨深げに鼎が呟いた。それを聞いた萃香が鼎に尋ねる。

「エックスメンってさ、一体何者なわけ？」

「超能力を持った人間の集まり、てところかしら。私たちの世界でミュータントと呼ばれてる能力者達による、彼らと人間との共存のため、そして同族を、何より自分たちの身を守るために作られた組織。それがX-MENなの」

「身を守るって、差別でもされてるの？」

「ええ。世界規模でね。自分より強い力を持ったミュータント達を憎悪したり、偏見の目で見える人間が大勢いるのよ。ミュータントってだけで殺された人も数多くいるわ」

「人間は相変わらずってことか。虚しいね」

「一部を見ただけで全てを見たように語るのはどうかと思うけどね。彼らを好いている人がいるのも事実なんだから。少なくとも私は、彼らを偏見の目で見える気は無いわ。もっと酷いのを嫌ってほど見てきたから」

「……それもそうだね。ごめん」

素直に萃香が謝る。すると鼎たちから見て右側奥の方から、地鳴りのような激しい音が聞こえてきた。しかもそこは文とストームが調べていた地点だ。

「なに？どうしたの！？」

「この音、真下から……なにかせり上がってくる……！？」

鼎と萃香がドリルから離れ、音のする方に全身を向ける。すると前方から、ストームと文が跳躍するように大きく飛びのき、背中を見せたまま二人の目の前に着地した。地鳴りはまだ続いていた。

「何が起きたの？」

「あややや、あの辺りを調べていたら、いきなり床が左右に割れたんですよ」

「あそこから何かが上がってくるわ。乗ってるのが味方って線は薄いでしょうけど」

「そう言ってる間に、もうその例の何かがでてきたんだけど」

萃香の言葉に、全員がそこに注目する。やがて秒刻みで音量を増す轟音と共に、地面から四本の鉄製の棒が正方形を結ぶように伸びてきた。次いでそこから青と薄い灰色、そして所々紫色の混じった鋼鉄の巨人が、頭からゆっくりと、せり上がって姿を現した。

「口、ロボット？まあこの場所に合ってるっちゃあ合ってますが」

「早苗に見せたら喜びそうだねえ」

「センチネル……！」

文と萃香が呟く隣で、ストームが驚いたように叫ぶ。それに反応したのか、巨人の歪に曲がった三角形の目が真っ赤に光る。同じく文も記者根性をくすぐられたのか、メモ帳を開きながらストームに尋ねた。

「え、ストームさん、知ってるんですか？」

「センチネル。反ミュータント主義者の学者が開発した、ミュータント抹殺用のロボットよ」

「……あんたらって、あんなもの作られるくらい嫌われてるの?」
「言っただでしょ萃香。ミュータントを親の敵のように憎んでる奴もいるって」

啞然として呟く萃香に鼎が返す。すると彼女たちと相對するように静止していたセンチネルが、甲高い金属音と共にゆっくりと体を動かし始めた。一步一步大地を踏みしめながら、エコーのかかった電子的な声を周囲に響き渡らせる。

「周囲二 M U T A N T 反応 検出。 戦闘モード 起動シマス」

「……やる気みたいね」

「あなた達は下がって。奴の狙いは私だから」

「馬鹿言わないでよ。ほっとける訳無いでしょ?」

ずいとお萃香が前に出る。ストームが戸惑いながら萃香に言った。

「貴女、何考えてるのよ。貴女には特に関係ないことでしょう?」

「あいつ強いんでしょう?そういう奴を見ると、余計血が騒ぐんだよね。鬼の血って奴?」

「まあ、鬼は根っからの戦闘種族ですから。強そうな相手を見つけると戦わずにはいらなくなるんですよ」

文も萃香の後に続けた後、きっぱりと言ったのける。

「私もお付き合いしますよ。あのロボットにも興味ありますし、何よりここまで同行してほしいっていう私のわがままに付き合ってくれたお礼もしたいですから」

「おっ、言うねえ文、気に行ったよ。これ終わったら一緒に呑まない?」

「へ?あ、いやいやいやいやいや。そんな恐れ多い!私は一人晩酌と洒落こませてもらいますよええ!」

作り笑顔で拒絶する文をよそに、鼎もストームの横に立つ。

「私も参加させてくれないかしら?」

「あなた、鼎二尉ね?あのゲゼルシャフトを潰したっていう話は私

「たちにも届いているわよ」

「直接やったのは私ではないわ。それに今、私は内調に居るの。二尉でも何でもないわ」

「飛ばされた」

「そういうこと」

「私を手伝うのは任務だから？」

「それが半分。もう半分は——ここで私一人逃げたら格好悪いでしょう？」

ストームが肩をすくめて笑みをこぼす。

「お節介が多くて困るわ」

「多いに越したことはないでしょ」

鼎が言い終えるよりも早く、センチネルが動き出す。ひざ裏に収納されていたブースターを展開し、地面を滑るように一直線に四人に向かって突撃してきた。

「はい来た！開戦だあ！」

萃香が嬉しそうに叫び、四人が同時に左右に飛んでそれを回避する。その直後、センチネルが己の巨体を壁に激突せんとする勢いで肉迫する。しかしセンチネルは激突する一歩手前で急停止し、ぴたりと止まった後、脚部装甲とブースターの間から放熱のための蒸気を大量に吐き出す。このセンチネルの突撃によって、四人は二人一組で分断される格好となった。

受け身を取って一回転し片膝を付く鼎と、低空を高速飛翔し、鼎の横で急停止をかけながら百八十度ターンする文。

飛び退いた後地面に片手をつき、前かがみの体勢でセンチネルを睨みつける萃香と、文と同じ要領でその隣につくストーム。

センチネルが睨みつけたのはストームの方だった。

「MUTANT 発見。隣ノ UNKNOWN モ ターゲットリ
スト ニ 登録」

「……貧乏くじ引かせたわね」

「このくらいちよろいちよろい」

即座にセンチネルが脚部のブースターを使った九十度ターンをもつて二人の方を向く。そして向き終わると同時に上半身だけで前かがみになり、口と思わしき部分の装甲を展開して中の砲身を露わにした。

「伏せて！」

「FIRE」

ストームが空高く飛び上がりながら叫び、萃香が気圧される形でうつ伏せになる。直後センチネルの口部から放たれた萃香の身長の半分ほどの大きさを持った黄色いレーザーが萃香の頭上をかすめ、数秒後に背後で爆発音を響かせた。

「悪い、ストーム。助かったよ」

レーザーの出力にほんのちよつと驚きながら、萃香がストームに礼を述べる。だがストームの表情は険しかった。

「油断しないで！あれは連発出来る仕様なの！」

「マジで？」

萃香がうつぶせの姿勢のままセンチネルを見ると、既にその口部が球形状に黄色い輝きを放ち始めていた。さらにその輝きは大きさを増し、やがて顔面を覆うほどにまでなっていく。さっきよりも規模のデカイのが飛んでくることは明らかだった。

取り巻きから先に潰そうと、自分を狙っていることも。

「ヤバ……」

輝きが臨界点に達した。と同時に。

「後方不注意は事故の元！」

射命丸が叫び、自分の背丈ほどの竜巻を生み出してセンチネルの無防備な背中にぶつける。センチネルの体勢が崩れ、顔が斜め下にずれた瞬間、顔面で閃光が走った。先程より五倍ほどの大きさを持ったレーザーが萃香の真横にぶち当たり、そのまま顔を跳ね上げたことによってレーザーが猛烈な勢いで地面を走り、無機質な床と壁を容赦なく抉り取っていった。

「パワーアップしてる……！？」

塹壕のように半円状に削り取られた床を見て、ストームが戦慄を覚えた。かつて自分が仲間と共に戦った時は、もっと弱かったはずなのに。

そして背後から攻撃した文もまた、センチネルの姿を見て冷や汗を流していた。

「全然効いてないんですけど……」

フルパワーで放った一撃をモロに食らいながら傷一つついてないセンチネルの背中を見て、文が愕然とする。一方で隣にいた鼎は柔軟運動で肩や足を伸ばしながら、悠然と文に言った。

「大丈夫？」

「少々自信が揺らぎましたよ。まさかあんなに堅いとは思いませんでしたので」

「そう。じゃあ悪いんだけど、もう暫く攻撃続けてくれないかしら？ 奴の目を私から逸らしてほしいの」

「何をする気で？」

文の問いかけに、鼎が鋭く尖らせた目を光らせる。

「投げる」

直後、鼎が有無を言わず走りだす。

「え、ちょ……ええい！ ままよ！」

取り残された文はやくそ気味に竜巻を生み出し、次々とセンチネルにぶつけていった。

第十三話「碎月」

文が繰り出す竜巻は一撃ではセンチネルのボディに明確なダメージを与えられた訳ではないが、質より数とばかりに何十発と繰り出すことで強引にその外部装甲を削っていった。そこにストームが大気を操って生み出した雷をセンチネルの頭に落とし、萃香も瓢箪の酒を口に含み、口内で炎と化してセンチネルに吹きつける。この三重攻撃の前に、センチネルの体が悲鳴を上げ始めた。関節の各所から火花が飛び散り、装甲の隙間から煙を出し、赤い目が目眩を起したかのように明滅を繰り返す。

「ストーム！止め！攻撃やめて！」

そして萃香が叫ぶのと、センチネルの巨体が浮き上がったのはほぼ同じ時だった。懷に潜り込んだ鼎が垂れ下がった腕を掴み、その場でセンチネルをブン回し始めたのだった。

「ストーム！」

鼎の掛け声と共に、ストームめがけてセンチネルが投げ飛ばされる。その意図を察してストームがニヤリと笑う。左肩に当たるように右手を回し、自分の周囲に風を纏わせる。

「Typhoon！」

叫び声と同時に右手を振り払う。その瞬間、地面から天井に届くほどの大きさの竜巻がセンチネルを飲み込んだ。容赦なく巻き上がる風の暴力が全身を切り刻み、なけなしの装甲を打ち砕いていく。四肢を粉々にしながらなお風は止まず、やがて雷が落ちたような音を立ててセンチネルの体が引き千切られるように、腰から横に真っ二つになった。

風がやみ、それまで打ち上げられていた『かつてセンチネルだった』二つの鉄の塊が、派手な金属音を立てながら地面に激突する。手足はもがれてその機能を失い、そのもがれた部分からピストンの様な部品が露出していた。その様は骨がむき出しになったようで痛々しくもあつた。

「制圧完了ね」

しかし安心したように鼎が呟いたのも束の間、上半身だけになりながらもセンチネルが活動を再開した。肩部のブースターで体を動かし、最後のあがきとばかりに口を開きストームに狙いを定めて砲身を展開する。

「あややや、往生際の悪い」

「だったら倒れるまで……！」

「MUTANT DES——」

口部が輝きを放つ直前、巨大な足がセンチネルの顔を上半身ごと、プレス機のように踏みつぶした。足の裏で閃光が走り、くぐもった爆音が辺りにこだまする。

「ミッシングパープルパワー」

ストームの竜巻と同じくらいに巨大化した萃香が、そう言いながら腕を組んで残り三人を見下ろす。

「ふふん、ビックリした？」

そしてドヤ顔で言つてのけた。

「うーん、残ったのがこれだけつてのはちょっとねえ」

戦闘終了後、文が愚痴をこぼしながら、残された下半身を前に一心不乱にシャッターを切り続ける。

「脚だけ写してもどうなのかしらねえ？ 絵面的にちょっと無いわよねえ流石に。でもこれだけでもロボットがいたという事実にはなる

のだから、記事にしても意味はあるのかも……むしろ歴史的大スク
ープと言われて、今年为天狗の新聞大賞優勝？総ナメ？三冠王取っ
たり？やだー！」

次第にテンションを上げながら、ポジションを変えて何度も撮影
を続ける文を見て、鼎が肩を落とす。

「彼女に今回のことは記事にするなって言いたいんだけど、聞いて
くれるかしら？」

「無理かも知れないねー。あんなった天狗は大抵止まらないから、
新聞作ってる奴は特に。実行使も辞さないんじゃない？」

豪快に酒を煽りながら、さも他人事のように萃香が言つてのける。
鼎が困ったように眉根を寄せていると、ストームが二人に近づきな
がら言ってきた。

「借りを作ってしまったわね」

「気にしないでいいわ。これで私もゆつくり調査が出来るし」

「そうそう。なんならさ、私と飲み会しない？一人より二人の方が
楽しいんだよね、こういうのって」

「ええ、機会があればね」

やんわりと拒絶されぶーたれる萃香をよそに、ストームが鼎に尋
ねた。

「あなたが追っているのって、闇ルートが活発になった件でしょう
？」

「あら、流石にわかる？」

「解るわ。というより、X・MENの方でもそのことを調べてる真
っ最中なのよ。ミュータントにとっても今回の件は無視できないの」
「何かあったの？」

「闇ルートで流れてる武器の中に、例のセンチネルが含まれてたの。
それも大量に」

「……なるほど」

大量に作られたセンチネルが世界中に配置されようものなら、た
だでさえ肩身が狭いミュータントたちは完全に行き場所を無くして

しまうだろう。しかしそこまで来て、鼎が一つの疑問を抱いた。

「でも待って。センチネルって、世界中に配備されるほど大量に存在してたかしら？ あれって元はアメリカ御用達でしょう？」

「それが気になってるのよ。そもそもセンチネル自体、アメリカの外に出たことは滅多にないの。闇に流れるなんてもっとあり得なかったわ。でも、ある日を境に、急激にその数を増やした。それこそ何百何千も」

「アメリカに生産プラントがあつた？」

「そんなものあつたら、たとえアメリカでなくても、とくに私達が気付いてたわ。でもどこかで生産してるのは間違いないのよ」

「幻想郷に工場があるんじゃない？」

不意に萃香が切り出す。二人は驚くように萃香を見つめたが、やがて鼎が萃香に言った。

「それ、どういう意味？」

「言葉通りよ。幻想郷に工場作って、そこでさっきのロボットを大量生産するの。ここはアメリカじゃないからバレル心配も無いしね」

「でも、出入りの問題はどするの？ 確か八雲紫の手助けが無いと、外からこちらにはいけないんでしょ？」

「こつち来る前に神奈子が言ってたじゃない。随分前に自力でこつちに来た連中がいるって。来れるってことは出ることも出来るってことじゃない」

鼎とストームの目が大きく見開かれる。頭の中で歯車がかみ合っていく。

「……もつと詳しく調べる必要がありそうね。ストーム、提案があるんだけど」

「奇遇ね。私も一つ考えがあるのよ。多分内容は一緒でしょうけど」

「じゃあその考えとやらに、私も乗せてもらおうかな」

萃香の言葉にストームが返した。

「いいの？ 貴女はこの件と無関係なのに」

「乗りかかった船ってやつだよ。幻想郷のことなら私の方がよく知

つてるし、何より楽しそうだしね」

「ならばその提案、私だけ乗らない訳にはいきませんな」

三人が声のする方を見ると、文がカメラを構えたまましたり顔で言った。

「あなた、今までの聞いてたの？」

「ええ。全部バッチリ聞いておりました。勿論異存はありませんな？」

「ええ、協力者が増えるのは嬉しいわ。でもその前に」
鼎が文に近づいて言った。

「今回の件、記事にするのはやめてほしいのだけれど、いいかしら？」

「そんな殺生な。こんな特ダネを前にして記事にするなどおっしゃるのですか？」

「こんなことが幻想郷に広まって、敵に警戒されたらどうするの？それに一般の人たちにパニックが広まるかもしれない。私としては隠密に行きたいのよ」

「そこをなんとか。今回の件は、ぜひとも文々。新聞独占、週二、三回連載されるシリーズ物にしたいんですよ。これによって我が新聞も発行部数鰻登り。各賞総ナメにし、やがては天狗新聞界の生ける伝説として――」

「文」

萃香がドスの聞いた声でうなる。

「ぶつよ？」

「ごめんなさい」

結局、今回の件はすべて片付いてから号外という形で、文々。新聞独占で発行するという形で落ち着いた。

（まあ、これを知っているのは今の所私だけですし、これでも別にいいんですけどね。うふふふ）

「何よ、これ」

バーベキュー会場。

はたてはカメラに映った写真を見て眉根を寄せた。数分前、暇つぶしに守矢神社をキーワードにして画像検索した際、表示された画像の中に明らかに異質な物が混じっていたのだった。

「これ、どう見ても守矢と関係ないわよね。でも引っかけたってことはあそこと関係ある訳だし、誰かが一度撮ったってことだし」

先が二つに分かれたような恰好の鉄の塊の写された画像を前に、はたてが苦い表情で顔を傾げる。上手くは言えないが、記者としての直感が、これには何かあると言うことを彼女に伝えているような気がしたのだ。

「守矢神社……行ってみようかしら」

どうやって天狗の包囲網をくぐり抜けるかは二の次だった。彼女の関心は、今この時、守矢神社に向けられていた。

第十三話「碎月」（後書き）

ストーム（登場作品：X・MEN）

マーヴルコミックスの作品の一つである「X・MEN」の登場人物の1人。マーヴル初の黒人女性ヒーローでもある。ただ最初からメンバーだったわけではなく、加入するまでにかなりの紆余曲折を経ている。そのミュータント能力は一言でいえば「天候操作」。雨、雪、雷、竜巻を好きな場所に発生させたり、海流や大気はおろか宇宙嵐や太陽嵐までも操作することができる。どう見ても万能かつ強力すぎる能力であり、原作者をして「やりすぎた」と言わしめるほど。ただ敵側にもつとやばい奴がゴロゴロしているのは秘密。

センチネル（登場作品：X・MEN）

反ミュータント主義の科学者が作り上げた対ミュータント用ロボット。正確にはリーダー機に統率される多種多様なデザインのロボット群を総称して「センチネル」と呼称する。単純な戦闘能力だけでなくかなりのものなのに、ミュータントの能力を無効化する機能も備えており、X・MENを大いに苦しめた。その上量産型。彼らにとつては泣きつ面に蜂である。有人型ではなく人工知能で動くタイプであるが、自我に目覚めて案の定暴走。まあお約束である。

第十四話「年中夢中×666」

博麗神社跡地の裏手にある大木には、三匹の妖精が住んでいた。

「光を屈折させる程度の能力」を持つサニーミルク（赤）。

「音を消す程度の能力」を持つルナチャイルド（黒）。

「動く物の気配を探る程度の能力」を持つスターサファイア（青）。

三匹合わせて、通称三月精。妖精の中ではそれなりに力もある悪戯好きの妖精たちであった。

彼女たちにとって、人間や妖怪は格好の弄り相手である。例えば相手がどれだけ強大な存在であったとしても、そいつを驚かせてやりたいという欲求の元に嬉々として悪戯を仕掛け、そして大抵の場合返り討ちにあう。しかしどれだけボロボロになっても、悪戯を辞める気配は無かった。そして「一回休み」から復帰すると、彼女たちはそれまでの経験を活かし再び嬉々として悪戯を仕掛けに行くのである。参考にはするが反省はしない。性質が悪いにもほどがあった。そんな彼女たちの元にネロ・カオスがやってきたのは、紅魔郷二ボス役のデビロツト姫が沈められる少し前であった。

「なるほど。こちらでは、妖精は揃って悪戯好きということになっているのか」

三月精の家の中。そこでネロ・カオスは三月精の一人であるスターサファイアと向かい合うように座り、彼女の話聞きながら熱心にメモを取っていた。頭から石灰を被り真っ白になった状態で。

「凄い……こいつ、悪戯に全く動じてない」

空になったバケツを持ちながら、三月精二人目のサニーミルクが

感心したように呟く。ネロ・カオスがスターサファイアの反対側に座った時、サニミルクが自分の能力とルナチャイルドの能力を使ってネロ・カオスの背後から忍び寄り、石灰をぶちまけたのだ。だが彼はそれに対し、怒ることも能力を開放することも無かった。さつきからメモ帳に聞いた話の概要を書きこみながら、ぶつぶつと内容を反芻しながら自分の考えを呟くだけであつた。

「こちらの世界ではひたすら人間に友好的な妖精もいるが、幻想郷にそのような物は存在しないのか？やはり外部と隔離されたために妖精のあり方も変質していったのか、それともこちらの妖精がこうなつたのは、もっと別の理由があると言うのか？」

学者の性が、ネロ・カオスは幻想郷の妖精に、いや幻想郷という一つのシステムにすっかり魅了されていた。未知の研究対象に集中するあまり、彼の心はそれ以外の全てを瑣末なこととして歯牙にもかけなくなつていたのだ。

「それにこちらの妖精は、何をしても絶対に死なないと聞く。彼らの存在そのものが自然を象徴しているからか、それとも本質的に不死なのか……やはりもう少し話を聞く必要があるそうだな。人里に下りればそれなりに識者も見つかるか？」

顎に手を当て険しい表情で自問の世界に没頭するネロ・カオス。三月精はそんな彼の前に寄り集まり、その表情を物珍しげにまじまじと見つめた。

「ヤバイよこいつ。目がマジだよ」

「凄い、こんなに本気になれる人って始めて見たかも……」

「ていうか、幻想郷には本来いないタイプよね。学究バカ？つていうのかしら」

「バカはバカでもまだマシな方でしょ。頭が悪い訳じゃないんだから」

「でもあたしはちょっと引くなあ。根暗な感じがして好きじゃないかも」

考察に没入するあまりネロ・カオスが気付かないのをいいことに

好き放題言つてのける三月精。

その時。

「……お前達」

不意にネロ・カオスが顔を上げる。眉根を寄せ、顔面に血管を浮き上がらせ、恐怖の塊とも言つべき顔が間近に迫る。

その赤い瞳と目が合った時、三匹の心から理性が消し飛んだ。

「ごごごめんなさい！ホントマジスイマセンデシター！タバナイデ！オネガイタベナイデ！」

「わわ私自分からバカつて言つたんじゃないです！サニーに命令されて仕方なく言つただけなんです！だから許して下さい！お願いします何でもします！」

「ちよつとスター！なに一人だけ許されようとしてんのよ！あんたも道連れだからね！それよりごめんなさいいいい！」

「……何を言っているんだ？」

「ひい食わないで……え？」

パニック状態に陥り、必死の形相で命乞いを始める三月精に、ネロ・カオスが呆氣にとられたように呟く。それによつて毒気を抜かれたように、三月精も次第に落ち着きを取り戻していった。

「あ、あのー、さっきの私たちの話、聞こえてたんですか？」

「話？何か俺に言つていたのか？」

「い、いえ！知らないんなら知らないまままでお願いします！いやホントに！」

死に物狂いに告げるスターサファイア。後ろの二匹も胴から外れるほどの勢いで首を縦に振っている。状況が飲み込めないネロ・カオスだったが、気にしないことにして三匹に尋ねた。

「これから人里に降りたいんだが、道を知っているか？」

「え、人里？ああ、人里、人里への道ね」

「大丈夫か？」

「え、あ、はい。少し気が動転してしまつて。でも大丈夫。ちよつと深呼吸して落ち着けば大丈夫です」

三月精が揃って深呼吸を始める。やがてひと段落ついた所で、サニミルクがネロ・カオスに言った。

「ええと、人里への道だっけ？それなら知ってるわよ」

「そうか。有難い。それと、そこまで案内してくれると助かるんだが」

「うえ！？」

「嫌か？」

「いい嫌じゃないけど、私達が地図書くんで、それで勘弁してくれない？」

露骨に嫌がるルナチャイルドを尻目に、ネロ・カオスがなおも食いつ下がる。

「俺はお前達妖精の、もつと多くの行動パターンを採取したいんだ。そのためには、実際にお前たちに同行してその活動を直に見聞きした方が効率がいいんだが、駄目か？」

「ああ、それは……」

「駄目なのか？」

「ひっ」

ネロ・カオスが顔を近づける。それによってあの時の恐怖を脳裏に思い出した三月精は、その要求を呑むしかなかった。

まあ、半分自業自得である。

「ところで、貴方」

「どうした？」

博麗神社から人里に向かう途中、彼の気配にそれなりに慣れたスターサファイアがネロ・カオスに尋ねた。

「確か紅魔郷の一面ボスよね。そっちのほうはどうしたの？」

「ああ……」

ネロ・カオスが一瞬渋い顔を見せる。そしてすぐに真顔になり、自分に言い聞かせるようにスターサファイアに言った。

「俺の仕事は終わった。奴らの代役も立てた。何も問題はない」

「代役？」

「こつちの話だ」

「ああ！ルナチャがコケた！」

突如後ろから響いてきた悲鳴によって、スターサファイアの追及は不意に終わった。そして結局、ネロ・カオスの言葉の意味を彼女が知ることはなかった。

紅魔館正門前。いつもはチャイナ服を着た中華風の少女が立っている場所に、大剣を脇に置いたメイド服姿の少女が立っていた。三面ボス紅美鈴役のフィオナ・メイフィールドは眠気を追い出すように大きく背伸びをした。

「ふあ……自分でもよくわからないけど眠くなっちゃいそう……」
そう呟いた直後に誘惑に駆られそうになる自分に気付き、喝を入れるように自分の頬を厚手の手袋をはめた両手で叩く。

「だ、だめだめ！私はここの門番なんだから、ちゃんとここを見張ってなきゃ！」

そう言って身の丈ほどある大剣を両手で構え、眠気を覚ますように精神を集中させる。仕事そっちのけで昼寝に興じる彼女のオリジナルとは偉い違いである。

「ほう、中々やるじゃないか」

彼女の足元から声が響いたのは、そうして一片の隙も無く、大剣を構えていた時だった。

「構えも道に入っている。お前、結構な使い手だな」

貫禄と威厳を兼ね備えた、大物然とした重低音。誰かはわからない

かったが、出来ることは確かだった。言葉の内から圧倒的な力を滲みださせるその存在を前にして、フィオナの額から冷や汗が流れる。「だ、誰です？姿を見せて下さい！」

気圧されんとして力強く叫ぶフィオナに、声の主が冷めた口調で言った。

「とりあえず剣を降ろせニヤ。そいつが邪魔になつてて吾輩の姿が見えニヤいんじゃないかニヤ？」

「え？ああ、そういうことか……ニヤ？」

その台詞を聞いたフィオナが激しく戸惑った。声の調子が友人に話しかけるような、馴れ馴れしさすら漂う調子の物にガラリと変わったからだ。恐る恐る、フィオナが構えを解いて剣を降ろす。そして開けた視界の先に――

「ニヤ」

一匹の猫がいた。

「……ニヤ？」

いや、猫なのか？二足歩行する二頭身の猫がこの世にいるのか？顔だけは猫だった。あと全体的に浅黒い。

「おい小娘」

極限までデフォルメされた人の体と猫の頭をくっつけた物体が、高圧的な口調でフィオナに言った。

「その耳かっぽじって良く聞くんがいいニヤ。吾輩が博霊霊夢役のネコアルク・カオスだニヤ。地獄に行った自機役の代わりでわざわざ来てやったのニヤ。まあぶっちゃけ、正直めんどくさいから、これからデートしないかニヤ？」

フィオナは頭の中が真っ白になった。

第十四話「年中夢中×666」(後書き)

フィオナ・メイフィールド(登場作品:アルカナハートシリーズ)
イギリス出身のお嬢様。だったのだが、十三歳の頃に次元の歪みに
飲み込まれ聖霊となってしまう。以来彼女は体型が変わることも歳
を取ることもなくなり、永遠の十三歳としてメイドをして生活して
いる。性格は明るく前向きで、身長は137センチと小柄。しかし
戦闘時は厚手の手袋をはめ、身の丈ほどもある大剣をぶん回して戦
うパワーファイターでもある。手袋、大剣と聞いて某赤ずきんに登
場するゴスロリライバルキャラを思い出したのはどれだけいるだろ
うか?

ネコアルク・カオス(登場作品:MELTY BLOOD Act
Cadenza)

TYPE MOONのマスコットキャラである『ネコアルク(月姫の
登場人物であるアルクエイド・ブリュンスタッドをデフォルメ化か
つ猫化させた何か。こいつの時点で色々とかオス)』の声を「中田
譲治さん(ネロ・カオスの中の人)にやらせたら面白そうだな」と
いうメルブラ開発チームの狂った発想により誕生したクリーチャー。
「スタツフ以外だれが得するんだよこれ」、「スタツフ遊びすぎな
んだよ。自重しろよ」、「スタツフ、あなた疲れてるのよ」としか
言いようのない代物であり、それはもはやカオスを超えた明伏しが
たき何かである。

第十五話「カプコンファイティングジャム」

あの世。

三途の川。

一隻の小舟がその上を流れていた。

船頭を務めるのは一人の死神。刃先が蛇のように曲がりくねった鎌をオール代わりにしながら、先頭に立って悠然と舟を漕いでいた。「やあ諸君」

自分の小舟に乗せた二人の客の方を向き、小野塚小町が快活な笑みを浮かべながら言った。

「改めて、地獄にようこそ。歓迎するよ」

「歓迎すんじゃねえよ」

地獄に落ちた客の一人であるダンが、そう言つて口を尖らせる。

「何で俺達がこんな所にいなきやいけないんだよ？意味がわかんねえよ」

「そりゃあ、あんたたちが死んだからだよ。当然じゃないか」

「ふざけんな！こっちは人死に出る企画だなんて聞いてねえんだよ！向こうでもやり残したこと山ほどあるつてのに、どうしてくれるんだ！」

「やり残しを残したまんま死んでいった奴なんざゴマンといるから安心しなよ。それに自分が死んだのは自分の責任だろに。あたいに噛みつかれてもどうしようもないよ」

「まったくだな」

ダンの隣でそのやり取りを聞いていたコーディーが静かに頷く。そのコーディーを見たダンがあからさまに肩を落として言った。

「おい、お前までそんなこと言うのかよ」

「自分の命の持ち方は自己責任だつてことに変わりはないだろ。それに俺は大して向こうに興味も無いし」

「淡泊すぎんだろお前よ……」

「まったくだね。あんた、そんなにいいのかい？」

小町の言葉にダンがその方を向いて言った。

「お前どっちの味方なんだよ」

「あたいは俗物的な奴の味方さ。ロクに人生送ってないくせに、死んだからって全部諦めて、何処か悟ったようなスカした態度取ってくる奴は嫌いなさ。そんな態度取る奴より、死んだ癖にみつともなく命乞いしてくる奴の方が、人間臭さがある分あたいは好きだね」
「……」

「それともう一つ。シマシマのあんたには悪いけど、もう一度娑婆の空気に帰ってもらうよ。勿論ピンクのあんたもね」

「マジか！」

「マジかよ」

ダンがさも嬉しそうに、コーディネーがダルそうに言う。二人の反応の違いを見比べ笑みを浮かべながら、小町が言った。

「じゃあ今からあんたらを娑婆に返してくれる人の元に送るから。それまではまあ、いい機会だと思って、彼岸の景色でもゆっくり眺めておくんだね」

そして数十分の航海の末、二人が送られたのは裁判所のような作りをした建物の中だった。生前の世界の物と異なっているのは、目の前に山状になった、奈良の大仏と同じくらい（ダンの主観入り）の大きさの裁判官用の机があることと、それ以外に周囲になんの人工物も置かれていないことだった。

「あなた方が、ダンとコーディーですね？私は四季映姫・ヤマザナドゥ。幻想郷内での閻魔をしています」

その前方の机の頂上、壁のような高さと幅を持った背もたれのあ
る椅子に腰かけながら、四季映姫・ヤマザナドゥが二人を見下ろし
た。

「そう、貴方達は、少し世界への認識が甘すぎる」

そして二言目に説教を飛ばす。

「貴方達は、何があっても自分は死なないとか、何が起きてもきつ
と大丈夫だろうとか、そのようなことを考えていますね」

「いや、どうしてそんなこと言いき」

「貴方達の生前の行いは全て見てきました。その上で私はそのよう
な判断を下しているのです。もう一度言います。まったく甘いにも
ほどがある。貴方達が考えているほど、この世は優しくはないので
すよ？」

息継ぎをすることも無く、映姫が自分のペースでまくしたてる。

「いいですか？目に見えていないだけで、この世は危険で満ちてい
るのです。いつ何が起きるかわからない。一秒後に自分が死んでい
るという未来が発生する確率もゼロではない。世界はそこに生きる
者に、常に緊張と警戒を求めているのです。だと言うのに貴方達は、
仮初の平和にとっぷり浸かったために下らない錯覚に囚われ、危機
管理と言う物を疎かにし過ぎている。『自分は大丈夫』。『自分は
平気』。そのような考えを持っている者から真っ先に死んでいく。

死亡フラグという奴です。貴方達も御存じの筈でしょう。しかし貴
方達は、その死亡フラグと言う物は全てフィクションの中で起きる
物だと錯覚している。全く勘違いも甚だしい。現実の世界でも、死
亡フラグと呼ばれる物は言葉を変えて確かに存在しているのです。

それは『慢心』、そして『油断』です。しかし貴方達を含む全ての
人間は、それらがさも存在しないかのように日々の生活を送ってい
る。いえ、そのことを知っていながら、敢えてそれらから目を背け
て日々を生きている。それはもはや無知ではない、無謀という物で

す。そしてそれは当然、貴方達にも当て嵌まる。いいですか。しっかりとよく聞いておきなさい。それが今貴方達の積める善行なのですから」

～三十分省略～

「……彼らは皆口々にこう言つのです。『どうして自分がこんな目に合うのか』と。しかしそのような考えこそが、自分を今の状況に突き落とした最大の原因であることを彼らは知らない。いえ、知りながら認めようともしないのです。それが生命の弱みの一つ。そして欠点の一つなのです」

「あの、四季様。いい加減本題に入った方が」

「黙りなさい小町。そもそも今まで私が言ってきたことは、全て貴女にも当て嵌まるのですよ？全くいつもいつもヘラヘラとして。そのことを貴方はわかつているのですか？わかつていないはずですよ。わかつているのならもう少し日ごろの行いを改めるでしょうから。しかしそれらしいということは貴女はやはり——」

（やべえ、飛び火した！）

（ざまあwww）

～三十分省略～

「大体、あの程度のことです済んだだけでもラッキーだと言つのに、彼らはそれさえも不服として、自分たちの意見が最も正しいと言いがかりをつけてくる。まったくもって理不尽にも程がある。彼らは自分たちの存在がこの世の中でどれほど矮小な物なのかまるでわかつていない。謙虚さを欠いた者にこの世界を生き抜くことは出来なと言つのに、それすら忘れて有頂天になっている。しかもその態度は今や、あらゆる世界に住む殆どの人間や妖怪あぐくの果て神や悪魔でさえも取るようになってる。以前はそのようなことはなか

ったというのに、誰も彼も我を通すばかりで心から他人の意見に耳を傾けようとする者はいなくなってしまった。ああ、嘆かわしいばかりです」

「……流石にそれは無いんじゃないか？」

「四季様は基準が極端すぎるんだよ。あの人には零か百かしかないのさ。誰だって欠片ほどの邪推はするだろうに、それすら認めようとしなない。四季様の要求に適う聖人君子みたいな奴がうじゃうじゃいる訳無いだろうに」

「大体ですね——」

（三十分省略）

「……さて、少し話しこんでしまいましたね。それでは本題に入りますようか」

そう言って映姫が目を向けると、その先にはグロッキー寸前の人間二人と死神一人の姿があった。

「それで？俺達を生き返らせてくれるってのは本当なのか？」

それから暫くして、額の汗を拭いながらダンが映姫に言った。映姫が顔色一つ変えずに返す。

「ええ、本当です」

「一体どうやって？ドラゴンボールでも使おうってのか？」

「その辺りは企業秘密ですね。とりあえず、生き返るためには私の指示に従ってもらう必要があるのですが、宜しいですね？」

「ああ、いいぜ」

ダンとコーディーがそろって頷く。それを見た映姫が小町に目配せをし、小町が軽く頷いて何処かに向かおうとした時、

「——ッ！」

およそ人の物とは思えない、それこそ地獄の悪鬼が発するような叫び声が辺りにこだました。聞く者の心を挫き魂を砕く、恐怖の塊

の如き咆哮だった。

「お、おい、今のなんだよ？」

屍餅をつき、齒の根が噛み合わないほどに動揺したダンが映姫に言った。苦い顔を浮かべながらコーディーもそれに続く。

「人間の声にも聞こえたけど、あれは人間が出している声じゃ無かったな。こつちには怪物でも住んでるのか？」

「いいえ、彼はれっきとした人間です。いや、姿形だけは人間と言った方が適切でしょうか……しかし、まったく彼にも困ったものです。とつくの昔に死んだというのに、未だにそれを認めないでああやって大暴れしている——」

そこまで言って何か思いついたのか、映姫が顎に手を当て考え込むように濁った空を見上げた。やがて顎から手を話し、視線を元に戻して映姫が言った。

「最初に言った通り、貴方達はこの世の方へと戻してあげます。しかしその代わりと言っては何ですが、一つお願いを聞いてはくれなんでしょうか？」

「……嫌な予感しかないんだが」

数秒後、コーディーの予感は的中した。

岩だらけの斜面を登りながら、ダンが愚痴を漏らした。

「ちくしょう、あの閻魔め。人の足元見やがって」

「文句言うな。あの時俺達が断つてたら、奴は本気で取り下げる腹積もりだったぞ」

「わかるのかよ？」

「口ぶりでわかる」

「ちくしょうが」

ダンが足元の小石を蹴りながら毒づく。あの時地獄の底からこたますような叫び声を聞いてから、映姫が生き返るための交換条件として突如付きつけてきたのは、二人の予想内にして最悪のものだった。

あの声の主を黙らせてこい。

追記・意識：生半可なことじゃ黙らないから倒してこい。

「馬鹿じゃねえの!？」

ダンが鬱憤を爆発させるように吠えた。

「ふざけてんだろ!あれどうみてもこの世の生き物が出せる声じゃなかっただろ!俺たちにやれるとでも本気で思ってたのか!？」

「お前ストリートファイターだろ。口より前に体を動かしたらどうなんだ」

「それで奴に挑んで返り討ちに遭えつてのか?一回死んでもう一回死ねつてか?冗談じゃねえ。俺は強い奴と会うために戦ってる訳じゃねえんだよ」

「でもやるしかねえだろ。でなきゃ返さねえってあの閻魔が脅してきてるんだから」

そうこうするうちに、二人は斜面を登り切り平坦な荒れ地に辿り着いた。そこは黒く淀んだ空を背景に大小様々な岩がゴロゴロ転がった、この世の終わりを映したかのような場所だった。

「墓場にするにはもってこいだな」

「最初から諦めムードでどうするんだ。俺はやるぜ」

「腹くくったのか？」

「ここまできたらしょうがねえじゃねえか」

ダンが震える体を無理に押さえ付けながら強がって言つてのける。しかしそれを笑う余裕はコーディーには無かった。姿を見せていないのに、例の叫び声を上げたと思われる存在の狂気に満ちた気配がひしひしと伝わってくるからだ。気を抜けば自分も食われてしまう。

「おい」ダンが震える声でコーディーに言った。

「どうした?」コーディーがそれに答える。ダンが無言で目の前を指さした。

揺らめく血の色のオーラを纏いながら、向こう側の斜面から一つ

の人影が姿を現してくる。それは急ぐこと無く、ゆっくりと、しかし確実に斜面を登り、頭から順にその姿を露わにしていた。

やがて斜面を登りきり、一つの完全な人影が二人の前に立ちはかかる。その時不意に影の背後で雷鳴が轟き、それに張り付いている影を一瞬だが引き剥がしていった。

そして影の向こうにある物を見た時、二人は心臓が止まるほどの衝撃を覚えた。

「……！」

銀を基調にした鎧と頬と額を包むようあしらわれた兜。

左右対称に後ろ向きにつけられた、攻撃的に尖った兜の飾り。

背中から生やした、不気味にねじれた六本の飾り物。

裾のギザギザになった赤いマント。

両手に携えた片刃の長刀と散弾銃。

この世の全ての闇を詰め込んだかのような、光一つ見えない漆黒の瞳。

「我こそは、第六天魔王」

長刀を天高く掲げ、声高に叫ぶ。

「織田信長ぞ！」

それと同時に周囲の地面が吹き飛ばされ、そこから火柱が何本も吹きあがっていく。炎と、それによって巻き上げられる風の轟音に混じり、信長の悪魔のような笑い声が高々と響いていく。

「……こいつは……」

その地獄の光景を前に、ダンとコーディーは、この依頼を受けたことを後悔し始めていた。

第十五話「カプコンファイティングジャム」(後書き)

織田信長(登場作品:戦国BASARA)

自ら第六天魔王を名乗り、天下布武の名のもとに全国を力と恐怖で支配しようとする、BASARA界を代表するボスキャラ。性格は冷酷非道、気紛れから戦争とは何の関係ない村を焼き払い村民を皆殺しにするといった残虐性も持っている。基本的には長刀とショットガンを得物にして戦うが、大抵の人間は信長に睨まれるだけで戦意を喪失してしまう。ここで終われば典型的なラスボスで終わるのだが、彼もまた戦国BASARAの人間。OPやデモで意味もなく巨大化したり、目からビームを出したり、スタンド能力に目覚めたりと、そのブツ飛び具合はやはり尋常ではなかった。

第十六話「少女ネスト」

この企画が始まってから殆どの時間、八雲紫は自分の屋敷の中にいた。そこで天狗から送られてくる情報に目を傾け、何か問題が発生すればスキマを開き、そこに介入して打開策を提案する。それが主な彼女の仕事であった。なお、その「裏方役」には、紫の式である八雲藍も関わっていた。

故にその門扉は常に関閉された、天狗の来訪を無条件で歓迎していた。しかし風神録が中止となったのと同じ時、そこで一つの変事が起きた。玄関はもとより屋敷中の全ての窓に「面会謝絶」と書かれた貼り紙が貼られ、外部のからの存在を完全にシャットアウトしたのだ。それはネタを手に意気揚々とやってきた天狗たちを困惑させたが、相手は大妖怪である八雲紫。禁を破り、乗り込んで追及しようという命知らずがいるはずも無かった。結局天狗たちは外で指をくわえて、その扉が開け放たれるのを待つよりなかった。

同時刻。その肝心の屋敷内にある居間には、張りつめた空気が漂っていた。テーブル越しに対面した、本来ならば来るはずの無い「客人」を前に、紫の後ろに控えた藍が表情を硬くする。

「藍、別に戦おうってわけではないのよ。もう少しリラックスなさい」

「は、はい、申し訳ありません」

その気配を察し、紫が窺めるように藍に言う。そして湯呑の中の茶を少し啜り、一息ついてから紫が目の前の客人に話しかけた。

「さて、今日はどのような御用件でいらしたのかしら？」

細められた紫の双眸が客人の瞳を捉える。そして自分でも確認す

るように、紫が相手の名を告げた。

「古明地さと子さん？」

「……」

虚ろ気な瞳をした少女が、紫を見返した。

古明地さと子。

地霊殿の主にして、「心を読む程度の能力」を持った「覚り」の妖怪。

そして彼女はその能力を持ったために地上の者達から疎まれ、迫害され、地下に追いやられたという過去を持つ。

それが恐怖から来るのか憎悪から来るのかは分からないが、それ故に地上の人妖に対する彼女の考えは決して良いものではなかった。またそんな経験をしたからなのか、それとも元々なのか、彼女自身非常に根暗で捻くれ者の性格をしていた。おまけに自分から外出しようなどと考えたことは一度も無かっただろう。

そんな彼女が、地上の妖怪である八雲紫と、たった一人で接触を図ってきた。ある意味では異常事態であった。

「私がここにいるのは異常であるとお考えのようですね」

さとりが視線を動かすこと無く、藍の考えていることを言い当てる。覚りの前では、心の内で思ったことはすべてさらけ出されてしまっただ。そのことは藍も知っていたが、いざ自分が読まれるとなると、まるで自分の全てを見透かされているような気がして薄ら寒い感覚を味わわずにはいられなかった。

そんな藍の考えもすっかりと読み取りながら、しかし敢えてそのことを口には出さずにさとりが言った。

「確かに、私は地上のことが好きではありません。一刻も早くこの話を切り上げて、さっさと地底に帰りたい気分です」

「紫様を前にして、よくもまあ言えたものだな」

怒りよりも呆れを滲ませながら藍が返す。命知らずにも程がある。

だが紫はそれに動じることなく、平然とした口調でさとりに言った。
「そうね。私としても、自分の仕事が山のように残っているの。お互いのために、早い所本題に入らないかしら？」

「ええ。その方が無難でしょう」

紫ではなく目の前に置かれた湯呑からたちこめる煙に目を向けながら、さとりが口を開いた。

「ここにやってきたのは、折り入って頼みがあるからです」

「頼み？」

「空のことで」

さとりの言葉を聞いた途端、紫が僅かに眉をひそめた。

靈鳥路空。守矢の神々によって神の力を授けられた地獄鴉であり、さとりのペットの一匹でもあった。ついでのとてつもない鳥頭で物忘れが激しく、また自らの力で地上を支配してやろうと本気で考えていた時期もあった。紫個人にとっては大した脅威ではないが、本気で無差別破壊に及んだ時の幻想郷に与えるダメージは計り知れない。そう言った意味で、彼女は紫の頭痛の種の一つであった。

そうして紫が顔をしかめていると、さとりの方から話を切りだしてきた。

「今回の企画、我々地霊殿組が辞退したのは知っていますよね？」

「ええ。私は参戦しても構わないって言ったんだけど、あなたたちのほうから断ったのよね」

「所詮私達は日陰者。それに私達の中には、幻想郷の外の人間を大勢引きこむことに抵抗を示す者も多かったのだ」

「まあ、私としても、嫌だと言う者に無理強いさせる気はないんだけど……それとあの地獄鴉と、どういった関係が？」

一瞬言葉に詰まるさとり。だが意を決して、さとりが言葉を紡いだ。

「どうやってかはわからないのですが……空がどこから、貴女の力を借りずに外の世界の存在を呼び出してしまったようで……」
「ほう？」

広げた扇子で口元を隠し、紫が愉快そうに目を細める。さとりが続けた。

「当然私達の方からも、それを元の世界に戻すように空を説得しました。彼女はそれを聞き入れてくれたのですが、今度はそれをどうやって元の世界に戻せばいいのかまるでわからず……。おまけに私達がそうやって手をこまねいている間、それは空が住処とさせていた間欠泉地下センターを飛び出し、都の周辺に出て我が物顔で暴れ回ったのです。おかげで、地霊殿は粉々になるわ都は火の海になるわ返り討ちに遭った無謀な鬼たちのおかげで怪我人が増えて人手が足りなくなるわ……」

次第に嗚咽を混じらせながら地底の惨状を語るさとりを見て、藍は『彼女も苦労人なのか』とほんの少し同情した。そして目尻に涙をためながらさとりが言った。

「お願いです。どうか、貴女の力で彼を静めてくれないでしょうか？ 残念ながら、単純な『力』では彼を倒すことはできそうにない。貴女の力で外の世界に直接送り返してもらえないのです」

「……」

涙を浮かべながらもそれを恥じることなく、そのまま紫をまつすぐ見据えるさとり。神妙な面持ちでその視線を正面から受け止める紫。やがて扇子を閉じ、静かに、だが断言するように紫が言った。

「わかりました。その異変、私達の方で解決しましょう」

「本当ですか……！？」

驚きながら尋ねるさとりに、小さく笑いながら紫が言った。

「ええ。地底もまた幻想郷の一部。それを蔑ろにしたとあっては、幻想郷の賢者の名が泣くからね」

そう言って立ちあがり、扇子を縦に動かし空間に裂け目を作る。

「じゃあ、私は後から解決策をそちらに送るから、一旦ここから帰りなさい。外にはパパラッチ連中がうるついているでしょうから」

「はい、ありがとうございます」

小さく礼を言い、さとりがスキマの中に足を踏み入れる。そして

さとの姿が完全に消えると同時にスキマもゆっくりと閉じられていき、やがてそれ自体が完全に姿を消した。

「良かったのですか、紫様？」

スキマが完全に消えると同時に、藍が紫に尋ねる。紫が澄まし顔で返した。

「私の言葉に偽りは無いわ。幻想郷を守るのが私の仕事。そうでしょう？」

「今回の地底の異変、件の現金消失に繋がっているとお考えですね」それを聞いた紫が、不敵な笑みを浮かべて藍の方に振り返る。

「あら、わかつてるじゃない」

「それと、守矢神社に開いた大穴とも関係があると」

「大当たり」

藍が手を腰に当て険しい顔つきで紫に言った。

「まったく、人が悪い。なぜそれを彼女にお話しにならなかったのです？彼女は本気で困っていたというのに、フェアではありませんよ」

「聞かれなかったからよ」

しれっとした顔で言つてのける紫。毒気を抜かれた格好になり一瞬固まった藍だったが、やがて我を取り戻すと同時に目を閉じて腕を組み、渋い顔でため息をついた。その横で、紫は何事もなかったように新しいスキマを作っていく。そして生み出したスキマの中にひよいと入り、上半身だけをスキマの外に出しながら藍に言った。

「じゃあ藍、留守は任せたわよ。天狗たちの報告に耳を傾けておくのも忘れないでね」

「え、もう行かれるのですか？」

「善は急げよ」

「いや、早」

紫がそう言つて藍の追及から逃げるようにスキマの中に入り、そそくさとスキマが閉じられていく。完全にスキマが消えるのに一秒かからなかった。

「まったく勝手な……いや奔放な方だ」

その様を見てそう呟きながら、藍が玄関口へと向かっていく。予め配置場所を記憶しておいた「面会謝絶」の貼り紙を弾幕で燃やしていくのも忘れない。そして数分後、藍は外に待機していた天狗の数を見て再び頭痛を覚えることになった。

「あなた、暇そうね」

「ん？」

「ちよーっと、おねいさんのお願い聞いてほしいんだけど、いいかしら？」

「……あんだ、誰だ？」

スキマに入ってから数秒後、紫はバーベキュー会場と化した妖怪の山の川辺で、意気揚々とヘッドハンティングを開始した。

第十七話「王中王」

幻想郷における地底社会は、主に地上を追放された者、そして自らの能力を厭い地上から逃げてきた者達によつて構成されていた。その中には、強大な力を以てかつての妖怪の山を牛耳っていた鬼達も含まれていた。そしてかつて地獄として使われていた地底空間に逃げ込んだ彼らは、そこに都を築き、以来下界との接触を断つてそこで過ごすようになった。

要するに、地底は一筋縄ではいかない、ヤバい連中の巣窟なのだ（東方地霊殿の難易度がやたら高いのはそれが原因かもしれない）。また、幻想郷の妖怪は地上と地底を行き来することが固く禁じられているのだが、これは件の地底に多く存在する「厄介者」達を外に出させないためであったりもする。そのため、地底で何か異変が起きた際には、人間がそれを解決する必要があるのだった。

「私は人間じゃあないんだけどね……」

薄暗い洞穴の中、ここに来る前に八雲紫に聞かされた地底のあらましを思い出しながら、アバが誰に言うでもなく呟いた。

「でも、貴女は妖怪でも無いじゃないですか。だから幻想郷的にはセーフなんじゃないですか？」

「そうなの……？」

夫である鍵の形をした魔斧「パラケルス」の言葉を受け、アバが横で歩いていたジン・サオトメに尋ねる。ジンは若干戸惑いながらもアバに返した。

「まあ、そんなところじゃないのか？それに俺達は、いわゆる外の世界の出身だしな」

「幻想郷のルールは適用されない、ていうわけかしら」

「多分な」

そう言いながら、ジンが周囲の景色を改めて見回す。

「しかし、本当に幻想郷の地下にこんな空間があったとはな。俺のブロディアがすんなり入れるサイズじゃないか」

「妖怪、吸血鬼、不老不死、神様。まったく幻想郷とは非常識のオンパレードですね」

「おまけにこんな地獄跡地の地下空間……ジュール・ヴェルヌも真っ青ね」

自分達の常識を越えた情景を前に、ジン達が三者三様の感嘆の言葉を漏らす。

彼らは今、件の地底に居たのだ。

「おねいさんのお願い聞いてほしいんだけど、いいかしら？」

そもその始まりは、数分前、八雲紫がそれぞれに発したこの一言だった。ジンとアバの二人に頼もうとしたのは、どことなく暇そうだったからだ。

そしてそう一言断りを入れた紫は、突然のことで目を白黒させる相手を尻目に、向こうの反応を待たないまま地底の成り立ちと幻想郷と地底の関係、そしてそれを踏まえての異変解決の協力を一方的にまくし立てたのだった。

「——というわけで、私達に代わって地底に赴いて異変を解決してきて欲しいんだけど、頼めるかしら？」

これは相手が自分と同じくらいの理解力を持っている物として話を進める、ある種の紫の癖であった。だが聞き手の全員が紫と同じレベルで博識という訳もなく、第一そんな物を求めるのは酷にも程があった。紫はそのことを理解していなかった。

当然ながら、紫が話を終えた後も、二人は状況が飲み込めないまま茫然としていた。それを見た紫は「無理解な連中だ」と自分のことを棚に上げて大きくため息をつき、その後ある台詞をそれぞれに呟いたのだった。

曰く「あそこの妖怪は強いから修業にはもってこい」

曰く「死体がゴロゴロしているから夫の肉体の代わりも見つかるかもしれない」

結局これがキーとなり、ジンとアバは地底へ向かうことを了承したのだった。

最初からこうしておけばよかったのに。

「改めて考えると、何か上手く担がれたような気がするんだが……」

「ジンさん、気にははいけません」

渋い顔のまま言うジンにパラケルスが返す。

「ここまで来てしまった以上、お互い腹を括るしかないでしょう。今更引き返すのも悪いですし」

「墓穴に入らずんば虎兇を得ず。物事にリスクはつきものなのよ」
パラケルスに続くように、アバがジンの方へ顔を向けて言った。

その声の調子は相変わらず暗めだったが、どこか嬉しそうな響きが含まれていた。顔の方は半目開きで眼の下にクマ、土気色の肌と薄暗い地底の情景と合わさりかなりホラーであったが。

それに一瞬ビビりながらも、ジンがアバに尋ねた。

「随分嬉しそうだな。どうしたんだ？」

「だって、もうすぐパラケルスの体が入るんですもの……屈折十余年、ずっと追い求めて来た肉体……待っててね、あなた」

「い、いや、あの、お手柔らかにお願いしますね。はい」

そう言っ、さも嬉しそうに上半身だけでパラケルスに抱きつくアバ。だがそれに対し、パラケルスの方は若干迷惑そうに眼を背け

ていた。

「で、ですが、そう簡単に行くんでしょうか？聞いたところによるとこの地霊殿も全六面構成らしいのですが」

意識をそらそうとパラケルスが話題を変える。

「だが、俺たちのこれは撮影じゃない。道中にわざわざボスを置く理由もないし、異変起こした奴も一人なんだろう？上手く行けば目的地まで真っすぐ辿りつけるんじゃないか？」

ジンの言葉にアバも頷く。

「そういうこと。だから大丈夫、問題無いわ」

パラケルスは嫌な予感を拭えずにはいらなかった。

「うつん……そうであればいいのですが」

しかしパラケルスの予想に反し、地霊殿一面、二面のボスは姿を現すことは無かった。本来の二面ボスの水橋パルスイには会ったのだが、先方には既に話が伝わっていたらしく、妬ましい妬ましい呟きながらもジン達をすんなり通してくれた。

「ね？誰もいないでしょう？」

都に向かう道すがら、パラケルスに言い聞かせるようにアバが言った。ジンがそれに続く。

「ああ。この調子なら、異変の元凶まで誰にも会わずに行けるかもしれないな」

「俺が最強の格闘王、KENJIだ！もう一度やるか」

「いるじゃないですか……！」

地底・旧都。三面ボス星熊勇儀役の空手健児を前に、三人はコンティニューを余儀なくされた。

「いやあ、地底で偶然こいつに遭ってねえ。聞けば修業の為に来た

って言うんで、一度手合わせしてみたんだが、人間のくせにまあ強いのかなの！それに面白い奴だったからさ、地上でやってる祭りにあやかっつて、アタシの代役に見たって訳さ。まあ本当に自機役が来るとは思わなかったんだけどね」

「空気読んでよ……」

快活に笑いながら事情を説明する星熊勇儀に、アバが息も絶え絶えに返した。

第十七話「王中王」（後書き）

空手健児（登場作品：ファイトフィーバー）

韓国産格闘ゲーム「ファイトフィーバー」に登場する最終ボスにして、世界一のテコンドー使いを決める戦いの最中に颯爽と現れた自称最強のカラテチャンプ。テコンドーとは何の関係もないが気にしてはいけない。その性格は非常にスポーツマンシップに満ち、自分に勝った相手を自ら褒め称えるという漢らしさを持つ。だがそんな彼の最大の持ち技は「ウルトラバックドロップ」。もはや空手ではないが気にしてはいけない。

第十八話「Second Joker」

紫が屋敷を出てから、藍は居間に籠って天狗が持ってきた報告書に目を通す作業に没頭していた。

「ほう。順調とはいかないが、それでも進んではいるのか」

感心気味にそう呟きながら、テーブルの上に積まれた資料の山から一枚一枚手に取って行き、その内容を確認していく。中には紅魔郷自機組が死亡したり、我を失った博麗の巫女が他のボスを襲撃している等穏やかでない内容もいくつか見られたが、そうした非常事態の殆どは、紫と藍にとっては全て予想の範囲内の出来事であった。「そうでなければ、事前に地獄に赴いて交渉などしないさ。博麗の件も、対処部隊を用意してある……やはり紫様は天才だな」

自らの主の聡明さに思いをはせ、藍が陶醉するように呟く。しかし一枚の報告書に目を通した時、それまで明るかった藍の顔に影が差した。それは東方星蓮船の現在の状況を伝えたもので、自機役が二面を突破したことを告げるものだった。

「星蓮船……自機役はあの連中か」

あの連中。星蓮船自機役に抜擢された三人を脳裏に思い出し、藍は顔をしかめた。

奴らは危険だ。上手くは言えなかったが、藍は初めて彼らを見た時、自分の中の動物的な直感が自らにそう告げてくるのを感じたのだった。そしてそれ以来、藍は自分でもよくわからないままに、その三人を強く警戒するようになっていたのだ。

「一応連中への対策も講じておいたが……杞憂で終わればいいんだが……」

片手で報告書を握りしめたまま、藍が苦々しく呟いた。

「弱いしウザイしその上しつこいし。生きてる価値あるの？アハハ」

東方星蓮船二面。右手で前髪をいじり、左手で多々良小傘役である緋雨閑丸の首根っこを掴みながら、星蓮船版博麗霊夢役のアッシュ・クリムゾンが嘲笑うように言った。

「もうちよつとウデを上げてもらわないと、僕としても楽しめないんだけどなあ……」

「放っておけ。次に行くぞ」

そう愉快そうに言いながら唇を歪めるアッシュに対して、霧雨魔理沙役のバージルが冷淡に告げる。そしてそれを聞いたアッシュがバージルの方を向き、気絶し脱力した閑丸を投げ捨てながら言った。「随分急ぐね。ゆつくり行ってもバチは当たらないと思うんだけど、何かあるのかい？」

「弱い奴に用は無い。それだけだ」

そう言って一人で先に進むバージルを見て、アッシュが手を腰に当て、わざと聞こえるようにため息をつきながら言った。

「あーあ。何で君みたいなネクラと組むことになっちゃったのかなあ？三人目も出発しようって時にどっかいつちゃったし。だいたい本編で弟君にボロ負けするようなヘタレとは――」

言い終わらない内にバージルが得物である日本刀「閻魔刀」を引き抜き、身を翻してその切っ先をアッシュの鼻先に突きつける。

「怒った？」一瞬呆気にとられたアッシュが、その後目を細めて挑発する。

「殺されたいのか？」バージルが殺気を隠そうともせずに返す。

一触即発。張りつめた空気の中、先に音上げたのはアッシュの方だった。肩をすくめ、刃先をつまみながらアッシュが言う。

「やめやめ。こんなことしてたって時間と体力のムダだよ。さっさと先に進んじゃわない？」

「吹っ掛けたのはお前の方だ」

手を振り払い、刀を鞘に収めながらバージルが言った。ヘラヘラした態度のままアッシュが返す。

「随分根に持つんだね」

「黙れと言っている」

「はいはい。反省してまーす」

全く反省してない態度を見せながらアッシュがバージルを追い越して先に進む。

バージルは前に立つ苛立たい小僧の背中に向けて、殺気を隠すことなく放ち続けた。

アッシュは背後からのバージルの殺気をひしひしと感じながら、愉快そうにニヤついていた。

「ところでさ、君はどうしてこの企画に参加することにしたんだい？」

そうして暫く歩いた所で、両手を後頭部に置きながらバージルの横についたアッシュがそう話しかけた。

「……」

無視。構わず話し続ける。

「あのさあ、せっかく話しかけてるんだから少しぐらい反応してよ。友達出来ないよ？まあ僕はその気はないけど」

そこでアッシュがちらりとバージルを見る。目を合わせないまま、バージルが重々しく呟いた。

「力を探している」

「力？」

「己の信念を貫くためには絶対的な力が要る。力の無い奴は理想を語る資格はない。俺はそれを求めにここに来た」

「ふうん」

アッシュが興味なさげに相槌を打っていると、今度はバージルがアッシュに言った。

「貴様はどうなんだ？」

「僕かい？僕はねえ……暇つぶしかな？」

「ふざけているのか？」

「大真面目だよ。特にすることも無かったしさ。まあ強いて言うなら、賞品目当てかな？君は欲しくないの？」

「興味ない」

「あつそ。じゃあ僕がまとめてもらうけどいいかな？お土産として知人に渡そうと思うんだけど」

「好きにしる」

バージルがそう言い終えた直後、二人が何かをかわすように左右に飛び跳ねる。その瞬間、空気の刃がそれまで二人の居た地面を縦に切り裂いた。

「あらあら、流石にそう簡単にはいかなかったかしら？」

「良い勘をしている。腕も立ちそうだ」

やがて左右に分かれ片膝をついた姿勢の二人を見ながら、二人の女が姿を現した。二人とも修道女のような出で立ちだったが、一人はキツネ目で腰から蝙蝠の翼を生やし、もう一人は頭巾を被らず十字架の様な器具を片手に携えていた。

「へえ、君たちが三面ボスかい？」

その姿を見たアッシュが口笛を鳴らし、ゆっくり立ち上がりながら軽い口調で尋ねた。すると翼を生やした方がスカートをつまんでわずかにたくし上げ、優雅にお辞儀しながら言った。

「ええ。私が雲居一輪役、クラリーチェ・ディ・ランツァと申します。そして私の隣にいるのが、相方の雲山。宜しくお願いね」

「——エルザ・ラ・コンティだ」

「雲山です」

「エルザでいい」

「う、ん、ざ、ん」

「クラリス？」

「やあん、怖あい」

睨みつけるエルザ相手に両手を頬に当て、大げさにブリっ子ぶるクラリーチェ。その様を見てアッシュは口元に手を当ててクスクス笑っていたが、バージルは額に青筋を浮かべ不愉快そうにそれを見つけていた。

「茶番はいい加減にしろ。早く始めるぞ」

「だからさあ、もう少し落ち着きなつて。焦っても良いことないよ？」

たしなめるアッシュにクラリーチェが続く。

「その通り。せつかくの人生、楽しく生きなくちゃ意味ないわよ？」

「へえ？気が合うねえ、聖霊庁のお姉さん？」

「あらあら、お姉さんだなんて、照れますわね」

アッシュの言葉に笑顔で答えるクラリーチェだったが、その気配をガラリと変え威圧するようにアッシュに言った。

「……随分と物知りなのね、アッシュ・クリムゾン君？」

「まあ、持つてる情報は多い方がいいからね。それで？西欧聖霊庁対策実行本部特務一課の二人は、僕を捕まえるつもりなのかい？」

「ここで会うつもりは無かったんだが……お前が抵抗するなら実力行使も辞さない。私としては、出来るだけ穏便に行きたいんだが」

エルザが手にした十字架上の武器を構えながら、刃のように鋭い口調で告げる。

「お前の搜索は以前からハイデルンの部隊と合同で行っていたからな。ちようどいい。『遙けし地より出ずる者たち』との関係——答えてもらうぞ」

「やれやれ、ハイデルンも一枚噛んでるのか。面倒臭いなあ」

「そう言う訳で、私達と一緒に来てくれないかしら？悪いようにはしないから」

節々に殺意をちらつかせるようなクラリーチェの言葉に対し、前髪をいじりながら興味なさげにアッシュが言つてのける。

「イ・ヤ・だ・ね」

その言葉を代弁するように、青い魔人と化したバージルが二人に斬りかかった。弾丸のように突進し懷に潜り込み、居合の一撃を叩きこむ。

「ちっ……！」

「あらあら」

それに気付いた二人が大きく後ろに飛びのき、紙一重でそれ避开る。魔人状態を解除しながら、バージルが殺気を隠そうともせずと言った。

「もう一度言うぞ。茶番は終わりか？」

「なるほど、それが答えか」

「いや、僕はまだ何も言つて——」

「どの道そうする気だったんでしよう？」

「——仕方ないな」

そう呟いたアッシュが大きくジャンプし、頂点で一回転してバージルの横に付く。そして右手から緑色の泡立つような炎を出しながら、不敵な笑みを見せながら言つた。

「僕は自由人なんでね。僕の邪魔をするっていうんなら容赦しないよ」

「フン、始メカラソウ言ツテイレバヨイノダ」

「僕のやり方に口答えしないでくれるかな、バージル——」

そこまで行つた後でアッシュが眉をひそめ、バージルの方を向く。

「君、喉に何かつけてるのかい？かなりくぐもってたけど」

当のバージルは目を閉じ、我関せずと言った体でアッシュに返した。

「俺じゃない。奴らの他に誰がいる」

「ソノ通り。貴様二向ケテ喋ッタノハコノ吾輩ダッ！」

その言葉と共に一つの人影が、エルザとクラリーチェの前に真上から落下してきた。派手な音と土煙を立てながら、その影がゆっくりと立ち上がる。そしてその姿を見た時、アッシュとバージルが揃って目を丸くした。

「あれ？君って……」

「……そんなところで何をしているんだ？」

「フッフッフ。驚イテイルヨウダナ。マア無理モナイ。コノ東風谷早苗役ノ『ろばかい』様が、ヨモヤばす側ニツイテクルト八夢ニモ思ッテイナカタダロウ！」

本来なら自機役として参加するはずのロボカイの言葉を受けて、アッシュが頭を抱えながら言った。

「思う訳ないだろ？どこまで非常識なんだい君は」

「幻想郷デハ常識ニ囚ワレテハイケナイノデスネ！」

「黙れ」

バージルがうんざりしながら呟き、閻魔刀の切っ先をロボカイに向ける。

「お前も敵に回るといふのなら、纏めて斬って捨てるだけだ」

「ホホウ、ヤルトイウノカ？下等生物ドモメ」

「ていうかさ、どうして君がそっち側についてるのかな？それが気になるんだけど」

「才前ラガ邪魔ダカラダ。俺ノ雇イ主ノ崇高ナル目的——モトイ、才前ラミタイナ男連中ト一緒ニ旅ナドスルヨリハ、美女ト一緒ノホウガズット楽シイカラナ。我々ニ自機役ヲ代ワッテモラオウトイウ訳ダ」

「本音がどちらかは聞くまでも無いな」

「どうかな？ 案外そっちがメインかもしれないよ？」

ロボカイの言葉を受けて二人がそう言い合った後、アッシュがそっぽを向きながら言った。

「まあ、このメンツだと君達にハンデ一人分あった方が丁度いい感じだし。それで構わないよ」

「あら、誰が三対二って言ったのかしら？」

クラリーチェの言葉にアッシュが眉をひそめる。そしてその意味を聞こうとした刹那、更に二つの影が真上から落下してきた。

「戦闘モード 起動」

「戦闘モード 起動」

衝撃音と共に大地を揺らし、電子音と金属音を鳴り響かせ、立ちあがったセンチネルが目を赤く光らせる。クラリーチェが悪魔の様な笑みを浮かべながら言った。

「五対二よ」

「……聖霊庁も墜ちたもんだ」

「問答無用！ 死ネイ！」

第十八話「Second Joker」（後書き）

アッシュ・クリムゾン（登場作品：KOFシリーズ）

第三部「アッシュ編」の主人公。だがその人を食ったような態度、主人公のくせにガイルばりのタメキヤラ、そしてそれらの言動の節々に見せる気持ち悪さから「こいつは本当に主人公なのか？」「キモイよこいつ」等とプレイヤーから疑問の声をあげさせたという異色の主人公。そして最新作の13ではまさかのエディット専用キヤラ（要するにチームを組まず一人ぼっち）。いろんな意味で破天荒なキャラクターである。

バージル（登場作品：デビルメイクライシリーズ）

「DMC3」に登場するダンテの双子の兄。そして敵である悪魔の力に身を落としたダークスレイヤー。双子だけあり、普段はオールバックにしている髪を降ろすとダンテと瓜二つである。だが母の死を切欠に、人間の力を重んじるダンテとは考えの違いから袂を分かつようになる。性格は冷酷非道。父の形見である「閻魔刀」を使い悪魔を情け容赦なく斬っていく。

第十九話「Holy Order？」

ロボカイが飛び出し、センチネル二体がそれに続く。エルザとクリーチェはその場から動こうとはしなかったが、それを気にする余裕はアッシュたちには無かった。

ロボカイが正面から斬りかかり、それと同じタイミングでセンチネルが左右からピストンを利用しロケットパンチのように腕を伸ばして殴りかかる。

が。

「邪魔だよ」

「グゲエ！」

ロボカイが攻撃するよりも前にアッシュがその懷に飛び込み、ロボカイを蹴り飛ばして連携を崩す。そしてバージルが閻魔刀を水平に構えセンチネルの拳を受け止め、自身が前に一回転することでその拳の軌道をずらし地面に叩きつけさせる。そのままバージルは回転しながら上空に上がり、頂点に達すると同時に狙いを定め閻魔刀を両手に構える。

「Die」

一閃。バージルが真上から振り下ろした一撃によって、センチネルの体が真っ二つに割れる。そして断面や間接から煙と火花を吹き散らし、やがて轟音と共にその巨体を爆散させた。

「ナ、ナンテコトシヤガル！」

「温いな」

「じゃあもう一匹頼んでも良いかな？」

ロボカイの言葉を見殺し、アッシュとバージルが言葉を交わす。その二人を妨害するように、エルザが十字架——クルクスを回しながら飛びかかった。

「はあッ！」

「おっと」

アッシュが片手でクルクスを掴む。そして腕を引き寄せて顔を近づけ、アッシュがエルザに対し飄々とした口調で言った。

「いいのかい？ 聖霊庁があんな殺戮マシーンなんか使っちゃって」

「用意したのはロボカイだ。我々ではない」

クルクスを握る手を振り払い、エルザが距離を取る。

「腑に落ちないなあ。どうせ自機役よこせなんて、本気で思ってないんですよ？」

「誰だって一度は主人公になりたがるものよ。あなたもそうじゃないのか？」

「そうかもしれないけどさ、君はなーんか違う気がするんだよねえ。その気が無いって言うか、分を弁えてるって感じ？」

「オイ、何ライチャツイテイヤガル！」

アッシュとエルザのやり取りに嫉妬したのか、ロボカイが剣を構え、アッシュの側面から突っ込んでくる。しかしバージルが二人の間に割って入り、閻魔刀を斜めにして間一髪でそれを受け止める。

「うん、御苦労さま」

「話は後にしろ。本命が来るぞ」

バージルがロボカイを押し返し、アッシュの背後に回る。その後、アッシュの前方からセンチネルが、バージルの前方からクラリィチェが、同時に襲いかかってきた。

「仕切り直してところかしら」

「ターゲット 確認」

アッシュはセンチネルの拳を両腕でガードし、バージルはクラリィチェの放った空気の刃を閻魔刀で受け止める。

第二ラウンドの始まりである。

センチネルの攻撃を両腕で受け止めたアッシュ。その途轍もない

重さに、アツシュは身動きが取れないでいた。下手に体勢を崩せば向こうの思う壺である。手は無い訳ではないが、まだそのタイミングではないと何となく考えてもいた。そしてセンチネルもまた、目の前の敵相手にこの後どう攻めるべきか考えあぐねていた。

「さあて、どうしようかな、この状況」

アツシュが呆れながら呟いていると、センチネルの背後からエコーのかかった高笑いと共に声が聞こえてきた。

「借り八百万倍ニシテ返ス主義ナノダ！」

直後、ロボカイがセンチネルを背後から飛び越え、アツシュの真上に向けて剣を振り下ろしてきた。刀身に雷を纏わせ、一直線にアツシュに向かう。だがその奇襲に対し、アツシュは気味の悪い笑みを浮かべてそれに答えた。

「ああ、いい位置だね」

「ナニ！？」

ロボカイとアツシュが半歩前まで近づいた時、脚に緑色の泡立つ炎を纏わせ、アツシュがその場で大きくバク天をした。それはセンチネルの拳を上向きに振り払い、さらに炎を纏った足先がロボカイに容赦なく襲いかかった。

「エエイ、クソッ！」

だが余波で後方に倒れ込むセンチネルに対し、ロボカイは咄嗟に剣を前方に構え直してアツシュの攻撃を防ぐ。

「へえ？空中でガードできるんだ」

「オノレ、調子二乗リヤガッテ！」

片膝をついて着地したロボカイが悪態をついた時、どこから伸びてきた鞭がアツシュの片腕に巻きつき拘束してきた。

「悪いが、暫くそこにいてもらう」

アツシュの右斜め前方、鞭を締めあげながらエルザが囁く。そしてロボカイの方を向いて言った。

「こちらの準備は完了した。あとは釘づけにするだけよ」

「オイ、早スギルダロウ！モウチョット待テ！奴ヲ一遍ギヤフント

言ワセナキヤア俺様ノ氣ガ済マン！」

「自機になりたいんだろ？我慢なさい」

「ウ、ウギギ、ギ……了解」

「……？」

そう言つて引き下がるロボカイとセンチネルを見てアツシュが眉をひそめる。疑念を感じる行動ではあったが、では彼らが何をしようとしていたのか、この時のアツシュはまだ気付けずにいた。

一方、バージルの方。

刃を閻魔刀で受け止めた後、バージルの硬直が解けないままにクラリーチェが肉迫し、間髪をいれずに両の握り拳を以てバージルにラッシュを叩き込んでいた。笑顔のまま、機関銃のように拳を打ち込むクラリーチェ。対してバージルは閻魔刀の腹、刃、鍔、全てを使いそれらをいなしていく。

「あら、やるのね。じゃあ、もうちょっとスピード上げようかしら？」

「……女の腕力ではないな。貴様、悪魔か」

「わかった？実は私、魔族なのよ。よろしくね」

「よろしくされる謂れはない。斬る理由が一つ増えただけだ」

「あらあら、つれないのね」

そう言つて小さく笑った後、不意にクラリーチェが左手を伸ばして躊躇いもなく閻魔刀を鷲掴みにする。そして目をうつすらと開けた状態で顔を近づけ、それまでとは考えられないぞつとするほど低い口調でバージルに言った。

「貴方だつて墜ちた身でしょうに」

視線を合わせたまま、怯むことなくバージルが返す。

「悪魔の力は使えるからだ。使えない悪魔は斬り捨てる。それだけだ」

「私は使えない悪魔だとも？」

「言わないとわからんのか？」

バージルが真面目くさった表情のまま嘲りの言葉をぶつける。クラリーチェの表情が僅かに崩れる。

「――言うのね、若造」

「随分と激情家だな」

「あなたほどではないわ」

言い終えた瞬間、クラリーチェが握ったままの左手を捻り、閻魔刀をバージルの足に突き刺した。突然のことに一瞬目を大きくするバージルを尻目に、クラリーチェがその耳元で囁いた。

「あなたとは色々お話したいことがあるんだけど、私の方にも色々事情があつてね。今日はここまでなの」

横目で睨みつけながらバージルが返す。

「逃げられると思っっているのか？」

「あらあら、逃げ場がないのはあなた達のほうよ？」

そう言った後、クラリーチェがバックステップで二メートルほど後方に下がる。そして目を閉じて両手を合わせ、ぶつぶつと何かを唱え始める。クラリーチェの言葉に呼応するように、空気が淀み、気配が歪んでいく。

全てを悟り、バージルの脳に電流が走った。

「貴様……！」

叫び終わるよりも早く、アッシュとバージルの足元に魔法陣が広がり、二人を囲むように光を放ち始めた。

「してやられたね。最初から決着をつける気なんて無かったんだ」
鞭から解放されたアッシュが落胆気味に呟く。その腰から下は魔法陣に飲み込まれ、地上に出ているのは上半身だけとなっていた。
「最初クラリーチェたちが動かなかったのはそういうことか……それで？ 僕達をどこに送ろうって言うんだい？」

「大した所ではないわよ。ただちよつと、魔界に行つてもらおうかと」

「魔界だと？」

クラリーチェの言葉に上半身だけの状態でバージルが反応する。笑いながらクラリーチェが返す。

「安心なさいな。幻想郷の魔界は、あなたが考えているような邪悪な場所ではないわ」

「私達の仕事が終わるまで、そこで大人しくしていてもらう。地上に残られても、ロクなことはしないだろうからな」

「信用ないねえ僕達……まあ、大人しく待つとするよ。君達の『仕事』が終わるまでね」

アッシュとエルザの視線が交わる。アッシュが愛想よく笑い、エルザが何か察したように目を逸らしてため息をつく。

「フン、コレデ鬱陶シイ貴様ラトモ才別レダ！コレデ俺様ノ計画ヲ気兼ねナク実行デキル！」

「いいのかい？聖霊庁の人間の前でそんなこと言って」

「馬鹿メ！コノ二人ハソモソモ、自分ノ意志デ俺ニ協力シテイルノダ！ソウダロウ？」

「ええ。もう聖霊庁つてば、私達を散々コキ使う癖になんの見返りも寄越さないんですもの。嫌になっちゃいますわ！」

「ああまったくだ。連中は我々の実力をまるでわかっていない。その点ロボカイは違うな。私達をきちんと評価してくれる」

「ホレ見ロ！二人トモ俺ノ魅力ニメロメロナノダ！」

そう言つて胸を張るロボカイと、わかりやすいほど大袈裟にリアクションを取る聖霊庁の二人を見て、バージルがロボカイの方を向いて呆れるように呟いた。

「おめでたい奴だ」

「やらせておきなよ。短い間だけでも夢は見させてあげなきゃ」

「何ヲグチグチ言ツテイヤガル！用済ミハサツサト消エロ！」

ロボカイが叫ぶと共に、それまでゆっくり飲み込まれていた二人

が一気に魔法陣の中へと消え去っていく。そしてやがて光を弱めながら、魔法陣そのものも姿を消していった。

「フッフッフ、邪魔者ハ消エタ。コレデ第一段階ハ完了ダ。コノママ命蓮寺トヤラヲ乗ツ取り、我々ノ版図ヲ拡大サセルノダ！」

「それが、あなたの雇い主の意向なのですか？」

そう尋ねるクラリーチエにロボカイが返す。

「ウム。何ノ為ニコンナ事スルノ力俺ノ知ツタコツチャ無エガ、授カッタ任務ハシツカリコナス。ソレガ俺ノ流儀ナノダ！」

「やーん、ロボカイ様、格好いい！」

「ソウカソウカ！モット褒メ称エルガイイ！」

クラリーチエの言葉にロボカイが胸を張って鼻息を荒くする。その脳内、ロボカイの思考中枢は果たすべき野望実現のためにフルスピードで回転していた。

（連中ガ何ヲ考エテイヨウガドウデモイイ。コノ仕事ヲ終エタラ、マズハコノせんちねるトカイウマシーンヲブンドリ、最強ノるばかい軍団ヲ作ツテ世界ヲ支配シテヤルノダ！聖霊庁ノ二人ガ味方ニナツタノモ心強イ……待ツテロヨー、セカイ！ガハハハハハハハ！）
彼の未来予想図は、今まさに薔薇色であった。

（あいつ、全部察していたな）

ロボカイとクラリーチエの後ろで、エルザはアッシュの姿を脳裏に思い浮かべながら、一人そう考えていた。

自分達の本当の目的、そしてこれから自分達が何をしようとして

いるのか。それらを全て知った上で、アッシュは自分からその計画の人柱になったのだ。ただ単に面倒臭いだけだったのかもしれないが。

いずれにしろ――

「食えない奴だ」

愉快そうに大声で笑うロボカイを見ながら、エルザが呆れたように呟いた。そしてエルザは、これからの算段に思いをはせる。

多分彼らも思い描いていたであろうエルザの未来予測図は、ロボカイの物とは百八十度真逆の物だった。

第十九話「Holy Order？」（後書き）

クラリーチェ・ディ・ランツァ（登場作品：アルカナハートシリーズ）

「2」より登場した西欧聖霊庁の双壁の1人。愛称は「クラリス」。常に笑顔な、あらあらうふふタイプ。普段はヴァチカン市国でスターをやっているが、彼女の正体は物質界（人間界）に興味を持ってやってきた純粋な魔族である。物質界に降りた際にエルザ・ラ・コンティと死闘を繰り広げ、彼女とはそれ以降、気のおける親友（百合要素強め）という関係になっている。また件の戦闘で不老となり魔界にも帰れなくなったが、本人は物質界の生活を楽しんでいる。

エルザ・ラ・コンティ（登場作品：アルカナハートシリーズ）

クラリーチェと同じく「2」より登場する西欧聖霊庁の双壁の1人。十代半ばから魔族狩りをやっており、その凄まじさは味方からも恐れられる程であった。そして最後の任務と決めていたクラリーチェとの戦闘で不本意ながら相打ちとなり、生き永らえるためにクラリーチェ同様不老の身となる。性格は真面目で一本気でストイック。ただ自分に敵しすぎるあまり浮き沈みが激しい。他人にも厳しいといわれるとそうでもなく大変な仲間思いである。あんばんに並々ならぬ思い入れを持つ。

ロボカイ（登場作品：ギルティギアシリーズ）

終戦管理局によってカイ・キスクのデータを基に開発された人型兵器。非常に自己中心的でわがままであり、創造主にため口をきいたり、その命令に平気で逆らったりする。だが無慈悲という訳でもなくどこか愛嬌があり、そういう意味では非常に人間くさい面を持っている。人間よりも人間らしいと評されることもあるとかないか。まあ終始他人を見下している部分はあるが。あと、その体内はヤツ

。ーマン並みのトンデモギミック満載で、見ていて飽きない。

第二十話「香霖堂？：アンダーワールド」

道具屋とは本来、物を売買する場所である。店主が品を提供し、客が代価を払ってそれを受け取る。それが道具屋としてのあるべき姿であり、故に自ら道具屋として開いている香霖堂もまた、それに倣う必要があるのだ。

「で？だから何をすればいいって言うんだ？」

霖之助からそう言った旨の話を聞いた後、魔理沙は不思議がつてそう尋ねた。この時香霖堂にいたのは魔理沙と霖之助と斗貴子の三人。そして斗貴子はその話を無視して商品棚の本を手にとって読みふけていた。

「僕の話の意味はわかるよね？」頭を抱えながら霖之助が言った。

「ああ。道具屋は物を売り買いする所だってことだろ？」魔理沙がしれつと返す。

「わかってるのならいいんだが、もう少し客らしい振る舞いをしてくれないかって言いたいんだよ、僕は」

「ああ、わかってるぜ。だが残念ながら、私は物を売り買いするよきな規範的な客にはなれないぜ。そんな金は持って無いからな」

「店の隅にふんぞり返って茶を飲むのを止めるだけでも随分規範的な客に近づけると思うんだけどね」

そう言つて霖之助が店の一角を見据える。そこには隅を改造して作られた畳張りのスペースに腰を降ろし、ちゃぶ台の上に湯呑を置きながら我が家のように寛いでいる魔理沙の姿があった。きょとんとしながら魔理沙が言った。

「へえ、そうなのか」

「そうだよ。店の一部を私物化するなんて普通じゃ考えられないことなんだよ」

「なるほどな。だが例えそうだったとしても、私はこのスタイルを改めるつもりはない。負け惜しみとかじゃないぞ。ちゃんとした理

由だつてあるんだからな」

「どんな理由だい？」

「ここは道具屋じゃない」

魔理沙が胸を張つて言つてのける。霖之助が呆れながら言った。

「根拠は？」

「店主が商売する気が無い」

「いや、だからってねえ」

「だが事実だろう？」

手に持った本を閉じながら斗貴子が口を挟んでくる。思わぬ横槍に狼狽しながら霖之助が言つた。

「君はどっちの味方なんだい？」

「事実を言つただけだ。物を買わせる気があるなら、もう少しまともな場所に店を構えるべきなんじゃないのか？これではまるで――」

「物置」

「そう、そんな感じだ」

「……もう少しオブラートに包むとかさ……」

女二人の容赦ない口撃に霖之助が折れかけた時、「物置」の出入り口である木製の扉が重々しく開かれ、そこからマーカスが姿を現した。

「よう」

「ようマーカス。茶飲むか？」

「おう、いただくぜ」

当然のように魔理沙が湯呑に茶を注ぎ、当然のようにマーカスがそれを受け取つて一息に飲み干す。それを見ながら斗貴子が霖之助に言つた。

「観念しろ」

「もう勝手にしてくれ」

投げやりに霖之助が叫んだ。

「それで、そっちの方はどうなんだ？ 霊夢見つけたか？」

茶を飲み干してマーカスが一息ついた時、魔理沙が横から尋ねてきた。初対面の時にマーカスが暴走した博霊霊夢を取り押さえるために幻想郷にやってきたことを知った魔理沙は、「面白そうだな」ということでマーカスに協力することにしたのだった。今では交互で霊夢の搜索に向かっているが、二人がかりで一斉に行かないのは、「楽しみは長続きさせなきゃな」という魔理沙の提案でもあった。そんな魔理沙の言葉に対し、首を横に振りながらマーカスが言った。

「いいや、さっぱりだ。方々探してるんだが、影も形も見えやしねえ」

「そうか。じゃあ次は私が行ってくるぜ。私が帰ってくるまでゆっくりしていつてね！！！」

「ああ、そうさせてもらうか」

魔理沙が立ちあがると並行してマーカスが畳の上に腰を降ろす。それを見た霖之助が躊躇いがちに尋ねた。

「マーカス？」

「なんだ？」

「一応聞くんだけど、君はここをどういう場所だと認識してるのかな？」

「物置だろ」

「……」

「冗談だよ。道具屋だろ？ マジで真に受けんなよ」

「その話はしない方向で頼む。本気で気にしているようだからな」
暗黒空間に落ちかけている霖之助を横目に見ながら、斗貴子がマーカスに言った。それを聞いたマーカスが小声で斗貴子に返す。

「でもどう見たってそうだよな」

「言わぬが華だ」

「なるほど」

「まあ気を落とすなよ香霖。道具屋だろうとなかろうと、私はここ結構気に入ってるんだしさ」

マーカスと斗貴子のやりとりに合わせてるように、魔理沙が扉を開けながら霖之助の方を向き、どこか慰めるように言った。

「それにさ。それに気長に待ってりゃ、変わり者——もとい、客の一人くらい来るだろうさ。商売の基本は忍耐だぜ」

「ごめんください。珍しい物品を扱っている小道具屋っていうのは、ここでいいのかしら？」

入口の向こうから女性の声を聞きつけた魔理沙が、目を輝かせながら嬉々として霖之助に言った。

「ほら見る。私の言った通りだろ？ いやあ良かったな香霖！」

「霧雨にはなんだかんだで気に入られてるんだな」

「羨ましい野郎だ」

それを見た斗貴子とマーカスが揃って囁いたてる。

霖之助はそっぽを向いて赤面した。

魔理沙と入れ替わりで香霖堂に現れた女性——ララ・クロフトと名乗ったトレジャーハンターとの会話は、霖之助の陰鬱な気持ちを吹き飛ばすのに十分な効果を表した。

ララは考古学、そしてその延長線上に位置する世界中の神話や伝説に関する知識に精通していた。それだけでも霖之助にとっては嬉しいことだったのだが、霖之助がララに好感を持った最大の理由は、彼女が「話の出来る」人間だということだった。勿体ぶった話し方をしたり、憶測だけ並べて結論を喋らないような、幻想郷の識者連中とは訳が違う。彼女の言葉は常に個人的な結論と、それに至るまでの極めて論理的に構築された推論で成り立っていた。それを

聞いた霖之助は「久しぶりに人間の言葉を聞いた」とばかりに内心で狂喜した。

そして二人は暫し時間を忘れ、日本神話を中心に据えた古代世界の有り様、そしてそれが現代に齎した数々の事柄についての討論で大いに盛り上がった。

「ところで、ちょっと見てもらいたい物があるんだけど、いいかしら？」

話が一段落ついた所で、不意にララが霖之助に言った。憑き物の落ちたような、すっきりした顔で霖之助が返す。

「鑑定かい？何か見てもらいたいものでも？」

「ええ。今まで見たことも無い物だから、一体どのように使う物なのか判断しようが無くてね。幻想郷出身の人ならわかるかも知れないと思って人里を回ってたら、ちょうどこの店の話を聞いて、ここに来たって訳」

ちよつと話しこんじゃったけどね、と小さく笑うララに、同じく苦笑しながら霖之助が言った。

「幻想郷には外の世界には無いような物がゴロゴロしてるからね。見たこと無いものがあっても不思議じゃないさ」

「個人的には自力で説明してみたかったんだけど」

「人に頼むのも手段の内さ。さ、早速見せてくれないか？」

ララが腰のポーチから件の物を取り出し、霖之助の前に差し出す。そしてそれを見た途端、霖之助が傍から見てもわかるほどに顔をひきつらせた。

「あ、ああ、これ。はあこれ」

「おい、どうした？」

「お前のモンだったのか？」

霖之助の豹変に気付いたのか、マーカスと斗貴子が近づいてくる。ひきつった笑みのまま、霖之助が三人の方を向いて言った。

「これは宝塔だね」

「ほうとう?」

「仏塔の一つね。そもその起源はインドの」

「わりい、長くなるようなら滅茶苦茶簡単に纏めてくれねえか? 出来れば一言で」

先制するようにマーカスが釘をさす。ララが肩をすくめながら言った。

「有難い建築物よ」

「なるほどな」

「しかし建築物だと言ったな? 手乗りサイズの物もあると言ったのか?」

「あるのさ。幻想郷にはね」

斗貴子の言葉にさらりと答えながら、霖之助が言った。

「これはある寺に勤めてる毘沙門天——代理の持ち物だね。前に同じ物を拾ったことがあるからすぐにわかるよ」

「拾ったって、何をどうしたらそうなるんだよ」

「件の代理がすっかり失くしてしまったのさ。要は落し物だね。それを僕が拾ったという訳だよ」

「あの毘沙門天の代理? そんな存在がいるなんて——でも、だったら、そんな迂闊でいいのかしら」

そう言ってララが眉をひそめる。それに対しても、霖之助はこともなげに返した。

「うん。まあ、幻想郷だからね」

「もはや魔法の言葉と化してるな、それ」

「実際万能だからな」

「まったくリベラルな場所ね」

ララが呆れたようにそう呟いてから続けて言った。

「じゃあつまり、これはまだ持ち主がいるって訳ね?」

「まあ、そうなるね。持ち主は命蓮寺って言う所に住んでる妖怪の一人だよ。確か寅丸って言ったか」

「わかったわ。鑑定ありがとうね」

そう言つてララが宝塔を手に取り、踵を返してドアに向かう。そしてその間近まで来た時、不意にドアが勢いよく開け放たれ、そこから魔理沙が姿を見せた。

「よう香霖、戻ったぜ——てあれ、あの時の客じゃないか」

「あら、あの時のすれ違いの」

「何だよ、もう帰るのかよ」

そこまで言つて、魔理沙がララの手元にある物を目敏く見つける。最初に宝塔を、続けてララの顔を見ながら、魔理沙が好奇心に満ちた表情で言つた。

「これ、寅妖怪の持つてる宝塔じゃないか。どこで手に入れたんだ？」

「拾つたのよ、道すがらね。宝探しのためにこっちに来ただけど、まさかかこんなに簡単に手に入るなんて思つても無かつたわ」

「宝探しか。ロマンあるな。で、どうするんだ、それ。持ち帰るのか」

「持ち主がいるんでしょう？ならこれは落し物よ。ちゃんと持ち主に返さない」と

「なんだ、無欲な奴だな。私なら躊躇わずに貰つていくんだが」

「……あなた、いいトレジャーハンターになれるわよ。良い悪いは別にしてね」

それじゃ、と言つて帰ろうとしたララを引きとめる声が、店の奥から響いて来た。ララがその方に振り向くと、霖之助が若干険しい顔でこちらを見つめていた。

「君、確か宝探しのためにここに來たつて言つたね？」

「ええ」

「こちらに來たのは紫——八雲紫が一枚噛んでるのかな？」

「八雲紫？誰のこと？」

「な」

「え？」

魔理沙と霖之助が一瞬目を大きく見開く。それには気付かずにラ

ラが続けた。

「私達トレジャーハンターの間じゃ、幻想郷は結構有名な場所なのよ。『幻の地』、『現代から隔離された最後の楽園』、そして『非常識の跋扈する魔境』、その言い方は何十とあるわ。しかしその存在はぼんやりとながら知られていたんだけど、そこへの侵入方法は今まで解明されていなかった」

「今まで？」

「つい最近、私の優秀なパートナーの一人が、ある地点で時空の歪みを観測したのよ。観測したのはほんの一瞬だったけど、その後もその歪みは同じ地点で何度か観測されたわ。それを見た時、私はそこに何かあると直感した」

「そしてその歪みを調査しようと直接乗り込んで来たってわけか」
「ご名答」

マーカスの言葉に、腕を組みながらララが頷く。

「でもはつきり言つて、それがあの幻想郷に繋がつてるとは思いもなかったわ。だって幻想郷は日本にあるとされているのに、その歪みはアメリカで見つかったんですもの」

「アメリカだって？」

「どういうことだよそりゃ」

「興味深いですわね」

方々からあがる質問を制するように、ララと霖之助の間にある空間を切り裂き、そこから八雲紫がその姿を露わにした。突然の事態にララが驚きを顔面に貼り付けながらたじろいでいると、それを見て小さく笑いながら紫が言った。

「あなた、確かララ・クロフトと言ったわね？」

「え、ええ。あなたは？」

「私は八雲紫。件の八雲紫でございます」

「ああ、あなたが」

「ええ。それと突然で悪いんだけど」

紫が一步ララに近づく。それと同時に、ララは体を押し潰さんと

するプレッシャーを全身に感じた。だがララはそれを前にして、一歩も引き下がろうとはしなかった。この程度の修羅場は何度もくぐり抜けてきており、最早慣れっこであったからだ。汗一つ流さずに不敵な表情を作り、紫を見返してやる。

そんなララの胆力に感心しながら、紫がララに問いかけた。

「あなたの見つけたその歪み、いつ頃からあった物だったかわかるかしら？」

「え？ああ……ちょっと待って、思い出すから……ええと、確か最初に見つけたのは……」

顎に手を当て、ララが記憶を引きずりだす。やがて思い出したように顔を上げ、ララが言った。

「確か最初に見たのは八日、いえ、九日前辺りかしら」

「……成程ね」

紫が目を細めてそれに頷く。そしてすぐに明るい表情を見せながらララに言った。

「ありがとう。悪いわね、こんなことにつき合わせちゃって」

「いえ、構わないわ。それじゃあ、私はこれで」

「ええ。いつてらっしゃい」

「いや、待ってくれ。まだ僕は——」

霖之助がそう言いかけた所で、彼の前に紫が立ちはだかる。そして固く結んだ自分の口に人差し指を当て、じっと霖之助の目を見つめた。

ララが外に出て、扉がゆっくりと閉められる。だが紫のその無言のプレッシャーに、霖之助は勿論、周囲の人間も何も言葉を発することが出来なかった。

「——じゃあ、次は私の番ね」

そして固まっている霖之助たちを尻目に、紫が笑いながら言った。

ララが出て行ってから始まった紫の一方的な通達とプレッシャーから解放され、最初に口を開いたのは霖之助だった。

「まったく、なんのつもりなんだ」

ララが店から出て、紫もスキマの中に姿を消し、そのスキマも完全に消滅した。後に残された者達の中で、霖之助が彼らの気持を代弁するように呟いた。

「同感だな。それにあいつ、『後で面倒になるから早いとこ霊夢を捕まえておけ』ってぬかしやがった。注文の多い女だぜ」

そうマーカスが毒づく横で、斗貴子が霖之助に尋ねた。

「『下手をすると幻想郷が終わる』とも言っていたな。奴は本気で言っているのか？」

「多分、そこは本気だと思うよ。彼女はこう言う空気の時は何談を言わないタイプだからね」

「どうだか。案外私達を急かすための出まかせかもしれないぜ？」

「そうだとすると、彼女の言葉に従っておいて損は無いと思うな。」

少なくとも彼女は、『幻想郷が終わる』だなんて冗談でも言ったたりしない」

「そうなのかよ？」

「うん。彼女は幻想郷を愛しているからね」

「愛してる、ねえ」

その霖之助の言葉の後、マーカスが面倒臭そうに言った。

「仕方ねえな。手伝ってやるとするか」

「博麗霊夢の搜索か」

「ああ。どうせ奴の言うこと聞かなきゃ、俺は元の世界に戻れねえんだ。ム力つくが、やるしかねえだろ」

「別の理由もあるんだろう？」

「あると思ってるのか」

「スキマに感化された」

「彼女から愛国心に似た物を感じた。郷土愛かな？」

「馬鹿野郎」

根拠のない憶測に悪態をつきながらマーカスが外に出ようとする
と、魔理沙がその隣に駆け寄ってきた。

「なんのつもりだ？」

「最初に言ったる？面白いから付き合ってやる」

そう言っただけ笑う魔理沙を見て、マーカスが苦笑した。

「物好きな奴だ」

「そう。やっぱりそうなのね」

スキマの中。紫が誰に言うでもなく呟いた。

「外から干渉してきた者達がいる。これは確定ね」

眉根を寄せ、低い声で唸るように言う。

「誰かは知らないが、これ以上幻想郷で勝手はさせない」

「美しく残酷に往かせてやる」

第二十話「香霖堂? : アンダーワールド」(後書き)

ララ・クロフト(登場作品: トウームレイダーシリーズ)

世界を股にかける女性トレジャーハンター。驚異的な身体能力と鋼の精神で数多くの遺跡を踏破し、隠された多くの神秘に触れてきた。厚い唇と腰に交差するように挿した二丁拳銃がトレードマーク。日本では知名度はイマイチだが、海外では圧倒的な人気を誇っている。実写映画化されてから美形化が進んだような気がするが気にしてはいけない。田中敦子ってゆーな。

第二十一話「緋色の交響曲」

霧の湖を越えた先にある深紅の館、紅魔館。全身真っ赤だから紅魔館、わかりやすい名前ではある。赤かったからそう名乗ったのか、そう名乗るために赤くしたのか。それは誰にもわからなかった。

そんな内装も真っ赤な紅魔館の内部には、文字通り巨大な大図書館が存在した。何百何千と規則正しく並べられた本棚には、その全てに本が隙間無く収められ、その本の山から発せられる無言の威圧感、始めて見る者を悉く圧倒した。

「へえ……ふうん……」

本来ならば吸血鬼の友人である魔法使いが陣取っているその場所で、件の吸血鬼——六面ボス、レミア・スカーレット役のアナザーブラッドは、頬杖をつきながら、その中の一冊を読みふけていた。

「随分面白い本があるじゃない。これは思っていたより退屈しないで済みそうね」

「やれやれ、ここにいましたか」

そんな満足そうに頷くアナザーブラッドの姿を見やりながら、十六夜咲夜役のオズワルドが扉を開き、ため息交じりに言った。

「まったく探しましたよ。この屋敷は無駄に広くて困る」

「そんなの私に言われても困るわ。それで？私を探していたって、どういうことかしら」

「ええ。伝えておきたいことが一つ」

オズワルドが赤い半透明の丸眼鏡を軽く押し上げながら、アナザーブラッドに淡々と告げた。

「禍忌が帰りました」

「マガキ？誰かしら？」

「四面、パチユリー某役の人ですよ」

「ああ、あいつ」

本から目を離し、アナザーブラッドが四面ボス、パチユリー・ノ
ーレッジ役の禍忌の顔——薄気味悪い笑みを浮かべた生理的嫌悪感
を催す顔を脳裏に思い出す。

「理由は？」

「飽きたらしいです」

「へえ」

そして明後日の方向に視線を逸らし、興味なさげに言った。

「まあいいんじゃない？」

「いいんですか？」

「好きなようにやらせればいいわよ。別に興味ないし」

アナザーブラッドはそう言っ、それまで読んでいた、表紙にイ
タリック体で『強姦の歴史』と書かれた赤い装丁の本に再び目をや
り始めた。それを見たオズワルドが眉をしかめる。

「また濃いものを……」

「あら、結構面白いわよ」

「そついったものがお好きで？」

「勿論。私はね、この世に存在する快樂の全てが好きなの。これだ
って人間が悅樂を得るための手段の一つでしょう？」

「やられる方からすれば苦痛ではありませんが」

「与えられる方も、それがその内快感に変わっていくものなのよ」

そう言っ、おもむろに本を閉じて席を立ち、オズワルドの方へ近
づいていく。舌なめずりをし、右手を蛇のような動きで以て全身を
撫でまわしながら、ゆつくりと、焦らすように歩いていく。

「なんなら試してあげようかしら？貴方の躰で」

「ご冗談を」

二人の影が重なるほどに、アナザーブラッドが距離を詰める。や

がてアナザーブラッドがオズワルドの体に左手を押し当て、熱い吐息交じりに囁くように言った。

「私だって、もうしたくてしたくてたまらないの……いいでしょう？」

「私のような老年が相手でも良いと？」

「気持ち良くなればそれでいいの。さあ、次は貴方の番。本音を聞かせてくれないかしら？」

「……見境のない人ですね」

その直後、オズワルドの蹴りがアナザーブラッドの腹部に直撃した。為す術も無く吹っ飛ばされるアナザーブラッドと距離を取るように、オズワルドが大きく後ろに飛び退く。やがてアナザーブラッドが本棚の一つに激突し、材木のへし折れる乾いた音と本が崩れ落ちるかさばった音が合わさった派手な音を辺りに撒き散らした。

「昔の職業柄、己の精神を保たせる術は一通り心得ておりましてね。しかし、いやはや危なかった」

「……大した拒絶の仕方ね。うつとりしちゃう」

積み上げられた本の山を吹き飛ばし、アナザーブラッドが赤いオリを放ちながらゆっくりと立ち上がる。肌はおるか服にも傷一つついておらず、不意打ちを受けたにも関わらずその表情は恍惚に満ちていた。

「貴方いい。最高よ。貴方の感情をひしひしとを感じる。益々燃え上がってくるわ」

「……気味の悪い人だ。マゾヒストだとも言うのですか？」

「SもMも関係ないわ。言ったでしょう？私は人間の得られる全ての快楽、そこに潜む愛と憎しみの波動が大好きなの」

言葉を紡ぐたびに、アナザーブラッドの纏う雰囲気が淫卑で危険な物に代わっていく。

「教えて？貴方は私にどんな事をしてくれるの？どんな風景を見せしてくれるの？——ああ、もう、想像しただけでイッちゃいそう」

小指を噛み、内股で体を震わせ、切なそうな顔で打ち明けるアナ

ザーブラッド。それを見たオズワルドは、これ以上彼女と付き合うのは得策ではないと直感した。精神を病む前に逃げるべきだ。

「とりあえず、要件は伝えましたよ。後はご自由に」

「あら、逃げようっていうの？私はまだまだし足りないのに」

「失敬」

アナザーブラッドの言葉を無視して外に飛び出し、図書館の扉を閉める。はたしてこれで諦めてくれるだろうか？

無理だろうな。オズワルドは苦い表情のまま、懷からランプのカードの束を取り出した。

「主に楯突くのはメイド、もとい執事の仕事ではないと思うのですがね……まあ、正当防衛と言うことで一つ」

言い訳するようにオズワルドが呟くのと、図書館の扉が吹き飛ばされるのは、ほぼ同時だった。

紅魔館正門前。

フィオナ・メイフィールドは、目の前に突如現れた猫のような二足歩行生物——ネコアルク・カオスとのコンタクトに没頭していた。そして当のネコアルク・カオスはフィオナを前にして、大きく身振り手振りを交えながら演説をしていた。

「やはりメガネより猫の方が頼りにされていたワラキア何とかとの戦いで吾輩は集合時間に遅れてしまったんだがちょうどわきはじめてみたいなんてなんとか耐えているみたいだった。吾輩は型月の家にいたので急いだところがアワレにもメガネがくずれそうになってるっぽいのが携帯越しで叫んでいた。どうやらメガネがたよりないらしく『はやくきて』はやくきて』と泣き叫んでいる路地裏メーナーのために吾輩は前ダッシュを使って普通ならまだ付かない時間できょうきよ参戦すると『もうついたのか！』『はい！』『き

た！主人公きた！』『メイン主人公きた！』『これで勝つる！』と大歓迎状態だったメガネはアワレにも主人公の役目を果たせず死んでいた近くですばやく連コを行い主人公に返り咲こうとした。メガネからメールで『勝ったと思うなよ・・・』ときたが路地裏メンバーがどっちの見方だかは一瞬でわからないみたいだった。『もう勝負ついてるから』という黙ったのでカレーの後ろに回り小足を打つと何回かしてたらワラキア何とかは倒された。『猫のおかげだ』

『助かった、終わったと思ったよ』とメガネをコンティニューさせるのも忘れてメンバーが吾輩のまわりに集まってきた忘れられてるメガネがかわいそうだった。普通ならメールのことで無視する人がぜいいんだろがおれは無視できなかったので百円玉を渡してやつたら恥ずかしかったのか家に帰っていった」

「……はー」

一演説終え満足そうな表情を浮かべるネコアルク・カオスに対し、それを聞き終えたフィオナが素直に感嘆のため息を漏らした。

二人とも館内で起きている戦争には気付いていなかった。

「凄い……猫さん凄いんですね！」

「ニヤハハハハ、それほどでもニヤい。ただまあ、あの時は画面端で壁コン食らって僅かばかり死を悟ったが、予めコンフィグでAIレベルを下げていた吾輩に隙はニヤかったのニヤ」

それから数十分後、ネコアルク・カオスの活躍の数々を聞かされたフィオナはその度に驚き笑い涙し、そしていつの間にか、自ら嬉々として彼の話に聞き入っていた。そんなフィオナの真つすぐな自分への尊敬の念を感じて、ネコアルク・カオスもますます上機嫌になっっていた。

「あと吾輩の武勇伝は百八あるのだが、全部聞いてみるかニヤ？」

「はい！ぜひお願いします！」

「ニヤかニヤかわかつてる娘じゃニヤいか。感心しきりだニヤ」

満面の笑みで続きを催促してくるフィオナを見てネコアルク・カ

オスが心底嬉しそうに頷く。しかしネコアルク・カオスが何か言いかけた時、フィオナが思い出したように彼に尋ねた。

「そう言えば猫さん」

「わが……何だニヤ？」

「本来の自機役のお二人、死んじやったって本当なんですか？」

「ああ、ダンとコーディーとか言ったあの二人か？知り合いの学者から聞いた話ニヤんだが、まあ本当らしいニヤ」

話の腰を折られたことを気にすることもなく素っ気なくそう言ってから、ネコアルク・カオスが懷からタバコを取り出して火をつけ始める。そして目を細めながら一服した後、フィオナに言い聞かせるように言った。

「でも気にする必要は皆無ニヤ。ニヤにせこの企画の主宰者はこういう事態も想定して、参加者が死んだ場合は復活させるよう、予めあの世に連絡を入れておいたらしいからニヤ」

「……あの世って、そんな簡単に連絡つく所でしたっけ？」

「幻想郷は何でもアリな場所らしいからニヤ。まあ吾輩ほどの猛者ともなれば、たとえ死人が復活しようとしまいと別に驚いたりは一

」

「へえ、そうかい」

突如として背後から聞こえてきた男の声に、ネコアルク・カオスの思考が一瞬停止する。そして向かい合う形になっていたためにその声の主と一足先に対面していたフィオナは目を大きく見開き、手を口に当てて驚愕していた。

「は、はわわわわわ……！」

「……イヤーな予感……」

そしてネコアルク・カオスもまた、錆びたブリキ玩具のようにギリギリと、震えるように小刻みに首を振り向かせた。そして――。

「よう」

「地獄から舞い戻って来たぜ」

「ニヤ――」

二人を見たフィオナとネコアルク・カオスが泡吹いて倒れるのに、
さして時間はかからなかった。

「そんなことが……大変だったんですね」

「おうよ。ありやリアルに命がいくつあっても足りやしねえな。
あの時とった戦法なんざ、ある意味あの世だから出来たゴリ押しだ
よな」

「まあ自分で言うのもなんだが、かなりギリギリの勝ちでな。こう
して生きてるのが不思議なくらいだ」

「そうだったんですか。でもまあ、お二人が御無事で何よりです」
それから数分後、息を吹き返し、蘇生した自機役二人から大体の
あらましを聞いたフィオナは、今ではすっかりその二人となじんで
いた。

「ふかふか……幻想郷はここにあったのニャ……」

「……こいつ、実は起きてんじゃねえの？」

「まさか、ただの寝言ですよ」

未だ気絶していたネコアルク・カオスを、幼子をあやすように胸
元で抱きかかえながら、フィオナがきつぱりと言い放つ。そして二
人の話を思い出し、驚いたように言った。

「しかし幻想郷のあの世がそのような場所だったなんて……やつぱ
り、私達の世界のあの世も、そんな感じなんでしょうか？」

「いや、そう言われてもわかんねえよなあ、コーディー？」

「俺に振るなよ。まあそいつは実際に行ってみないとわからねえが
……というかよ」

「何です？」

「順応早くね？」

少し前までゾンビを見るような態度を取っていたとは思えないほ

どのフレンドリーっぷりである。しかしそれを聞いたフィオナは、少し考えてから躊躇いがちに返した。

「まあ、言ってしまったえば、私も似たようなものですから。その分抵抗が少なかったのかもしれないね……」

「似たような？ということは……」

ダンが首を捻るが、すぐにその首を横に振りながら言った。

「やめとくか。女性のプライバシーを探るのは男として恥すべき行為だからな」

邪念の無いその純粋な言葉に、フィオナが思わず目を潤ませる。

「ダンさん……ありがとうございます」

「いいってことよ。誰にだって知られたくない過去やら秘密やらはあるもんさ。それをいちいちほじくり返してちゃ世話ないぜ」

「お前もそうなのか？」

コーディーの言葉にダンがさらりと返す。

「俺だつてそうだ。お前もだろ？」

「……まあ、人並みにな」

顔をそむけながらコーディーが言った。そしてそれを聞いたダンにはフィオナの方を向き、親指を立て暑苦しいまでの笑顔を浮かべながら言った。

「な？みんなこんなもんだ。だから俺は、いちいち他人の秘密にはこだわらない。今のそいつを、そいつの心根を見極める。それだけだ」

「か、かつこいいです……！」

ダンの持論に、フィオナが素直に感動する。なぜだろう？今のフィオナには、ダンがとても輝いて見えていた。その姿を見るだけでフィオナは自分の心臓の鼓動が速くなっていくのをはつきりと感じたのだった。

「それはそうと、フィオナちゃんよ」

「は、はひ！なな何でしょうか！？」

なぜか緊張気味なフィオナが尋ねた直後、ダンの腹の虫が盛大に

鳴り響いた。

「どっかに美味しい飯屋とねえかな？腹減りすぎて死にそうなんだ」

「……」

ダンがそれまでとは一転しただらしない笑みを見せる。フィオナの幻想に幕が下ろされた瞬間だった。

「台無しだよ」

誰に言うでもなく、コーディーが呟いた。

第二十一話「緋色の交響曲」(後書き)

アナザーブラッド(登場作品:機神飛翔デモンベイン)

全身真っ赤なドレスに身を包んだ謎の少女。どこから、いつから、なんのために現れたのかもわかっておらず、前作の主人公だった大十字九郎とアル・アジフに愛憎入り混じった感情を抱いている。ちなみにアナザーブラッドと呼ばれるとキレる。その一方でファンからは『歩く十八禁』『エロ本』と呼ばれているが、どういう意味なのかはお察し下さい。

オズワルド(登場作品:KOFシリーズ)

『?』より登場した、『カーネフェル』と呼ばれるトランプを使った戦闘術を扱う老紳士。かつては腕利きの暗殺者であったが、今は引退し戦闘とは無縁の生活を送っていた。外見や語り口はとにかくダンディだが、動いている姿を見ると中々にキモイ。だがそれがい

禍忌(登場作品:KOFシリーズ)

半裸。キモクナイ。

第二十二話「携帯落とし穴」

フィオナの元にダンとコーディーが現れてから数十分後のこと。何十人も座れるような作りをした楕円形のテーブルが置かれた、紅魔館内の大食堂にて。

「ハムツ、ハフハフツ、ハフツ！」

「……………！！！面目ねエ面目ねエ！！死ぬかと思った……………！！もうダメかと思った……………！！！」

件の自機役二人はその端に陣取り、目に涙を浮かべ、テーブルを埋め尽くすほどの大量の料理を片っ端から貪っていた。

「しかし泣くほどとは……………本当に空腹だったんですね」

「ぱつと見ではわかりませんが、本人達が言うには相当の死線をくぐり抜けてきて、肉体も精神もボロボロになったらしいですから」

それを傍らで見守りながら、オズワールドとフィオナが感心したように話しあう。その中でフィオナは、オズワールドがなぜ頭に包帯を巻いているのか気になったが、門前の自分達のやり取りを思い出し、あえて詮索しないことにした。かわりにもう一つ気になっていたことを尋ねた。

「でもオズワールドさん。あれだけの量を良く作れましたね」

「私一人でやったんじゃないよ。ほら、外部からの協力者が何名かこちらに来てるじゃないですか。彼らに協力をお願いしたんですよ」

「ああ、確かこの館の本来の住人達が、『メイド代わりに使ってくれ』って言って、私達に寄越してくれた方達ですか」

そう言いながら、フィオナは初めて紅魔館に来た時のことを思い出していた。フィオナ達が入った時、既にそこはもぬけの殻だった。どこを探しても、前もって聞いていた吸血鬼や魔法使いはおるか、メイド妖精一匹見当たらなかったのだった。

代わりにあつたのが、件の書き込みがされた、なぜか時計塔に貼られた貼り紙であつた。

「あの時は面喰らつたというか呆れたというか……まあそれでもなんとか、こうしてやっていけてる訳ですが。協力者の皆様方には感謝しなければなりませんね」

貼り紙を見てから今までの館の運営を思い出し苦笑するオズワルドに、フィオナが改めて尋ねた。

「それで、オズワルドさんは誰に協力を申し込んだんですか？」

「本名は言えません。向こうから口止めされてるので」

「ヒントだけでもいいので、教えてくれませんか？」

「ヒント……」

少し思案した後、オズワルドがそれに答える。

「バラティ」

「ああ、わかりました。結構です……だからあんな台詞言わせただ……」

「あれももう十年ですか。時間が経つのは早いものだ」

「ん？何の話してるんだ？」

二人の会話を耳聴く聞きつけたダンが、皿を持ったまま尋ねてくる。

「ああ、いえ、こちらの話です。はい」

「ふーん、おかしな奴らだ」

「あなたたちほどおかしな連中はいないと思うんだけどね」

と、それまで二人の反対側に居座りその食事風景を愉快そうに眺めていたアナザーブラッドが不意に口を挟んだ。方々動かしまくっていた手を止め、コーディーがじっとそちらの方を見つめながら意外そうに言った。

「そんなにおかしいか？」

「ええ。一回死んで平然と生き返ってるなんて、その時点で普通じゃないでしょ？」

「まあ言われてみればそうか……いや普通に考えりゃそつだよな。」

当たり前のことだと思つて全然気にしてなかったが……こつちの空気に毒されたか？」

「環境への順応が速いのも人間の特権よ。胸を張りなさいな——それで」

瞬きする間もなくコーディーの背後に回つたアナザーブラッドが、その肩に顎を乗せ流し目を作り、耳元で甘く囁くように言った。

「教えてくれない？……あなたたちはどうやって蘇つたのかしら？」

「……！」

「な、ん、な、ら。私の身に刻みつけてくれてもいいのよ？あなたが向こうで受けた痛みの記憶をね……」

コーディーの背筋に寒気が走つた。自分の背後にあるのは、本能を刺激する甘美で狂つた世界。そしてそれを一目見たいと、己の心がザワザワと激しくかき乱されていく。振り返ればそれで済む。だが、振り返れば終わる。

「——ダン」

それから目を逸らすように必死に、だが口調は務めて平静を装いながらダンに言った。

「あ？」

「……お前が教えてやれ。多分適任だろ」

「どうした？汗だくだぞ？」

「気のせいじゃないか？」

「うふふ」

そんなコーディーの抵抗を見ながらアナザーブラッドが口元を歪めた。そんなガムシヤラな姿を見せられると益々愛着が湧き、益々壊したくなってくるではないか。

もう限界。本気でモノにしてやろう。心の昂りを抑えることなく、アナザーブラッドが熱く囁いた。

「気を逸らしたって無駄。いいのよ、我慢しなくて。さあ、本心に身を委ね——」

その時、アナザーブラッドの背後から飛んできたトランプのカー

ドを、彼女が顔を動かすことなく二本指で挟みこむ。そしてその後ろで眼鏡越しに睨みつけながら、オズワルドが威圧するように言った。

「自重してくださいますかな？」

「——空気の読めない従者ね」

そう言ってアナザーブラッドが挟んだトランプを肩越しに投げ返し、ダルそうな足取りで元いた席に戻っていった。

「まあいいわ。そのところを聞きたかったのは事実なのだし——ダンとか言ったわね？」

「うん？おお」

「暇つぶし代わりに、一つ話してくれないかしら？あなたたちがあの世で何をしてきたのか……その顛末をね」

そこまで言って、アナザーブラッドがダンの方を見つめる。予想通り、ダンの目はそれを披露したくてウズウズと輝いていた。

「聞きたいか？」

「ええ。とつても」

「そんなに聞きたいか？」

「二度も言わせないで」

「いいだろう！ならば聞かせてやる！このサイキョー流師範ダン様と、その付き人コーディーがあの世界で体験した、涙あり、熱血ありの一大ストーリーを！」

「……単純な人だ」

それを見ながら、オズワルドが呆れたように呟いた。そしてそんなオズワルドを尻目に意気揚々と話し始めたダンを見ながらフィオナが答えた。

「悪い人じゃないんですけどね……」

あの世でのダン・コーディー組対織田信長の戦いは全部で十一回行われ、そしてその内の十戦は信長が勝ちをもぎ取っていた。ちなみに全員既に死んでいるので、体力の消耗や受けた傷等が次の戦いに響くことは無かった。

「ウゴハア！」

「ダンがまた吐血した」

十連敗後、二人は息を整えるために信長から隠れるようにして斜面に身を潜めていた。この間信長はその場から動くこと無く、腕を組み直立不動で二人の再来を待ち構えていた。

「畜生、マジでヤバいぜ。このままじゃ本当に奴に勝てないまま終わっちゃうぞ」

「平然と永久——宇宙旅行だったか？とにかくそんなもん使ってくるとか空気読まないにも程があるだろ。下手に近づけやしねえ」

「二体一なら何とかなると思ってたんだが、まさかあそこまで自在に動けるとは思わなかったぜ。腱鞘炎はどうしたんだよ」

肩で息をしながら口々に愚痴をこぼし合っただけでは状況が変わらないのは彼ら自身が良く知っていた。額の汗を拭いながらダンが切り出す。

「で？どう切り崩すよ？」

「囲戦法も無駄ってわかったしな……守りにしろ攻めにしろ、隙が無いんだよなあいつ」

「それに剣とショットガンに気を取られてると、マントでグサリ、ときた。やってらんねえぜ——奴の攻撃が届かない位置ってどこだと思っ？」

「背中じゃねえの」

「やっぱそこしかねえよなあ……」

ダンがうんざりしながらそう呟いた時、彼らの背後から耳をつんざくような甲高い叫び声が轟いてきた。反射的に耳を塞ぎながらコーディーが観念したように言った。

「インターバルは終了のようだな」

「少しくらい待ちやがれってんだ」

苦い顔のまま重い腰を上げ、ゆっくりと斜面を登っていく。目指す先は処刑場。やがて見えてくるのは銀色の鎧を身に付けた処刑人やがて二人の姿を見据え、前方に立った人の皮を被った悪魔が愉快そうに唇を吊り上げた。

「是非も無し」

「笑ってんじゃねえよ！」

ダンがそう愚痴ると、信長が二人に突っ込んでいったのは同時だった。

姿勢を低くして両手を斜めに広げ、彼の側面から追従するように地面から噴き上がる火柱を味方につけ、風のような早さで信長が駆けていく。そして左足を踏み出すと同時に、信長が空高く跳び上がった。

火柱が噴き止む。何も言わずにショットガンをダンに向ける。

「俺かよ！」

ダンの回避は信長が引き金を引くよりも速かった。ダンが勢いよく側転してから一瞬後、それまで彼がいた地面を大量の鉛玉が挟んでいく。だが当たったかどうかを確認することなく、信長は引き金を引いた瞬間から既に次の相手に狙いを定めていた。長刀を逆手に持ち、猛烈な勢いでその切っ先をコーディーの頭部に振り降ろす。

「往ねい！」

「ちいッ……！」

その姿を見上げたまま、間一髪でコーディーが飛び退く。顔面をかすめた切っ先が手錠の鎖を粉々に砕き、地面に深々と突き刺さる。そして片膝立ちで顔を伏せたまま腕を伸ばし、信長がコーディーの鼻先にショットガンを突き付ける。

だが引き金を引こうとした瞬間、信長は反射的にショットガンを右肩越しに構え、そのままコーディーを無視して弾丸を発射した。
「我道拳！」

信長がコーディーに狙いを定めたのと同時に、ダンが信長の側面に立ち、気弾を発射したのだった。そして放たれたダンの気弾と信長の放った散弾が互いにぶつかり合い、両者の間で小さくスパークを起こす。

「無事か！コーディー！」

「お陰さまでな！」

そう口でダンに礼を言いながら、コーディーは既に攻撃動作をとっていた。両手を握り合わせ、ハンマーのように信長の頭部に容赦なく振り降ろす。

直撃。重い音と共に信長の兜がへこみ、体勢を崩した信長の体が地面に叩きつけられる。

「化物が……！」

さらにコーディーはトドメとばかりに、その無防備な背中を全力で踏みつけんとする。だが足裏が背中到達する直前、信長のマントが突如として赤いオーラを纏い、自我を持ったかのように伸縮してコーディーに襲いかかった。

「この野郎ッ」

「クソツタレ、あれがあつた！」

咄嗟に顔面をガードしたコーディーの両腕に、刃物の如き鋭利さを持ったマントの切れ端が、何本何十本、続々深々と突き刺さる。

しかしそれらを強引に振りほどき、コーディーは何とか信長と距離を取ることに成功した。

「おい！無事か！？」

両腕から血を流し、肩で息をするコーディーの元へ未だ無傷のダンが駆け寄っていく。そしてそれを見たコーディーは、まず傍に立ったダンを怒鳴りつけた。

「はあ……馬鹿が。俺の所に来てどうするんだ」

「ああ？俺はお前の傷が心配でわざわざ来てやったっていうのに、何だよその言い草は」

「あのマントが俺の方に意識を向けている隙に、我道拳なり何なりぶつ放しとけって言ってるんだよ」

「あ……」

呆氣にとられたダンが思わず信長の方を見やる。既に信長は立ち上がり、億劫そうに肩を回していた。

「退屈よ。やはり、うぬらは退屈よ」

間延びする声でそう呟き、直後に信長の嘲るような笑い声が辺りにこだまする。力無き者が聞けばたちまち意志を打ち砕かれる魔王の哄笑。だがそれを聞いたダンの心は、恐れよりも怒りに満ちていった。

「あの野郎、ふざけやがって……」

「話を逸らされた気もするんだが」

「んな訳ねえだろ。それよりコーディーよ。マジでどうする？このままじゃまた負けるぜ？」

「俺は参謀ポジションじゃない。そう作戦が何個も浮かぶ訳……」

そこまで言って、コーディーがふと再び地面から噴き上がり始めた火柱に注目する。

「正攻法で行けないんなら、搦め手で攻めるのもアリか」

「火達磨にしようってか？あいつに効くとは思えねえが」

コーディーとその視線の先にある火柱を交互に見比べてダンが呟く。そしてそれを聞いたコーディーが意地の悪い笑みを浮かべながらダンに返した。

「燃やすよりずっと良い方法だ」

コーディーの考えを聞いた時、ダンは疑念の眼差しを隠すことな

くコーディーに向けた。

「それ、上手く行くのか？」

「他に方法があるかよ」

「むう……」

だがそれ以外に妙案が無いのも事実だった。それでも一抹の不安は残る。

「しかしだな、誰がその役をやるんだ？」

「お前以外に居るか？」

「ああ俺か……いや、おい、どういう意味だ」

「見てわからないか？俺は腕がこうなつてて暫くまともに動かせないんだ」

「俺らもう死んでるんだぞ？その程度の傷なんぞどうってことないだろう？」

「気分の問題だ。ダルいからやってられん」

二人の会話を中断するように間近で火柱が噴き上がる。

「ちいっ！」

「うおっ！——ええい、くそ！——つ貸しだぞ！」

腕で顔を覆いながらダンがそう吐き捨て、若干震えながらも信長の前に躍り出て仁王立ちの体勢を取る。

「……」

口をしっかりと閉じて眉根に皺を寄せ、ダンが信長を睨みつける。

信長は黙ってそれを見返している。

鉛のような空気が二人を包む。

「行くぜ！」

気合一喝。押し潰されそうな重圧の中、ダンが目を大きく見開いた。

「——穀潰し！へっぴり腰！お前なんか余裕ツチ！やーいやーい！間抜け！若本！」

そして次の瞬間、ダンはいきつく限りの挑発を始めたのだった。言葉だけでなく、時に体を弓なりに反らして親指を突き立てたり、時に舌を出してこめかみに親指を押し当て他の指をピコピコ動かし

つつ小刻みにとび跳ねたりしながら、信長にウザい限りの罵詈雑言の嵐を吹きたてた。

「バーカ！バーカ！」

「……安い挑発よ」

一方、目の前で行われる醜態に信長はうんざりしていた。米粒程度とはいえ、期待していてこの様である。

「……」

だがそれまで身の内に抱いていた恐怖が無かったかのように、活き活きと挑発を繰り返すダンの姿に、信長はほんの少し興味を持った。本気で通用すると思っっているのか、ただの馬鹿なのか――

「……ふうむ」

まあよい。斬ればわかる。ほんの少し浮かべた笑みをかき消し、信長がダンの元へ真っ直ぐ駆けだした。ぐんぐん距離が縮まってく。だが魔王の到来を前に、ダンは挑発を止めなかった。何をするのか、信長はますます興味を湧いた。

そして互いの影が交差する。

「うぬらが真意、見届けようぞ」

「そんなに見たいか？」

だが信長が刀を振り上げた瞬間、背後から声がした。コーディーが右拳を目一杯振りかぶり、信長の後頭部に狙いを定める。

「隙だらけだ！」

しかし信長は振り返らなかった。振り返る必要も無かった。

背後から来ることなど承知の上。なればこそ、コーディーが殴るよりも速く、マントを命を吹き込んだかのように蠢動させ、コーディーの全身を刺し貫くことも容易であった。

「手ぬるいわ」

「が――」

「うつけめエ！」

信長の激昂に呼応するように、二人の近くで火柱が続々と吹き上がっていく。同時にマントがより深く、コーディーの体に突き刺さ

った。そして背後で串刺しにしたまま、憤怒の形相でダンの鼻先にショットガン突き付ける。だが全身から血を流し、口からも血を吐きながら、コーディーの顔には笑みが浮かんでいた。

「囧、囧か……ははっ」

「……何を笑っている。死を前にして狂うたか？」

コーディーが半開きの目で信長を睨みつける。

「……囧は俺だよ」

信長が一瞬目を見開く。一瞬の虚。それで十分だった。

信長の視界からダンが消え、直後、その体が一瞬宙に浮かび、うつ伏せの姿勢で地面に叩きつけられた。その時の衝撃でショットガンが手から投げ出され、コーディーもマントの針山から解放される。

「本命は俺様だよ！」

言うや否や、先程信長を足払いしたダンがその片足の先をひっ掴み、足を捻って信長を仰向けの姿勢にする。そしてそのまま、それまで火柱を上げていた地点まで猛スピードで引きずっていった。いつもならば転倒させた時点で追い打ちを仕掛けてきたのだが、今回のこれではマントも剣も届かない。辛うじて首を動かし、恨めしげな目つきでダンの背中を睨みながら信長が叫んだ。

「おのれ、小僧！火炙りにする気か！」

「そんなんじゃ足りねえだろ！」

そう言いながらダンが振り返ることなく信長を引きずり、やがてある地点の前で立ち止まる。そこは既に火柱を噴き上げ終え、只の穴と化した場所だった。首を動かし、片眼でそれを見た信長が顔を歪めた。

「貴様——」

「落ちな！」

信長が言い終えるよりも前に、ダンが両手で足を掴み直し一息に穴の底へと引きずり落とした。その途中で刀を持った手を蹴り飛ばし、最後の抵抗の芽を潰す。

「——」

足、腰、腹、胸、そして頭と腕。為す術も無く順繰りに穴底に落ちていく。そして次に消えるのが頭となった時、信長その頭を捻り、肩越しにダンと視線を交わらせた。

「――」

だがそれも一瞬。信長が落ち始めてから完全に姿を消すのに二秒かからなかった。落ちてから暫くして、その穴から一際大きな火柱が、地獄をも震わせる甲高い絶叫と共に噴き上がったが、信長が姿を現すことは無かった。

こうして、幾度となく二人を苦しめてきた信長は打ち倒された、ということになり、ダンとコーディーは晴れてこの世に帰ることが出来たのだった。

そうしてダンが一通り話し終えた後、「どうだ」と言わんばかりに鼻息荒く席に着く。

「どうだ！」

「言わなくていいから。態度でわかるから」

「おうそうか。で、どうだ？」

「しつこいわね」

ため息を漏らしながらアナザーブラッドが言った。

「ええ。凄いと思うわよ」

「ふっ、やはりそう思うか。まっ、この俺様とその相棒の手にかかりゃあ、このくらいは楽勝なんだがな」

「最初からその手を使えばよかったんじゃないあ……」

「失敗は成功の母ですよ」

不思議そうに呟くフィオナにオズワルドがフォローを入れる。

「型破りにも程がある戦法ですが、それだけに相手の意表をつける。」

私としては、戦術としては有りだと思いますが」

「そういうものなんでしょうかね？」

「それより貴方、それ本気で言っているのかしら？」

どうせ世辞なんだろう？その会話を耳聴く聞きつけたアナザーブラッドが、オズワルドに対してそう言外に告げる。それを受け、肩をすくめながらオズワルドが返した。

「ご想像にお任せしますよ」

「おいおい、俺達の戦い方にケチつけようってのか？」

「いや、実際褒められた戦いじゃねえだろ」

「うるせえ！大体考えたのお前だろうが！」

今まさに目の前で繰り広げられんとする言い争いに釘をさすように、アナザーブラッドが冷ややかな口調で言った。

「ところで、二人はまだ体力は残ってるのよね？」

「お？おう、まだまだ有り余ってるぜ」

「なら良かった。じゃあそれ食べ終わったら、紅魔郷三ボスから再開するから。そのつもりでね」

「……え？」

突然のその言葉にダンが目丸くする。その一方、了解したオズワルドとフィオナはおもむろに一礼し、揃って食堂から立ち去っていった。

「いや、おい、マジかよ」

残されたダンが苦し紛れに言うと、それに対してコーディーが腕を後ろ手に組みながら、あっさりとした口調で返した。

「腹くくれよ。大体お前何のために生き返ったと思ってるんだ？」

「そりゃあお前、確かに撮影するただけだよ。だからって早くねえか？ここはもう少し休んで英気を養ってから再開するのが筋つてもんだろ。お前は納得したって言うのかよ？」

「嫌に決まってるんだろ。でも納得するしか道は無いだろうが——」
「道だあ？」

コーディーが視線をアナザーブラッドに向ける。

「あいつに反論できるのか？」

ダンがコーディーの視線を追う。その先に、腕を組み、血のように真っ赤なオーラを滾らせ、地獄の笑みを浮かべたアナザーブラッドの姿があった。

「反論があるなら聞いわよ？」

大気が重苦しく震え、館全体が悲鳴を上げるように軋み始める。
「聞いわよ？」

「ゴメンナサイ」

ダンが土下座するのに一秒も要らなかった。

第二十三話「悪ノ娘」

上白沢慧音の人間への愛情、友情は、文字通り海よりも深く、山よりも高いものであった。自ら人里に降りて寺子屋を開き、有事の際には自らの能力を以て人里を守護する。誰に頼まれたのでも無く、見返りを求めることも無く。ただ自らの意志で、ひたすらにあらゆる人間を支え、正し、護っていく。

何が彼女をそうさせたのか？それを探るのは無粋と言うものである。何があつたにせよ、彼女のその愛は本物だからだ。

「く……っ」

「おい」

「……？」

「どうしたんだ、こんなところで座りこんで？かなり疲れがたまっているように見えるが」

「いえ、私は」

「ここだとゆっくり休めんだろう？私の家に案内しよう。私の肩を貸す、歩けるか？」

里の隅で蹲っていた、疲労困憊とはいえ見えず知らずの少女を躊躇いもせずに助けたことが何よりの証拠である。

それから数分後、慧音は件の少女と共に自宅の床の間に居た。床は畳張りで、壁には掛け軸、隅には綺麗に整頓された書物の山、そして二人の間には湯呑と急須の置かれたちゃぶ台があつた。二人はここに向かう途中、互いに自己紹介を済ませていた。

少女はナコルルと名乗った。

「落ち着いたか？」

ちゃぶ台の向こう、茶を注いだ湯呑を差し出しながら、優しい口調で慧音がナコルルに言った。それを受け取り、緊張が解けたように頬を緩ませながらナコルルが返す。

「はい。ありがとうございます」

「まだ熱いからな。飲む時は気をつけるんだぞ」

「あ、あつっ！」

「……まったく」

反射的に湯呑から口を遠ざけ困った表情を浮かべるナコルルを見て慧音が苦笑すると、ナコルルもつられて笑みを浮かべる。やがて湯呑を置いて居住まいを正し、ナコルルが慧音に安心しきった口調で言った。

「上白沢さん。この度は本当にありがとうございます」

「気にするな。困った時はお互いさまだ」

「……本当に、感謝してもしきれません。見ず知らずの私に、ここまでして頂くんなんて」

「今更そんな他人行儀にならなくてもいいだろう、くすぐったい。それに私の方は、君のことは多少なり知っているんだがな」

「え？」

きょとんとするナコルルに慧音が言った。

「君はほら、あれだろう？ 妖々夢の自機役の一人」

「は、はい。博霊霊夢役です。でも、なぜそれを？」

「パンフレットを貰ってるからな」

「——ああ」

合点がいったようにナコルルが頷く。その一方で初めて見た時のナコルルの様子を思い出しながら、一頻り茶をすすった後で慧音が言った。

「満身創痍——ボスに振り返ちにされたか」

「……はい。私の無力さが恨めしいです」

「どこで躓いたんだ？ 言いたくなければ言わなくてもいいが」

「……四面です」

「四面。あの三姉妹か」

プリズムリバー三姉妹。あそこは本編では姉妹単体の弾幕の難易度も高いが、最終的には三体一で戦うことにもなっている。その辺りを全て再現しようものなら、確かに初見で突破するのは難しくなるだろう。

「まあそう落ち込むな。人間は負けて成長するものだ」

「それは、そうですが、しかし——」

「上白沢殿！」

その辺りを考慮した慧音が慰めるようにナコルルに言い、それにナコルルが返そうとした時、それを遮るように勝手口の外から、雷鳴の如き爆声が轟々と轟いて来た。

「上白沢殿！指定された品、全て持参して参りました！」

「——相変わらずやかましいな」

そう言って渋い表情で立ち上がる慧音を引きとめるように、ナコルルが困惑気味に尋ねた。

「あ、あの、どなたですか？」

「ん？ああ、彼らのことか——お前と同じだよ。私が保護した自機役の二人だ」

「上白沢殿！こちらは両手が塞がれている故、戸を開けて頂きたいのでござるが！」

「保護？」

「道中で道に迷ったらしい。それにしても、少しは近所の迷惑というものを考え——」

「上白沢殿オ！留守でありましょうか！？返事をしてください！上白沢殿オ！」

ビシィ。

慧音の額に青筋が浮かんだのをナコルルは見逃さなかった。

「——少し待っていてくれ。やることもある」

静かに怒りを湛えながらそう血の気の引いたナコルルに告げた後、慧音が大腿で玄関口に近づき、勢いよく戸を開ける。

「おお！上白沢ど」

そして杭打ち機の如き激烈さで、真田幸村の額に頭突きをぶちかました。

「少しは身の回りのことを考える！」

「め、面目次第もございませぬ……」

それから数分後、床の間では正座した幸村を見下ろすような格好で仁王立ちした慧音が説教をしていた。その慧音の後ろにナコルル、幸村の横には黒づくめの細身の男が腕を組んで立っていた。

「騒音被害で訴えられても知らんぞ！」

「あ、あの、慧音さん」

「大体——ん？なんだ？」

額から汗を流しながら振り返る慧音に、躊躇いがちにナコルルが言った。

「もうあの人も反省しているようですし、それくらいで終わりにしてもいいんじゃないでしょうか？」

「いや、しかしだな」

「始めてから二十分経つ。十分すぎんだろ」

黒づくめの男がだるそうに口を開く。それが決め手になったのか、やがて全身から力を抜き、慧音が幸村に言った。

「まあ、次からは気をつけるんだぞ？声量の調節はしっかりとな」

「はっ。肝に銘じておきまする」

そう言つて深々と頭を下げる幸村を見届けた後、慧音もその場にゆっくりと腰を降ろす。そしてナコルルの方を向き、慧音が落ち着いた口調で言った。

「すまない。お前のことをすっかり忘れていた。私の方も周りが見えていなかったようだ」

「いえ、お気遣いなく。ところで後ろの——」

「……ああ、そういえば、三人とも自己紹介がまだだったな。ちょっといい。お互い挨拶しておくんだぞ」

「やだよ。面倒くせえ」

「K、殿、名を名乗るのに面倒臭いとは何事でござるか」

「じゃあお前からやれよ」

K、と呼ばれた男がそう言ってそっぽを向く。一瞬きょとんとした幸村だったが、すぐにナコルルの方を向き、気合のこもった顔でその目をじっと見つめながらきはきとした口調で答えた。

「某は真田源次郎幸村。先程は大変なご無礼を働いてしまい、申し訳ありません。この上はいかなる処罰をも——」

「いえ、私も特に気にしていないので、そんなにかしこまらなくても大丈夫ですよ？」

「……な……」

「な？」

「なんと寛大なお心！」

突如片膝立ちになり両拳を握り締め、天井を見上げながら幸村が吼えた。

「このような地でこのような御仁と出会えるとは！この幸村、そなたの優しき心に触れ、魂が感動で打ち震えておりますぞ……！」

「ええ！？……ええつと……」

その様に思わずナコルルがたじろいでいると、横に控えていた慧音がナコルルに耳打ちした。

「悪い奴じゃないんだが、こういう奴なんだ。慣れてやってくれ」

「は、はあ……」

「まあ、付き合ったら慣れるさ——あとは」

そう言って慧音がK、を見つめた。

「次はお前の番だぞ？」

「いいつつてんだろ」

「今日のお前の晩御飯は無しだな」

「……ちっ」

あつけなく折れたK、が首だけ動かしてナコルルの方を見ながら、
「……K、」

そうひとこと言つて再びそっぽを向く。そしてそれを見た慧音が
ため息をつきながらナコルルに言つた。

「あいつも悪い奴じゃないんだがな……」

「なんだか対照的な二人ですね」

暑苦しいまでに熱血なタイプとどこまでも冷め切ったタイプ。そ
んな二人を見比べたナコルルの素直な感想を受けて、慧音が答えた。
「いや、そうでもないぞ？表面は全く違うように見えるかもしれん
が、根つこの部分は二人ともそう変わらんものだ」

「そうなんですか？」

「ああ——なあ幸村」

「……む？何でありましょうか？」

そこで慧音が不意に、それまで先ほどまでの体勢のまま微動だに
していなかった幸村に声をかけた。

「すまないが、奥の部屋に行つて湿布を持ってきてくれないか？彼
女の打ち身がまだ治りきつていないんだ」

「なんと、怪我をされておられるのですか？」

「ああ。永遠亭の品なら貼るだけで効果が現れるだろうからな。頼
めるか？」

「はっ！直ちに！」

「K、も一緒にな」

K、が慧音と目を合わせ、続けてチラとナコルルの方を見る。

「……わかつてるよ」

そして力強く飛び出した幸村と気だるげながらも素直に従つてそ
の場を後にするK、の背中を見つめながら、小さく笑みをこぼして
ナコルルに言つた。

「な？言つた通りだろう？心根は優しい連中なのさ」

「……K、さんの場合は、断つたら晩御飯抜きになるって思ったか

「じゃあ……？」

「はっはっは、なにをいつているのかてんでわからないなあ」

ナコルルの指摘に対して、慧音は若干棒読み気味に返したのだった。

「助太刀、でござるか？」

それから暫くして、ナコルルに湿布を貼り終えた慧音が不意に出した提案に、ナコルルの正面で正座していた幸村が声にして返した。それを受けて慧音が頷きながら言った。

「ああ。彼女がやられた面のボスなんだが、本編では三人一組で行動している連中だな。案の定、今回もどうやら三人一組構成らしく、一斉に彼女に襲ってきたらしい」

「なんと……いくら戦とはいえ、女子相手に三人がかりとは……」

そう言って顔を渋らせる幸村に、壁に背を預けて立ち続けていたK^レが言った。

「何言つてんだ。数で攻めるのは常套手段だろうが」

「それはそうでござるが……しかし、例えそうだとしても、某には到底受け入れられるものではござらぬ。そもそも某は、弾幕勝負とは決闘のようなものと聞き及んでござる。そして決闘とは、本来一対一で行うものである」

「幸村の言い分もわかるが、K^レの言ももつともだ。例え道義に反する行為だとしても、それが立派な戦術であることに変わりはない。そして、弾幕勝負が決闘だとして、今回の勝負が果たして弾幕勝負となるのか。そもそも弾幕勝負はすべて決闘となり得るのか——これに対する回答如何で今回の論争の答えが変わる訳だが、今はそれは重要なことではない」

「では、今重要とすべきこととは？」

「この後コンティニューしたとして、再び返り討ちに遭わないためにはどうすればよいか、ということだ」

「目には目をか」

K、の言葉に慧音が頷く。

「向こうが三人で来るなら、こちらも三人で行けばいい。数的には同じだから、卑怯ではないはずだ」

「なるほど！それならば、確かにナコルル殿の負担も減りましょう！」

「おい待てよ」

自分のことのように喜ぶ幸村を尻目に、K、が眉間に皺を寄せながら慧音に強い口調で言った。

「どうした？」

「その三人てのは誰だ？」

「決まってるだろう。ナコルル、幸村、お前だ」

「ふざけんな。俺は」

「晩飯」

「――」

反抗終了。口を半開きにしたままK、が硬直する。

「……そんなに逼迫してるんですか、あの人？」

「どうやらそうらしいのでござるが、某も詳しいことは何も……」
不思議そうに会話を交わすナコルルと幸村を尻目に、慧音が立ち上がりながらやけに明るい口調で言った。

「さて、役者は揃ったな！新生妖々夢自機組の完成だ！後はナコルル、お前次第だ」

「え？あ、はい！」

いきなり名前を呼ばれたナコルルが反射的に背筋を伸ばす。それを見た慧音が満足そうに頷きながら言った。

「よし、いい返事だ。ではナコルルの体力が回復し次第、出発ということにしようか。二人もそれでいいな？」

幸村が正座したまま慧音の方を向き、K、が壁から背を離して直

立する。

「無論！」

「めんどくせえ」

そして力のこもった声とどこまでも面倒臭そうな声が同時に室内に響いた。

数十分後。東方妖々夢四面。

そこには雲海を下から突き破るようにして規則正しく並べられた四本の四角柱と、その向こうに物々しい封印を施された巨大な門が鎮座し、そして角柱に囲まれるようにして雲のように白い石畳みの足場が組まれていた。

そこは簡単に言ってしまうえば、現世と冥界を繋ぐ場所、あの世とこの世の境目であった。なぜそんなものが平然とあるのか？幻想郷だからである。

ちなみにこの足場は今回のために特別に拵えられたものであり、本来はこのようなものは存在しない。

「しかし、我らはいったいどうやってここまで来たのであろうか？」

「くだらねえこと言ってんじゃねえ」

そして件の三人は、なんとかしてこの門の前に辿り着き、特設の石畳の上で四面ボスを今か今かと待ち構えていたのだった。

「で？お前を負かした相手ってのはどんな奴なんだ？」

待っている途中、不意にK^レがナコルルに尋ねた。いきなりのことと若干戸惑いながらも、ナコルルがそれに答えた。

「あれは、三人一組の——なんて言えばいいのかしら。人の形をした金属というか、鉄の塊というか」

「人の形をした鉄？」

「ロボットか」

K、の言葉を聞いた幸村が彼に尋ねた。

「K、殿、その『ろぼつと』とは、どのような物でござるうか？」

「見りゃわかる」

「まあ、それはそれで」

「オーツホツホツホツ！」

ナコルルの言葉をかき消すように、突如としてどこから甲高い笑い声がこだました。

「誰だ！？」

驚いた三人がその声の先に目を向けると、そそり立った柱の一つ、その頂点に、三人の人影が見えた。

その真ん中に立つのはドレス姿の小柄な少女。その少女の左右に、皺だらけの老人と、肩幅の広い大男が控えていた。

「ナコルル殿、もしや彼らが？」

「ええ」

「普通の人間じゃねえか」

「こーらお前たち！姫様の前口上より先に喋っちゃダメでしょーが！」

三人の会話を聞きつけた老人の不意の叱咤に、思わず三人が押し黙る。そしてそれを見た老人が満足そうに頷くと、それまでとは違った優しい声色で真ん中の少女に言った。

「ささ、姫様。改めてどうぞ」

「うむ。ゴホン——この世の正義は許さない！悪のプリンス・デビロツト参上！小娘め、また性懲りもなく現れおつて！」

そして真ん中の少女——デビロツトが胸を張り、子供特有の高い声色で以て嘲笑するかのように叫び始めた。

「一度我らに負けたというのに、もう一度負けるためにやってきたというのか？面白い娘よ。ならばその期待に応えてやるとしよう！」

「あいにくですけど、同じ相手に二度も負けるつもりはありません！」

「一度勝ったからと言って、次も勝つとは限らぬ！」

「そういうこと言ってるあとで後悔するぜ」

負けじと放たれたナコルルたちの力強い言葉を受けて愉快そうに眉を吊り上げ、デビロットが言った。

「ほお？揃いも揃って言うではないか。だがそれでこそよ！それでこそわが宿敵よ——地獄大使！」

「ははっ！」

「アレを出すのだ！奴らに目に物みせてやれ！」

「ははーっ！」

そしておもむろに地獄大使と呼ばれた老人が、懷から三つの機械を取り出した。それは直方体の箱にレバーが二つついたりモコンのようなものだった。そしてデビロットと大男——Dr・シュタインに渡されていくそれを見たナコルルの顔色が瞬く間に変わり、反射的に二人に言った。

「二人とも気をつけて！」

「ああ？」

「ナコルル殿、いきなりどうされたのでござるか？」

「奴らが来ます！」

ナコルルが叫んだのと、三人の目の前に三体の巨人が派手な音を立てながら落着いたのはほぼ同時だった。曲げた膝をゆっくりと伸ばし、目を赤く光らせターゲットを捕捉する。

「ターゲット 視認」

「ターゲット 視認」

「遠隔操縦モード 移行」

「——来た！」

「き、巨大な……！」

「センチネルかよ……」

そこにそびえたつのは、三メートルはあろう三体の青色の巨人。それを見たナコルルは顔をしかめ、幸村は驚きのあまり呆然となり、Kは面倒臭そうに頭をかいた。そんな三者三様の反応を楽しむように見回しながら、デビロットが地獄大使から受け取ったりモコン

を手にしたまま、高らかに言い放った。

「何人来ようが同じことよ！わが悪のロボット軍団の力、見せつけてくれるわ！行くぞ！」

掛け声とともに三人揃ってレバーを倒す。それに反応した三体のセンチネルが、脛の裏のカバーを開いてブースターを展開し、猛然とナコルルたちに襲いかかる。

「臆してはダメ……今度こそ、絶対に勝つ！」

「炭にしてやるよ」

「いざ尋常に勝負！」

その身に宿すのは、恐怖ではなく覚悟。

必勝の信念を胸に秘め、ナコルルたちは巨人めがけて臆することなく駆け出して行った。

第二十四話「戦闘潮流」

デビロット・ド・デスサタン？世。魔王を父親に持つ彼女はまだ子供ながら、その心に強大すぎるほどの悪としての信念と野望を漲らせていた。己の目的のためならば手段は選ばず、己の悪の美学に反する者、悪の美学を邪魔する者は容赦なく排除する。この時すでに、彼女は『悪の帝王』としての資質を完璧に備えていた——と、見ることも出来る。

ただ、それらは言い方を変えてしまえば、プライドが高く非常に我儘であるとも取れる。大体、紅魔郷二面ボスが本来の役どころである彼女が妖々夢四面まで出張っているのも、そもそも紅魔郷の時に謎の紅白女に惨敗を喫したことに對する憂さ晴らしという面があった（彼女は内心否定しているが）。

そんな彼女にとって、目の前にいるナコルルとかいう小娘は非常に都合がよかった。一回叩きのめされたというのに、すぐにまた傷を癒して立ち向かってくる。頭数が増えていたのは少々誤算だったが、それでもなお、今のデビロットにとってナコルルは、これ以上ないサンドバッグであったのだ。

「さあ者共！彼奴らを叩きのめしてしまえ！」

「アイアイサー！」

そうとも、サンドバッグ相手に負けるはずがない。センチネルを動かしながらデビロットはそう確信していた。VAには劣るとはいえ、こちらが持っているのはあの対ミュータント用兵器なのだ。デビロットは今度の戦いも勝利するものなのだと心の中で断言した。

しかし、現実是非情であった。

一直線に並んで突っ込む三体のセンチネルに対し、ナコルルたちは初めから左端の一体に的を絞って駆け出していた。そして三人のうち、最初に懷に潜り込んだのは幸村であった。

「止めるッ！」

逆手に持った二本の槍を交差させるように、その刃先を地面に突き刺し、その槍と自身の体で以てセンチネルの突撃を妨害した。当然、その進行を完全に止めることなど不可能であり、鋼の巨体とがち合った幸村の体は、その瞬間からずると槍ごと後方へと押し戻されていった。しかしそれでも、そのセンチネルのスピードは確実に落ちていた。

「借ります！」

続いてナコルルが、そう叫ぶなり幸村の背を踏み台にして高々と飛翔する。この時ほかのセンチネルも左端の一体に群がるターゲツトに気付いたが、ナコルルの行動を阻止するには反応が遅すぎた。

「ええいつ！」

気合一闪。両手で逆手に持った小刀を、勢いよくセンチネルの頭頂部に突き刺す。与えた傷は浅かったが、それでも頭から煙を出し、その勢いがますます殺がれていく。ナコルルが小刀を引き抜き飛び降りると同時に、最後にそのセンチネルの眼前に現れたのはKだつた。

「シヤラアアアアーツ！」

それまでの冷静さとはかけ離れた叫び声をあげながら、空中を突進しながらセンチネルの顔面にとび蹴りを食らわせる。その一撃がトドメとして効いたのか、食らったセンチネルの巨体が大きく揺らぎ、そして重い金属音をがなり立てながら呆気なく後ろに倒れていった。

「ば、馬鹿な！」

「ありやあ、やりますねえ。前より人数が増えたからかしら？」

「そんなのんきなことを言っている場合ではないぞ！どうするのだ地獄大使！」

そう怒鳴り散らすデビロツトとは対照的に、地獄大使の方は顔にまだまだ余裕たっぷりの笑みを浮かべていた。

「心配はいりませんよ姫様。あのセンチネルがこの程度でオジャンになるわけないじゃないですか。それ！」

そういつて再びレバーを動かすと、ああむけに倒れていたセンチネルが背面の全ブースターを展開し、直立のまま起き上がった。すでに頭の煙は消えうせ、蹴り飛ばされた顔面にもまるで傷がついていなかった。

「やっぱり堅い……！三人ならいけると思ったけど、このままじゃいずれ追いつめられる……！」

「なんと、あれだけ食らってまだ立てるとは！」

「ほーっほっほっほっ！このセンチネルが、そちたちの猪口才な攻撃程度で怯むものか！」

「——くっ！」

「どうだ？降参するなら今のうちじゃぞ？今なら改造手術程度で済ませてやろう——ただし脳はこっそり入れ替えるがな」

「さすが姫様！悪の中の悪！」

「おーっほっほっほっ！」

「うるせえよ」

聞く者の神経を逆なでるようなデビロツトの甲高い笑い声を、Kが苛立たしげに遮る。

「ブッ倒れるまで殴ればいいだけだ」

「愚かな。できると思っておるのか？」

「やってみなければわからぬ！この真田幸村、たとえどのような相手であろうと、決して膝を折ったりはせぬ！」

「ま、待つてください！」

眉根に皺を寄せながらセンチネルに向けて敢然と歩きだそうとした二人を、ナコルルが手を広げながらその前に立ちふさがる。勢いをそがれたKが、不機嫌さを隠そうともしないでナコルルに言った。

「どけ。俺は奴に用がある」

「あの敵と真つ向から戦うのは危険です。ただでさえ頑丈なうえに、彼らは連携して襲ってくる。集団で来られたら私たちに勝ち目はありません」

「やってみなきゃわからねえだろうが」

「まだステージは残ってるんですよ！ここでもう一回全滅したら、後がなくなります！ここは正面からぶつかるとはではなく、もっと別の方法で——」

「いかん！避けられよ！」

ナコルルの言葉を遮るように幸村が叫ぶ。それを聞いた二人が反射的に左右に跳び、幸村もそれに続く。その直後、二人のいた位置にロケットパンチが撃ち込まれる。そして拳が引き抜かれ、下の雲海を望める、ぽっかりと空けられた穴をその場に残す。

「ナコルル殿！このままではいたずらに足場が消えていくのみでございますぞ！早々に手を打たねば危険でござる！」

「じゃあお前はとうしたいんだよ？」

幸村とK、の言葉にナコルルが頷く。

「私に良い考えがあります。相談したいことがあるので、一度集まってくれませんか？」

そういったナコルルの瞳には、勝機をつかんだ力強い輝きがあった。

「お願いします」

そうして三人が一か所に集まっていくのを、デビロットは見逃さなかった。

「愚か者め！一か所に集まるなど、一網打尽にしてくれと言っているようなものではないか！」

「姫様、もう一氣にばーつとやつちやいましょうかねえ」

「うむ！地獄大使、Dr・シユタイン！奴らに引導を渡すでしょうぞ！」

デビロットの掛け声に合わせて、三人が同時にレバーを倒す。すると三体のセンチネルが同時に動き出し、ブースターを使い地面を滑るように動きながら、やがてナコルルたちを遠巻きに包囲する。

「単純に倒すのはつまらん！叩き落としてやるのだ！」

デビロットの命令に答えるかのようにセンチネルが右腕を斜め下に向けてまっすぐ伸ばし、腕内部のピストンを伸ばして拳を打ち出し、白い足場にたたきつける。するとその位置には呆気ないほど簡単に穴が開き、そしてまたぶつけた拳を回収することに微妙に角度をずらし、三体がかりで円を描くかのように次々と足場に穴をあけていった。

そしてその円の中央、ナコルルたちは互いに背を寄せ合い、苦々しい表情を浮かべていた。その進退窮まったような顔を見ただけでも、デビロットは大いに満足であった。これだから悪はやめられない――

「……む？」

不意に、デビロットの表情に翳りが生じた。足下に見えるナコルルたちの表情が変わったからだ。それまで諦観の色を見せていたその顔が、今ではもう勝ったかのように不敵な笑みを浮かべてさえいる。それが彼女には気に食わなかった。

「ええい、追いつめられているというのに、なんなのだあの不愉快な顔は！もつと悔しがらぬか！」

そう言いながらデビロットが地団太を踏む隣で、地獄大使がナコルルたちの方を指さしながらデビロットに言った。

「ああー！？姫様、姫様！なんか変でございますよ！」

「どうしたのじゃ、何が変なのじゃ！？」

言いながら地獄大使の指さす方を見ると、そこには腹を括ったかのように、三体のセンチネルに正面から攻撃を仕掛けるナコルルと

黒服の男の姿が——一人足りない。

「あの赤い奴はどこじゃ？」

ナコルルも黒服の男も、三体のセンチネルに翻弄され、一方的に攻撃を食らってはゴム鞠のように足場にたたきつけられている。爽快な光景ではあったが、デビロットは地震の胸中にある正体不明の不安を拭うことができなかった。

「あの赤い奴はどこいったのじゃ！よもや彼奴一人で逃げたのではあるまいな！」

「そんなまさか。ここから地上までどれくらいあると思ってるんですか？そんなわけ無いじゃないですか」

「……」

デビロットと地獄大使の口論を遮るように、Dr・シュタインが無言で柱の真下を指さす。

「む？どうしたのじゃDr・シュタイン？」

「はいはいなんですって……真下を見るですって？」

そうしてデビロット他二人が柱の真下に視線をおろす。

「天！覇！絶槍！」

そこにはそう絶叫しながら、柱に炎を纏った槍をぶち当てんとする赤い男の姿があった。

「やった！」

肩で息をしながら、ナコルルは幸村がデビロット一味の陣取る柱を粉々にした所を見届けて歓喜の声を上げた。Kも口にはしなかったが、それを見ながら小さく笑みをこぼす。そして後には粉碎され宙に舞った柱の破片に次々飛び移り足場へ帰っていく幸村と、なす術なく地上に落下していくデビロット一味の姿があった。今まで散々痛めつけてきたセンチネルも、今では完全に沈黙している。

「ナコルル殿、やりましたぞ！」

「はい！おかげで一矢報いることができました」

会心の笑みを浮かべながら駆け寄ってくる幸村に、ナコルルが嬉しそうに返す。そしてK、と幸村を交互にみやり、改めて深く頭を下げた。

「あなたたちがいなければ、突破することはできませんでした。本当にありがとうございます」

「何を申されるか。某の方こそ、まっこと貴重な体験をさせていただき、まさに万感の思い！礼を申すのはこちらの方でござる」

「相変わらず暑苦しい奴だ」

そう吐き捨てながら歩き出すK、を止めるように、ナコルルが口を開いた。

「あの、K、さん、どこに行くんですか？」

「――五面に決まってるんだろ」

「え？」

K、が首だけ振り返らせてナコルルの方を見やる。

「とつとと終わらせて帰るぞ」

「――はい！」

言い終えて再び急そうに歩くK、を追うように、ナコルルと幸村がその後続く。

――この人たちと一緒になら、クリアできるかもしれない。

そしてこの時ナコルルは、この正反対な二人のことを、最初に出会った時よりもずっと信頼するようになっていた。

同時刻。人里。

ある男が、長屋の壁の一角に張り付いてある作業に没頭していた。

「~~~~~」

鼻歌のリズムに合わせて小刻みに体を揺らし、壁に自分の背丈ほどある一枚の紙を貼りつけていく。その姿を見た一人の人里の子供が、物怖じすることなく男に近づいて言った。

「おじさん、何歌ってるの？」

「ん？これか？」

男が振り向くことなく、子供に言った。

「ヒーローの歌さ。夜の街を駆ける一般市民の味方のテーマだ」

「ふーん」

無関心そうにそう頷いた後、子供が再び男に尋ねた。

「おじさんは今なにやってるの？」

「何って、見てわからねえか？」

貼りつけた肩幅ほどの紙を伸ばすように、顔の位置に置いた両手を足元の位置にまで降ろしていく。そうして跪いた格好になりながら、男が子供に顔を見せることなく言った。

「ポスター貼ってるんだよ」

「ポスター？」

「ああ」

貼り終えたそれをゆっくり見上げながら、男が言った。

「ビッグショウの開催告知さ」

第二十四話「戦闘潮流」(後書き)

デビロツト・ド・デスサタン?世(登場作品:サイバーボッツ)
自称「悪のプリンセス・デビロツト」。タコ型のVA「スパー8」
を駆り、付き人の地獄大使と天才科学者のDr・シユタインを引き
連れ、あらゆる正義を打ち砕いていく。本編で書いた通りの性格を
しているが、どこか憎めない。彼女のシナリオでは人道に外れるこ
とを平然としたり、最終的には銀河規模でのもんでもないことをや
らかしていたりするのだが、やはりどこか憎めない。というか危機
感を感じない。要はコメディリリーフである。某ドロンボーと一緒に
である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9739v/>

実録「東方Project」

2011年10月24日01時07分発行